

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第121集

いち なわ かみ  
市納上第1遺跡  
市納上第4遺跡

Itinawakami1 Site  
Itinawakami4 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書26

2006

宮崎県埋蔵文化財センター

# 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

本書に掲載した市納上第1遺跡・市納上第4遺跡は、平成16年度に発掘調査を行ったものです。川南町に所在し、市納上第1遺跡では弥生時代の竪穴住居跡などの遺構や遺物が確認されました。一方、市納上第4遺跡では後世の削平により遺構は検出されませんでした。一方、縄文時代後期の土器や石器が数多く出土しました。

これらの遺構・遺物は、川南町における山間部の様子的一端を示すものであり、特に縄文時代後期の遺物は、川南町では調査の数が少なく、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものと考えられます。ここに報告する内容が学術資料となるだけでなく学校教育や生涯学習の場などで活用され、また埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・御協力を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 宮園 淳一

# 例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した児湯郡川南町所在の市納上第1遺跡及び市納上第4遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測等の記録について、市納上第1遺跡は森本征明・山田洋一郎・長友久昭が行い、市納上第4遺跡は岡田諭が行ったほか、発掘作業員が補助した。
- 4 整理作業は埋蔵文化財センターで行い、実測図の作成及び浄書について土器は森本・岡田が行い、石器は本センターの藤木聡が行ったほか、整理作業員が補助した。
- 5 現地での写真撮影は市納上第1遺跡は森本・山田が行い、市納上第4遺跡は岡田が行った。また出土遺物写真は、市納上第1遺跡は森本、市納上第4遺跡は岡田が行った。
- 6 市納上第1遺跡の空中写真は（株）九州航空に委託した。また自然科学分析は（株）古環境研究所に委託した。
- 7 本書に使用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の1/25000地形図をもとに作成した。また遺跡周辺地形図等は日本道路公団宮崎工事事務所から提供の1/1000測量図をもとに作成した。
- 8 本書で用いた標高は海拔高であり、方位は座標北（G.N.）を基本とし、遺構実測図等の一部に磁北を（M.N.）を用いた。
- 9 国土座標は、国土座標第Ⅱ系を基に設定している。
- 10 土層及び土器の色調については農林省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に準拠した。
- 11 本書の執筆・編集は森本・岡田が担当した。
- 12 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

# 本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第Ⅱ章	遺跡の環境	
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第Ⅲ章	市納上第1遺跡の調査	
第1節	確認調査の概要	4
第2節	調査の経過	5
第3節	整理作業と報告書作成	5
第4節	基本層序	6
第5節	旧石器時代・縄文時代の遺物	6
第6節	弥生時代の遺構と遺物	8
第7節	中世の遺構と遺物	17
第8節	自然科学分析	18
第9節	まとめ	21
第Ⅳ章	市納上第4遺跡確認調査	
第1節	遺跡の立地	29
第2節	調査経緯と方法	29
第3節	層序と旧地形復元	31
第4節	出土遺物	31
第5節	まとめ	32

第9図	1号竪穴住居跡	9
第10図	1号竪穴住居跡出土遺物	9
第11図	1号周溝状遺構	10
第12図	1号周溝状遺構出土遺物	11
第13図	1号周溝状遺構フローテーション法区割図	11
第14図	Ⅱ層包含層出土遺物(1)	12
第15図	Ⅱ層包含層出土遺物(2)	13
第16図	Ⅱ層包含層出土遺物(3)	14
第17図	中世遺構配置図	17
第18図	溝状遺構出土遺物	17
<b>市納上第4遺跡</b>		
第1図	トレンチ配置図	30
第2図	土層断面図(1)	33
第3図	土層断面図(2)	34
第4図	土層柱状図	34
第5図	土層断面図(3)	35
第6図	出土土器(1)	36
第7図	出土土器(2)	37
第8図	出土土器(3)	38
第9図	出土土器(4)	39
第10図	出土石器(1)	42
第11図	出土石器(2)	43
第12図	出土石器(3)	44
第13図	出土石器(4)	45
第14図	出土石器(5)	46
第15図	石錘の長軸と重量の関係	47

# 挿図目次

<b>市納上第1遺跡</b>		
第1図	遺跡の位置と周辺地形図	3
第2図	確認調査のトレンチ配置図	4
第3図	確認調査の出土遺物	4
第4図	グリッド配置図	5
第5図	旧石器時代の遺物	6
第6図	Ⅲ層下位トレンチ配置図	7
第7図	縄文時代の遺物	7
第8図	弥生時代遺構配置図及びⅢ層地形図	8

# 表目次

<b>市納上第1遺跡</b>		
第1表	フローテーション法洗浄結果(1)	11
第2表	フローテーション法洗浄結果(2)	11
第3表	石器観察表	15
第4表	土器観察表(1)	15
第5表	土器観察表(2)	16
第6表	土器観察表(3)	17
第7表	試料と方法	18
第8表	測定結果	18

#### 市納上第4遺跡

第1表	基本層序	34
第2表	土層観察表	35
第3表	土器観察表(1)	40
第4表	土器観察表(2)	41
第5表	石器観察表	47
第6表	石器石材分類	47

## 挿入写真目次

#### 市納上第4遺跡

写真1	調査前風景北尾根部	30
写真2	調査区風景(北尾根部から南尾根部を望む)	30
写真3	5 T遺物出土状況	30
写真4	3 T遺物出土状況	30
写真5	4 T盛土検出状況	31
写真6	6 T溝断面	31
写真7	6 T全景	31

## 図版目次

#### 市納上第1遺跡

図版1	市納上第1遺跡全景	23
	市納上第1遺跡全景(北から)	23
図版2	1号竪穴住居跡遺物出土状況	24
	1号竪穴住居跡	24
	1号周溝状遺構遺物出土状況	24
	1号周溝状遺構	24
	溝状遺構	24
	溝状遺構断面	24
図版3	旧石器時代の遺物	25
	縄文時代の遺物	25
	1号竪穴住居跡出土土器(1)	25
	1号竪穴住居跡出土土器(2)	25
	1号周溝状遺構出土土器(1)	25
	1号周溝状遺構出土土器(2)	25
図版4	1号周溝状遺構出土土器(3)	26
	1号周溝状遺構出土土器(4)	26

	1号周溝状遺構出土土器(5)	26
	1号周溝状遺構出土土器(6)	26
	II層包含層出土土器(1)	26
	II層包含層出土土器(2)	26
図版5	II層包含層出土土器(3)	27
	II層包含層出土石器(1)	27
	II層包含層出土石器(2)	27
	溝状遺構出土土器	27

#### 市納上第4遺跡

図版1	出土土器(1)	49
	出土土器(2)	49
図版2	出土土器(3)	50
	出土土器(4)	50
図版3	参考資料(土器)	51
	出土石器(1)	51
	出土石器(2)	51
図版4	出土石器(3)	52
	出土石器(4)	52
	出土石器(5)	52
図版5	出土石器(6)	53
	出土石器(7)	53
	出土石器(8)	53

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年 2 月に基本計画が決定し、平成 9 年 3 月には整備計画路線となった。さらに平成 9 年 12 月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の 2 月から事業に着手している。その間、宮崎県教育委員会では、平成 6 年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成 11 年度から日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

市納上第 1 遺跡では、平成 15 年 11 月 10 日～16 年 1 月 16 日に確認調査が実施され、アカホヤ火山灰層（以下 K-Ah）上面で弥生土器と中世の土師器を伴う遺構が確認された。そこで、遺構・遺物の分布すると想定される 5,700㎡を対象に本調査が実施されることとなった。

本調査は、平成 16 年 2 月 20 日に着手し、同年 10 月 12 日に終了した。

市納上第 4 遺跡は、平成 16 年 5 月 24 日～7 月 14 日に確認調査が実施された。多くの部分が後世の耕作や植林によって削平をうけており、遺構は検出されなかった。しかし、多量の土器や石器が表土や造成土から出土した。

本調査については、後世の大規模な開墾や造成によって、遺構及び遺物包含層は失われていると考えられるため、実施の必要はないと判断した。

## 第 2 節 調査の組織

市納上第 1 遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 米良 弘康（平成 15 年度）  
宮園 淳一（平成 16～17 年度）  
副所長兼総務課長 大藪 和博（平成 15～16 年度）

副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫（平成 15～17 年度）  
総務課長 宮越 尊（平成 17 年度）  
主幹兼総務係長 石川 恵史（平成 15～17 年度）  
調査第一課長 児玉 章則（平成 15 年度）  
高山 富雄（平成 16～17 年度）  
調査第一係長 谷口 武範（平成 15～16 年度）  
主幹兼調査第一係長 長津 宗重（平成 17 年度）  
主幹兼調査第二係長 長津 宗重（平成 15～16 年度）  
菅付 和樹（平成 17 年度）

### 市納上第 1 遺跡

主査（15 年度調査担当） 原田 茂樹  
（15・16 年度調査担当） 長友 久昭  
（16 年度調査担当） 山田 洋一郎  
主事（16 年度調査・報告書担当） 森本 征明

### 市納上第 4 遺跡

主事（16 年度調査・報告書担当） 岡田 諭

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

市納上第1遺跡は、川南町大字川南字山瀬谷・市納上に所在する。川南町は、宮崎県の中央部に位置し、尾鈴山系に属する上面木山から派生する山地及び丘陵とその東麓から海岸にかけて広がる段丘面から成る。段丘面は、国光原面・唐瀬原面・川南原面等の14面で構成されている。

本遺跡は、上面木山から派生した丘陵の尾根部縁辺にあって、東に向けて緩やかに下る傾斜地に位置する。

### 第2節 歴史的環境

川南町では、調査が実施された遺跡は少ないが、多くの散布地が確認されている。

旧石器時代では、後牟田遺跡（第1図3）や当時代の遺構は確認されなかったが、ナイフ形石器や細石刃や細石核が出土した霧島遺跡（第1図4）、藏座村遺跡（第1図5）がある。また大野寅夫氏の踏査や川南町の分布調査で、旭ヶ丘遺跡（第1図6）、谷ノ口遺跡（第1図7）、椎原遺跡、大久保遺跡（第1図9）、卒手遺跡（第1図10）等多くの遺跡で旧石器時代の遺物が採集されている。

縄文時代に関しては、前述の霧島遺跡や藏座村遺跡で集石遺構が検出され、藏座村遺跡では早期前半～末の貝殻文系・円筒形貝殻条痕文系・押型文系・条痕文系などの複数の土器型式の縄文土器が出土している。また上ノ原遺跡（第1図11）や尾花坂上遺跡（第1図12）でも集石遺構が検出されている。尾花坂上遺跡では、1mを越すものや深い掘込を有する集石遺構が検出されている。上ノ原遺跡では、早期の押型文土器や貝殻条痕文土器が出土している。楕円押型文を施した尖底・平底の底部は県内では稀少な土器である。この他に同町内からは、縄文時代早期の押型文土器・貝殻条痕文土器が住吉B遺跡（第1図13）や丸山西原遺跡（第1図14）等多くの遺跡で採集されているが、前期～晩期の良好な遺跡は確認されていない。

弥生時代では、前期～中期の遺跡は確認されていないが、中期末に藏座村遺跡で竪穴住居跡が検出されている。後期になると数多くの遺跡が確認されている。発掘調査が行われたものでは、把言田遺跡（第1図15）や中の迫A遺跡（第1図16）で竪穴住居跡が検出されている。そして、野稲尾遺跡（第1図17）では、竪穴住居跡と周溝状遺構が検出されている。また、東平下A遺跡（第1図18）では、円形・方形の周溝墓が検出され、1号円形周溝墓と2号方形周溝墓が発掘調査されている。

東九州自動車道関連発掘調査によって、旧石器時代～歴史時代の遺跡が多く見つっている。

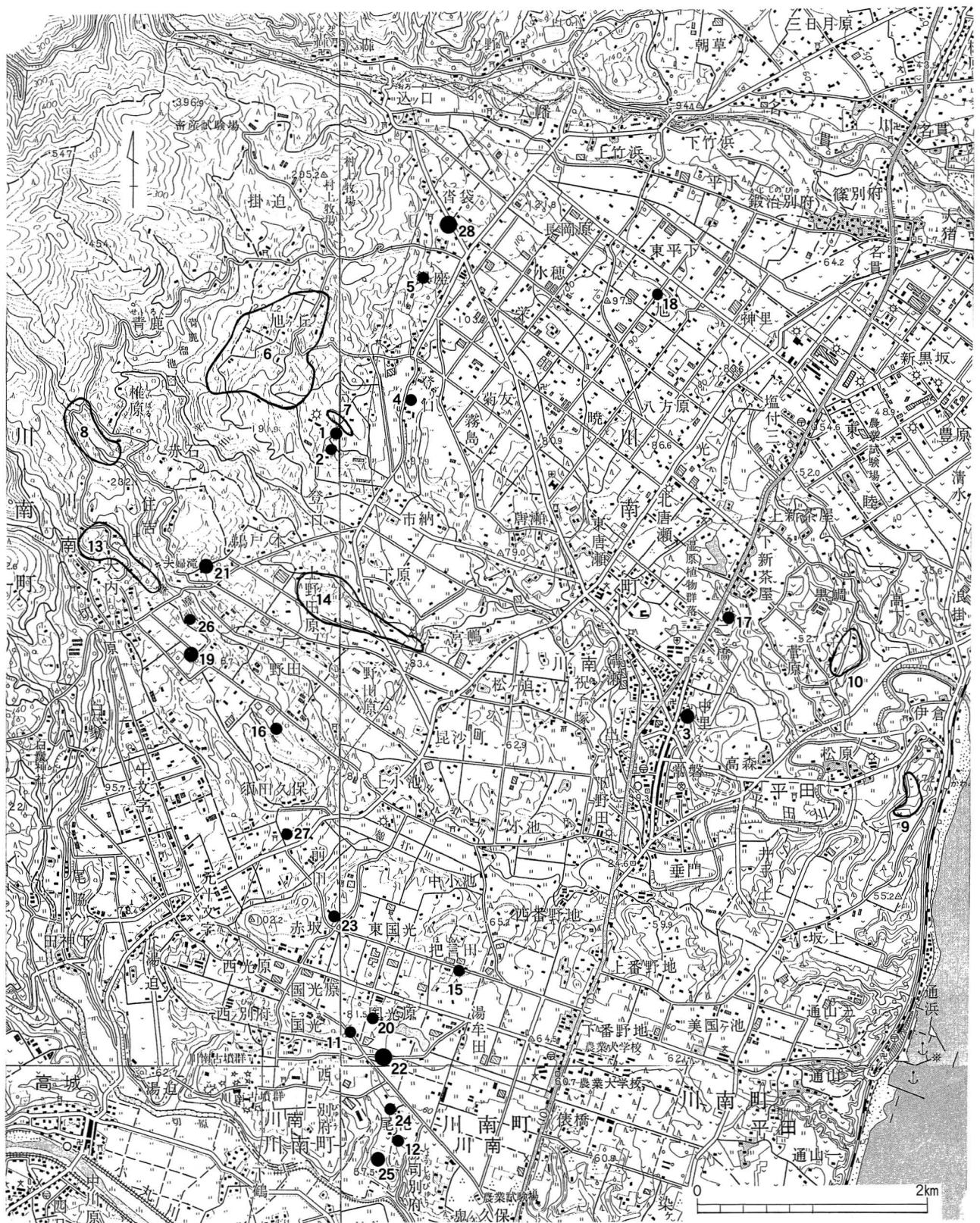
中ノ迫第1遺跡（第1図19）では、AT下位から、礫群が検出された。縄文時代では、早期の集石遺構や炉穴が検出された国光原遺跡がある。赤石・天神本遺跡（第1図21）では後・晩期の竪穴住居跡と集石遺構が検出され、同町内において縄文時代後・晩期の遺跡の数が少ない調査例のひとつである。

弥生時代～古墳時代では、湯牟田遺跡（第1図22）や赤坂遺跡（第1図23）、尾花A遺跡（第1図25）などで、弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴住居跡が多く検出され、大規模な集落跡が調査されている。また、大内原遺跡（第1図26）では、古墳時代前期の竪穴住居が検出されている。

中・近世としては、前ノ田村上第1遺跡（第1図27）で中世の掘立柱建物や土壌、溝状遺構、道路状遺構が検出され、銀座第1遺跡（第1図28）では、中世の掘立柱建物や土壌の他に近世の掘立柱建物が検出されている。

〈引用・参考文献〉

- 『第1章 川南の歴史的環境と古代遺跡』川南町史 川南町 1983
- 『川南町の埋蔵文化財』遺跡詳細分布調査報告書川南町 1983
- 『東平下周溝墓群－2号方形周溝墓－』川南町教育委員会 1982
- 『上ノ原遺跡』川南町教育委員会 1986
- 『霧島遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 1997
- 『尾花坂上遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2004
- 『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ・Ⅴ』宮崎県埋蔵文化財センター 2004・2005



- |             |              |           |            |          |
|-------------|--------------|-----------|------------|----------|
| 1 市納上第1遺跡   | 2 市納上第4遺跡    | 3 後牟田遺跡   | 4 霧島遺跡     | 5 藏座村遺跡  |
| 6 旭ヶ丘遺跡     | 7 谷ノ口遺跡      | 8 椎原遺跡    | 9 大久保遺跡    | 10 卒手遺跡  |
| 11 上ノ原遺跡    | 12 尾花坂上遺跡    | 13 住吉B遺跡  | 14 丸山西原遺跡  | 15 把言田遺跡 |
| 16 中の迫A遺跡   | 17 野稻尾遺跡     | 18 東平下A遺跡 | 19 中ノ迫第1遺跡 | 20 国光原遺跡 |
| 21 赤石・天神本遺跡 | 22 湯牟田遺跡     | 23 赤坂遺跡   | 24 西ノ別府遺跡  | 25 尾花A遺跡 |
| 26 大内原遺跡    | 27 前ノ田村上第1遺跡 | 28 銀座第1遺跡 |            |          |

第1図 遺跡の位置と周辺地形図



# 第Ⅲ章 市納上第1遺跡の調査

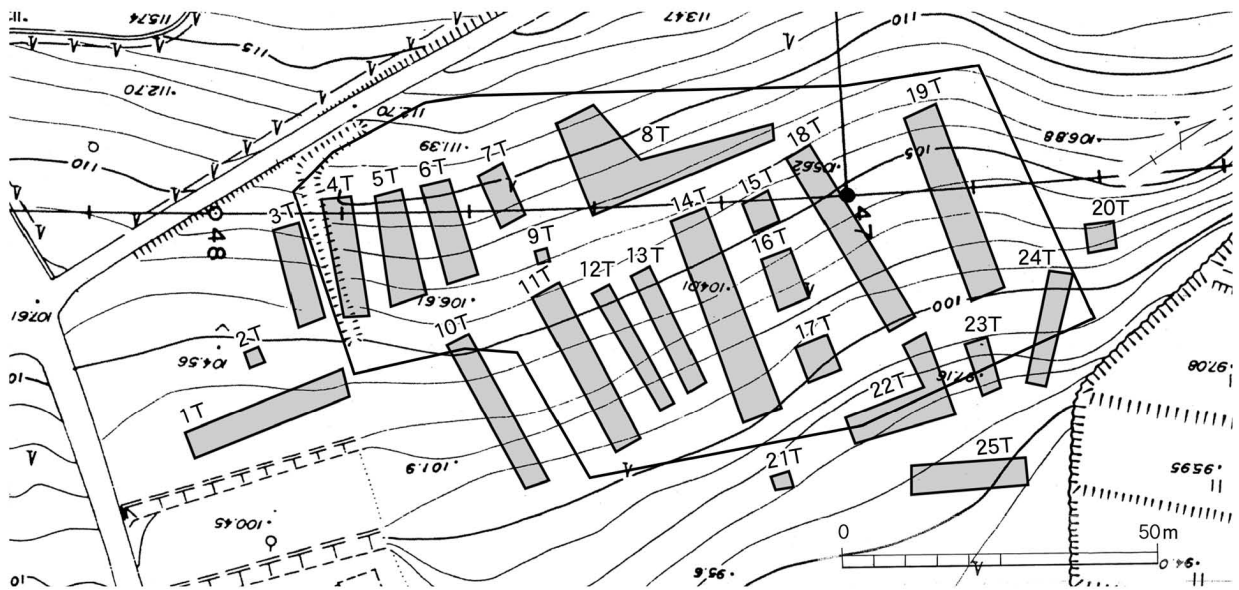
## 第1節 確認調査の概要

確認調査は、平成15年11月10日から平成16年1月16日に実施した。調査区が傾斜地であるので、傾斜に直交するトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認した。K-Ahは、調査区西側を中心に堆積が認められた。そのためK-Ahが当初予定されていた確認調査範囲の西側にも堆積し、遺構が広がることが想定された。そのため調査面積を当初予定より1,500㎡広げ、8,300㎡調査を行なった。K-Ahは、調査区中央部から西側（4T～20T）にかけて認められた。4Tでは、K-Ah直上で弥生土器片と共に黒いシミ状の部分が確認され、数軒の竪穴住居跡の可能性が

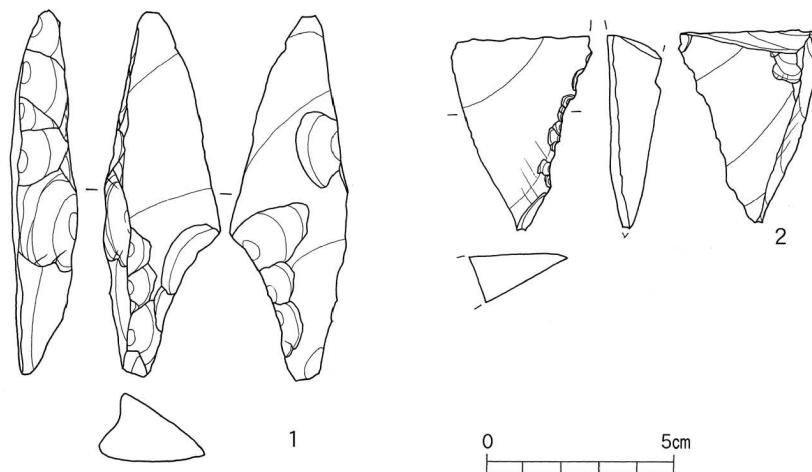
あった。

また、14・17・18・19Tでは、筋状の遺構が確認され、18Tからは中世の土師器が出土した。このことから南北方向の溝状遺構が想定された。K-Ah下位については、10Tの明褐色土層からホルンフェルス製のナイフ形石器（第3図1）と微細剥離のある剥片（第3図2）が1点ずつ出土している。上記以外のトレンチでは、遺構・遺物は確認されなかった。

調査の結果、4T・14T・17～19TにおいてK-Ah上面で遺構・遺物が確認された。このため、K-Ahが認められる調査区中央部から西側の5,700㎡を本調査範囲とした。



第2図 確認調査のトレンチ配置図



第3図 確認調査の出土遺物

## 第2節 調査の経過

本調査は平成16年2月20日から平成16年10月12日まで実施した。

調査区には国土座標に準じた10×10mのグリッドを設定し、東西方向にO～W（西より）を、南北方向に6～16（北から）をそれぞれに付した。

地形測量については、測量業務委託として行い、K-Ah上面で25cm間隔で等高線を記録した。

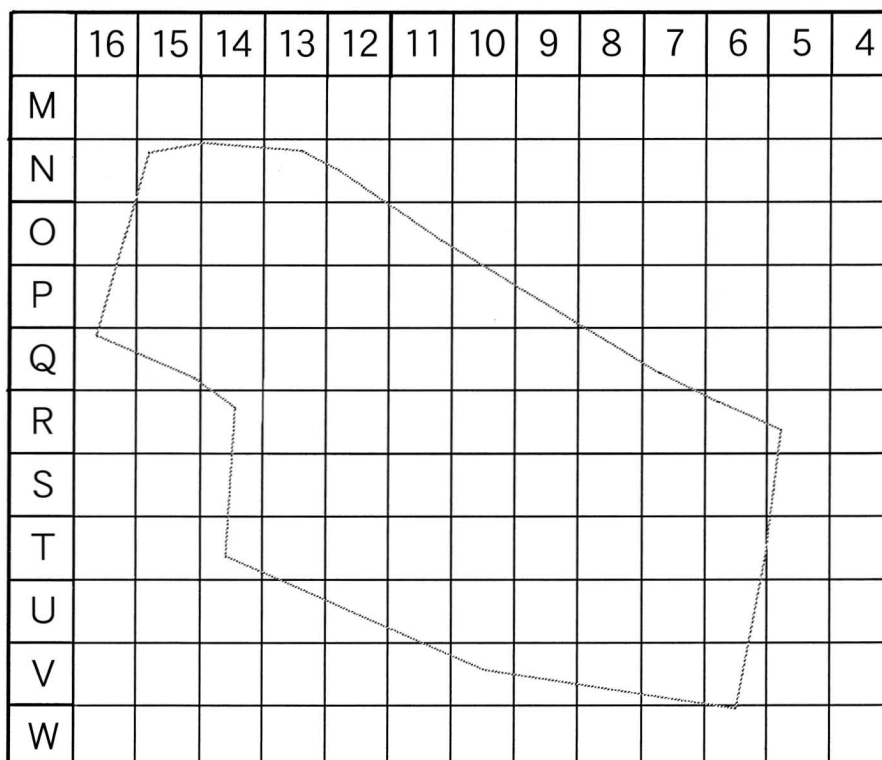
実際の調査は、表土を重機で除去したのち、II層黒色土をネジリ鎌、手鍬等による調査を行なった。調査区南西部分（O13～Q16）においては、表土を除去した段階で、遺物の出土が確認されたため、ネジリ鎌、移植こてによる掘り下げを行った。その結果、II層黒色土中で多数の土器が出土し、K-Ah上面で竪穴住居跡・周溝状遺構を検出した。また、その他の箇所では、遺構・遺物を確認しながら、手鍬でK-Ahまで掘り下げを行った。調査区東側（T6～U13）において、K-Ah上面で確認調査時に部分的に検出されていた溝状遺構を検出した。

K-Ah下位については、5×5mのトレンチを16箇所設定し、礫層直上まで手鍬による掘り下げを行った。5Tにおいて、VI層褐色土層で、石器が出土したため、トレンチを広げ、掘り下げを行った。その結果、遺構は検出されなかったが、ナイフ形石器や剥片が出土した。また、12T・15TではV層暗褐色土層から土器・石器が数点出土した。

## 第3節 整理作業と報告書作成

整理作業は、当センター本館において平成16年10月～平成17年2月に、遺物の水洗・注記・接合・実測作業を行った。また並行して、周溝状遺構の床面直上より採取した土をフローテーションを行い、検出された炭化物等の選別作業を実施した。

報告書作成に当たっては、平成17年8月、9月に遺物トレース等の整理作業を行い、同年8月～11月に本文の執筆を行った。



第4図 グリッド配置図

## 第4節 基本層序

市納上第1遺跡の土層堆積状況は、遺跡が緩斜面上に立地しているため、K-Ahが堆積していない所や表土の下すぐにK-Ahになるところがあり、場所によって異なるが、基本層序は以下のようになる。

I層	黒褐色土 (Hue 5 YR3/1)
II層	黒褐色土 (Hue7.5YR3/1)
III層	明褐色火山灰質土 (Hue7.5YR5/6)
IV層	黒褐色土 (Hue10YR3/1)
V層	暗褐色土 (Hue10YR3/3)
VI層	褐色土 (Hue10YR4/6)
VII層	黄褐色土 (Hue7.5YR5/6)
VIII層	褐色土 (Hue7.5YR4/4~4/6)

遺物包含層は、II層(弥生時代)である。また、北東部の深掘トレンチ(10T)ではV層下位に小林軽石を含む暗褐色土層を確認し、その下位はしまりのある黒褐色土(Hue10YR3/2)、黄褐色土(Hue10YR5/6)となる。

表土。しまりが無い。

しまりがなく、パサパサしている。

K-Ahの二次堆積と思われる。

ややしまりがある。

ややしまりがある。

粘性があり、径約5mm前後の小礫を含む。下部にいくにしたがって小礫が増加する。

粘性が強く、ベタベタとする。径5~10mmの小礫を含む。また20~40cmの礫がみられる。

40cm未満の礫を多く含む。礫層である。

## 第5節 旧石器時代・縄文時代の遺物

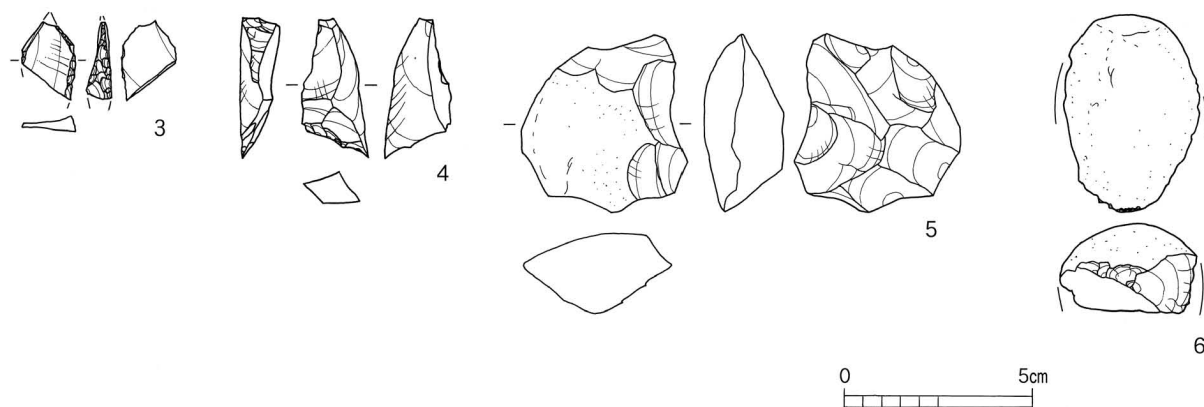
III層K-Ahの下層については、基本的に5×5mのトレンチを設定し、掘り下げを行った。遺物の確認できたトレンチについては、トレンチを拡張し、調査を進めた。

16箇所(掘削合計面積550㎡)を第VIII層褐色土まで掘削を実施した。

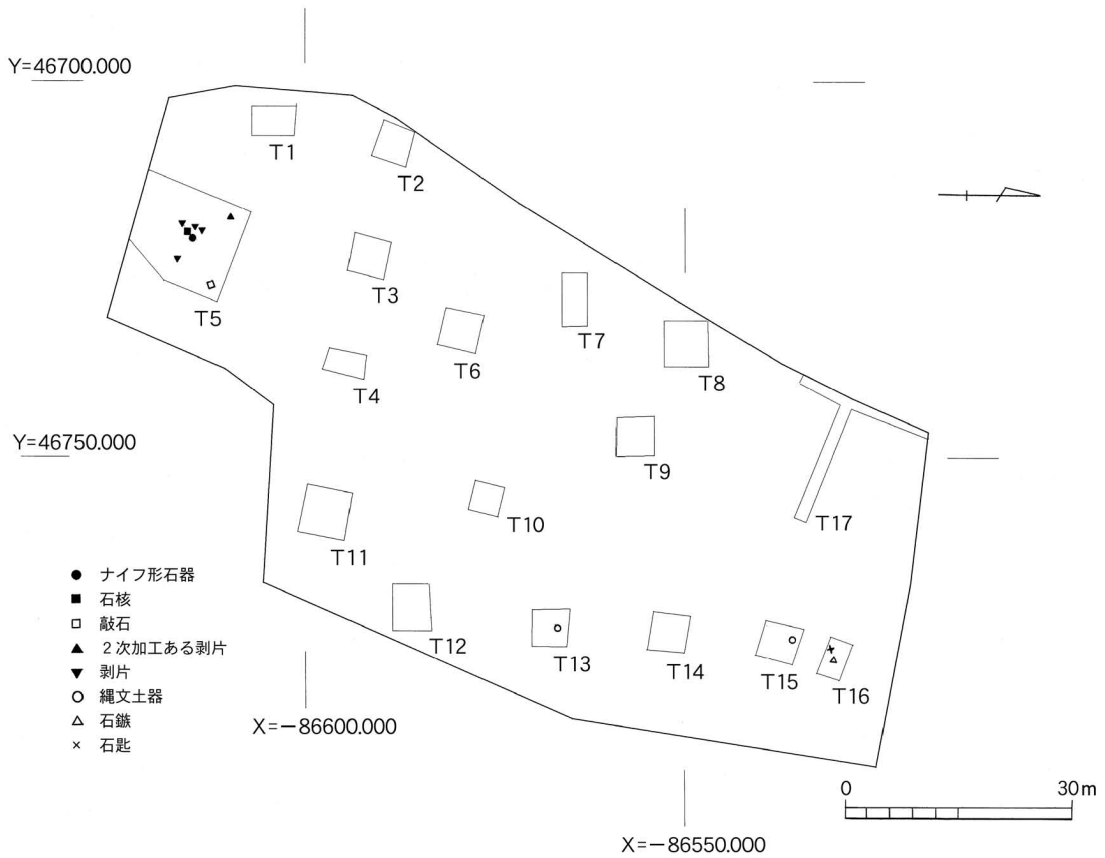
遺物が出土したトレンチは5T・12T・14T・15Tの4箇所である。

### (1) 旧石器時代(第5図)

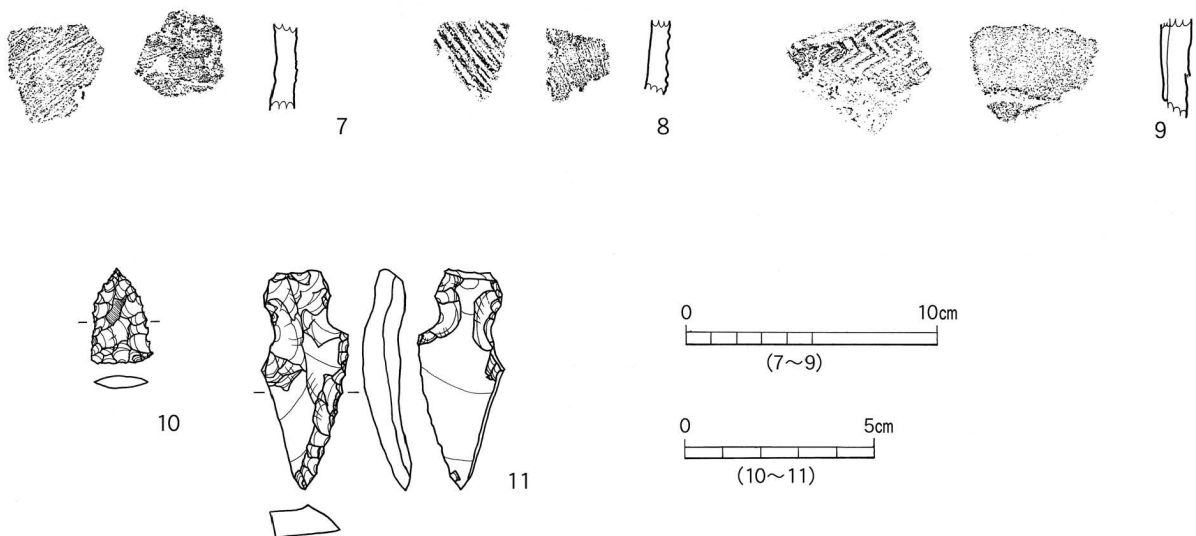
5TのVI層褐色土で出土した石器は、旧石器時代に所産のものであると考えられる。遺物の出土はおおむねVI層中部であった。VI層は、上位の状況と同じく、西から東に下る緩斜面の地形をしている。今回、周辺で遺構が検出しておらず、斜面上で遺物が出土していることから、斜面上方からの流れ込みによるものであると考えられる。出土した遺物は、図化した遺物のほかに剥片が数点出土している。



第5図 旧石器時代の遺物



第6図 Ⅲ層下位トレンチ配置図



第7図 縄文時代の遺物

(2) 縄文時代 (第7図)

遺構は検出されず、遺物のみの出土であり、しかも少量であった。

遺物は、12T・14Tからは縄文土器片が1点ずつ出土し、15Tから石器が2点出土している。

12T出土の縄文土器はIV層黒褐色土の下位からの出土で、その他の土器、石器はV層暗褐色土中部からの出土である。また11は、II層黒褐色土からの出

土である。

7～9は、縄文土器片である。8は外面に条痕を施す。9は、外面に山形押型文を施す。

10は、安山岩製の局部磨製石鏃である。正面中央に磨いている部分がある。11は、チャート製の石匙である。背面側縁には丁寧な調整が施されているが、腹面は基部のみの調整である。

## 第6節 弥生時代の遺構と遺物

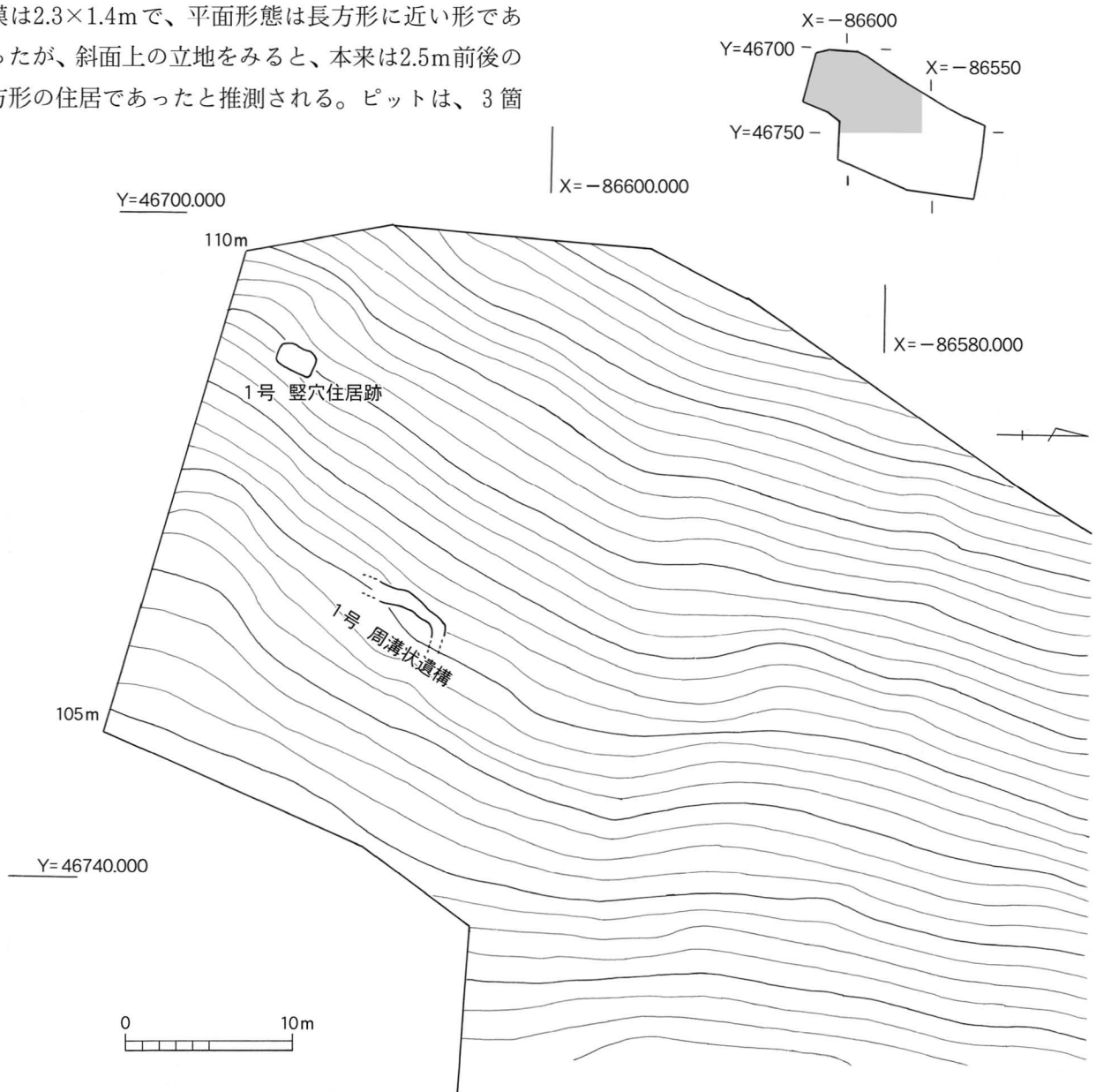
遺物包含層はⅡ層であり、調査区南西部（O13～P16）を中心に遺物が出土した。その中でも調査区が西から東へ下る緩斜面上にあることから、P14・15グリッドで多くの遺物が出土した。遺構は、Ⅲ層上面で竪穴住居跡1軒、周溝状遺構1基を検出した。

### (1) 竪穴住居跡（第9・10図）

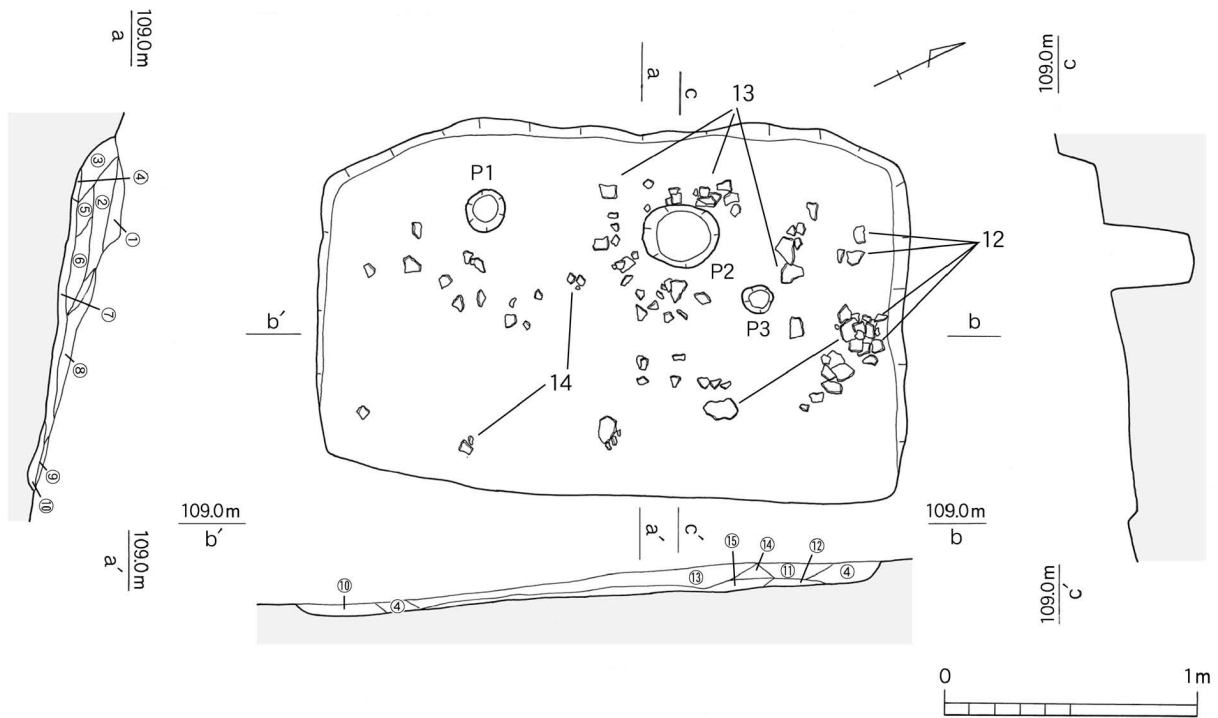
1号竪穴住居跡は、調査区南端のO15とP15にまたがる部分で検出された。遺構は、斜面上に立地しているため、斜面下方では、床面のみであった。規模は2.3×1.4mで、平面形態は長方形に近い形であったが、斜面上の立地をみると、本来は2.5m前後の方形の住居であったと推測される。ピットは、3箇

所で検出された。中央北側で検出されたP2は直径15cmがあり、支柱穴になる可能性があるが、対面側でピットが検出されてない。遺物は弥生土器片が出土した。

12は甕の口縁部～胴部片である。口唇部は、指押さえによってやや尖り気味となる。口縁部はくの字状に緩やかに屈曲し、体部は丸みを持ち、中部で最大径となる。13は甕の頸部～体部片である。胴部は、頸部の屈曲部分から直線的にのびる。14は甕の口縁～胴部片である。口唇部は、やや先細り丸い。口縁部は直線的に立ち上がり、あまり屈曲せずに体部となる。

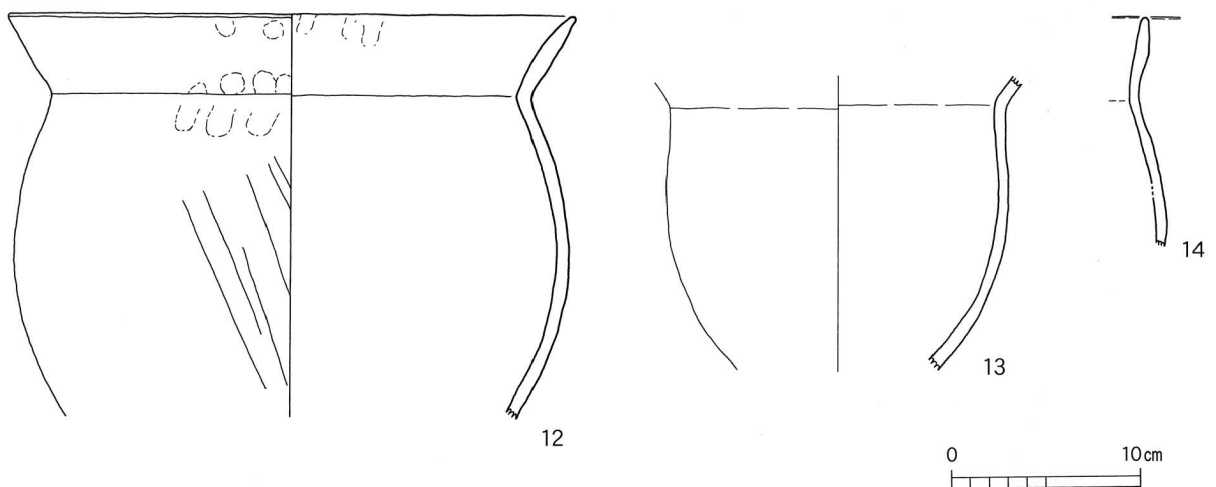


第8図 弥生時代遺構配置図及びⅢ層地形図

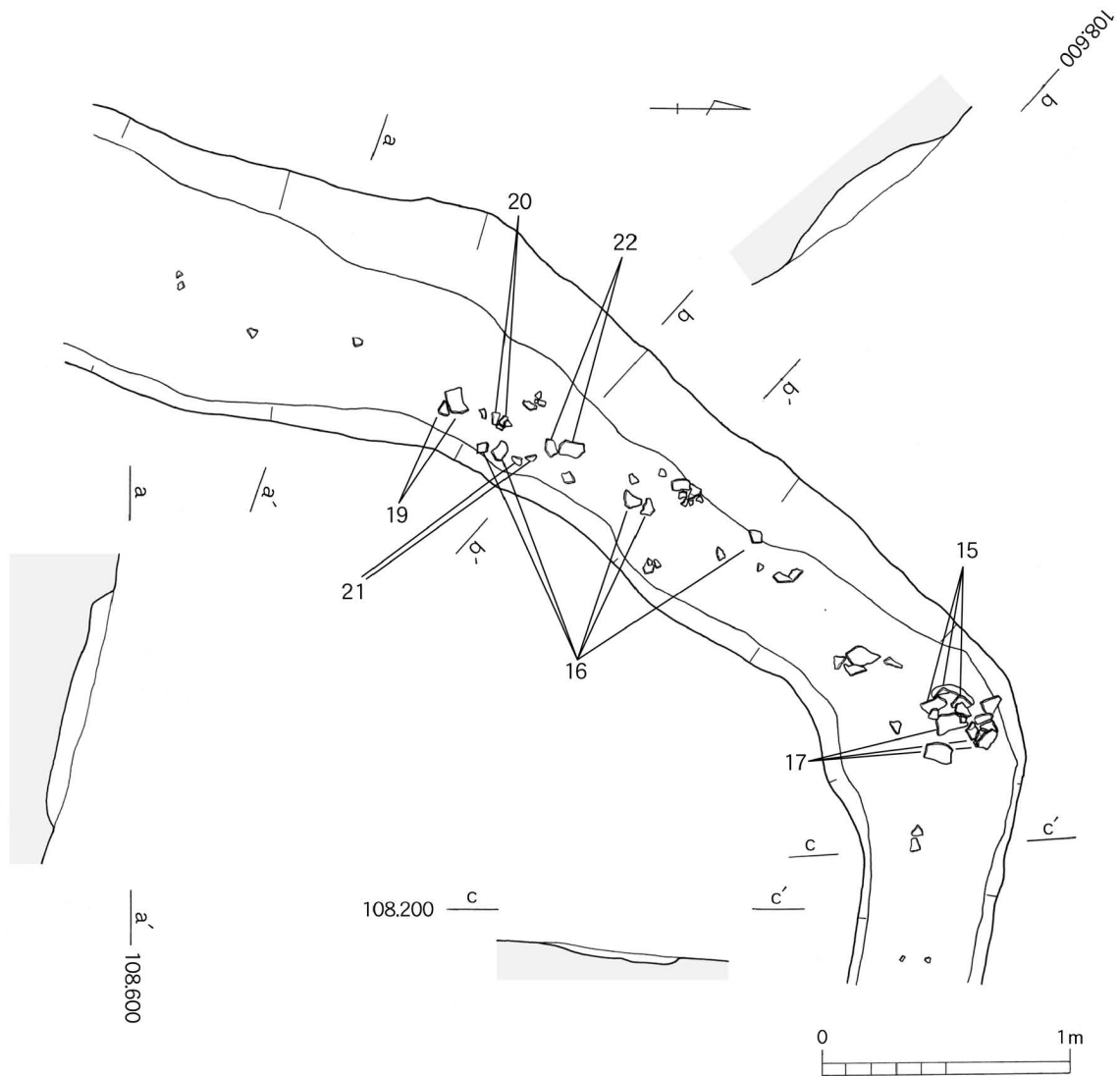


①黒褐色土…しまりがなく柔らかい。(Hue7.5YR3/2) ②黒褐色土…黄色軽石粒(アカホヤ火山灰)をわずかに含む。(Hue10TYR3/2) ③灰黄褐色土…やや粘性があり、黄色軽石粒を含む。(Hue10YR4/2) ④にぶい黄褐色土…やや粘性があり、黄色軽石粒をブロック状に含む。(Hue10YR4/3) ⑤黒褐色土…しまりが無い。(Hue10YR3/1) ⑥黒褐色土…わずかに粘性がある。(Hue7.5YR3/1) ⑦黒褐色土…硬くしまっている。床面の土と思われる。黄色軽石粒のブロックをわずかに含む。(Hue10YR3/2) ⑧黒色土…しまりがなく、もろい。(Hue7.5YR2/1) ⑨黒褐色土混にぶい黄褐色土…硬くしまっている。床面の土と思われる。(Hue10YR4/3) ⑩にぶい黄褐色土…黄色軽石粒を少量含む。(Hue10YR4/3) ⑪暗褐色土…木の根の痕跡だと思われる。(Hue10YR3/3) ⑫灰黄褐色土…硬くしまっている。床面の土と思われる。(Hue10YR4/3) ⑬第⑧層と少しにているが、少し色調が明るい。(Hue7.5YR3/1) ⑭黒褐色土…少し粘性がある。(Hue10YR3/2) ⑮黒褐色土…やや硬くしまっている。(Hue7.5YR3/1) ⑯暗褐色土…黄色軽石粒が少し混じる。(Hue10YR4/3)

第9図 1号竪穴住居跡



第10図 1号竪穴住居跡出土遺物



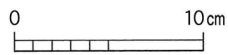
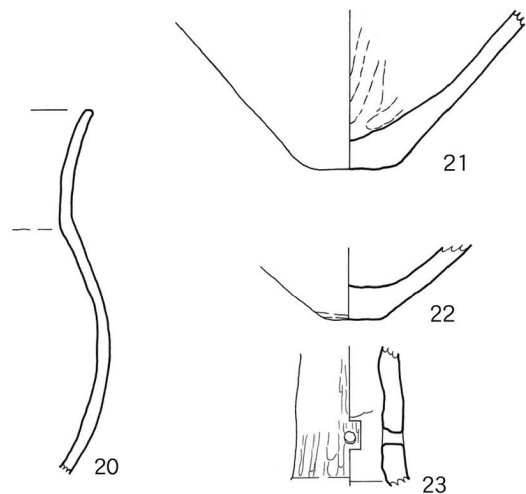
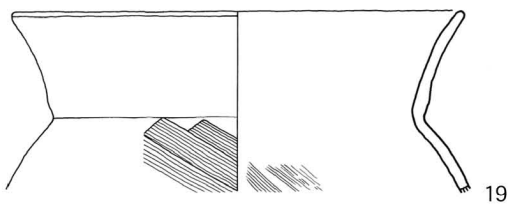
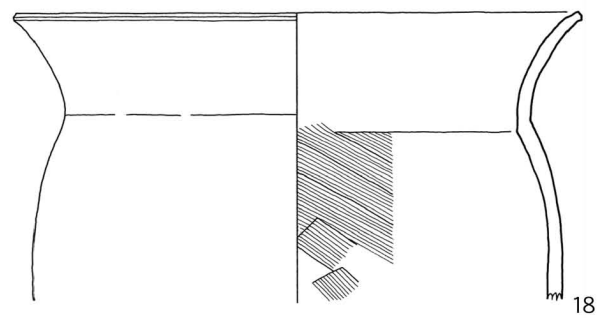
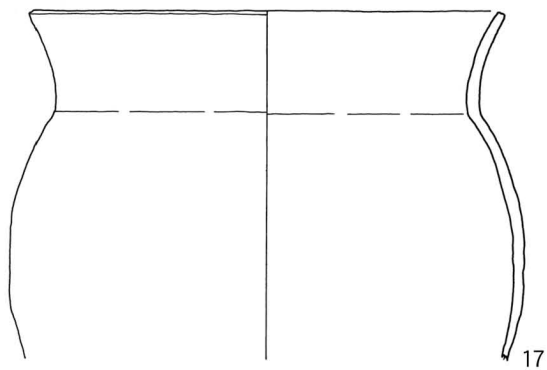
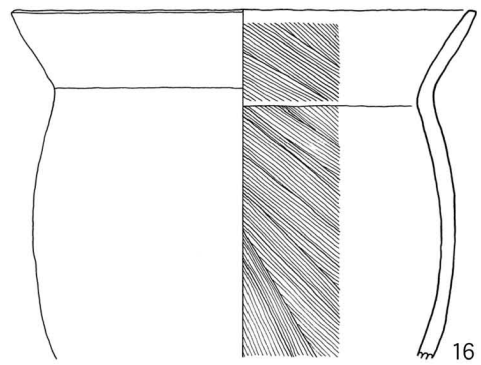
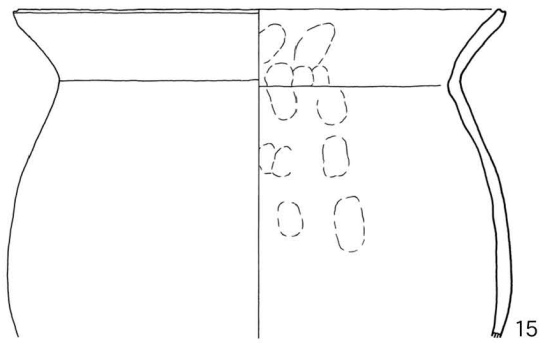
第11図 1号周溝状遺構

(2) 周溝状遺構 (第11・12図)

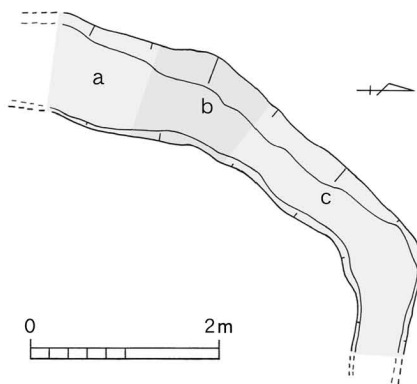
1号周溝状遺構は、P14グリッド南西部分で検出された。1号住居とは15m程の距離があり、斜面を下った所に位置する。住居同様斜面上であるため、下方が消滅していたり、後世の攪乱により、全体像は明らかではない。検出できた部分で4mあり、それ以上のものであったであろう。平面形態は、残存している部分から推測すると隅丸方形であったと考えられる。周溝の断面形状は弓状で、幅0.8~1.2m、深さ15~20cmを測る。

床面直上の埋土をフローテーションを行ったところ、炭化物・マメ類やアカネ科の炭化種子・炭化米19点が検出された。遺物は弥生土器片が出土した。

15~20は甕の口縁部から胴部片である。15は緩やかに「く」の字状に屈曲した口縁部に、胴部は丸みを持ち中位で最大径となる。口唇部は平面状になる。16は緩やかに立ち上がった口縁部に長胴気味の胴部をもつ。内面は斜め方向の丁寧なハケ目調整されている。17は直線的に立ち上がった口縁部から丸みを持った胴部へ続く。口唇部は中央がやや窪んだ面を持つ。18・19は面を持った口唇部にやや長い口縁部が緩やかに屈曲し、球胴状の胴部となる。21・22は、甕の底部片で平底の底部から緩やかに立ち上がる。23は脚部片で直立した脚部に円形の透し孔が穿かれている。残存部分がわずかではっきりはしないが、裾部は広がる形態になりそうだ。



第12図 1号周溝状遺構出土遺物



第13図 1号周溝状遺構フローテーション法区割図

第1表 フローテーション法洗浄結果 (1)

	a区	b区	c区
炭化物	3.1	3.46	4.35
炭化種子	0.28	0.34	0.3

(g)

第2表 フローテーション法洗浄結果 (2)

	a区	b区	c区
長形 (試料1)	0	8	11
中(2~4mm) (試料3・4・6)	36	35	24
大(4mm以上) (試料6)	5	9	7

(個)



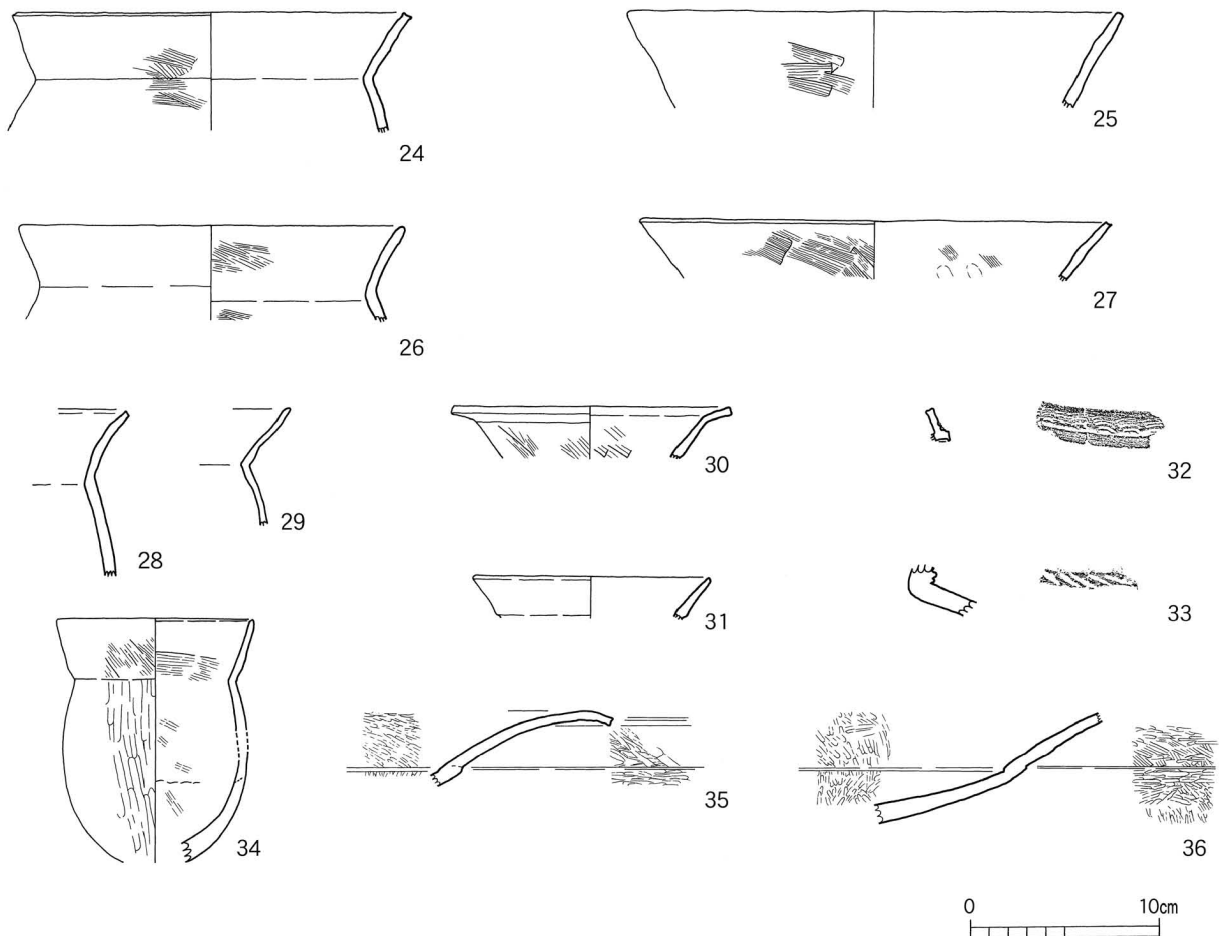
(3) 包含層出土遺物 (第13・14図)

Ⅱ層黒褐色土からは土器・石器が出土している。土器片は縄文土器片・須恵器片が1点ずつ出土したほかは弥生土器である。土器は調査区南西部 (O13～P16) を中心に出土している。

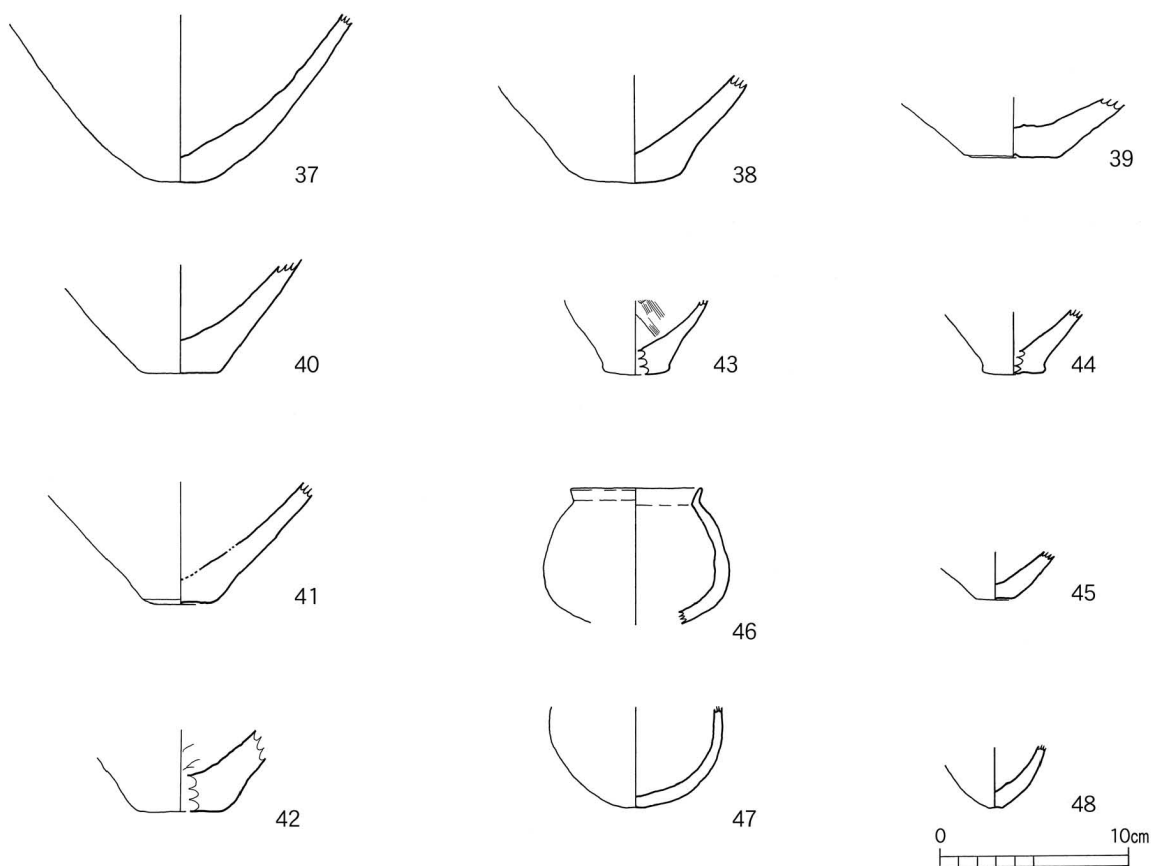
石器については確認調査分(49・61)、表採資料(57・59・62)も合わせてここで報告する。

土器：24～29は甕の口縁部片である。24・26は、口縁部が緩やかに「く」の字状に屈曲し、胴部へと続く。24は口唇部の形状が平面状となる。25は口唇部がやや丸みをもち、口縁部が長く延び、外方に広がる。27は口唇部が平坦な面を持ち、外方に広がる口縁部である。28は口唇部が平坦な面をもち、緩やかに屈曲し胴部となる。屈曲部分から下位にハケ目調整を施す。30・31は、壺の口縁部である。32は複合

口縁壺である。内傾しながら立ち上がる複合口縁部の外面に櫛描波状文を施す。33は頸部に刻み目を施した突帯をもつ。35・36は高坏の杯部である。緩やかに広がりながら稜を境に屈曲し口縁端部がやや下方に外に広がり胴部へ立ち上がる。内外面ともに丁寧なヘラ磨き調整が施される。35・36は同一個体と思われる。37～45は甕の底部片である。37はやや丸みのある平底の底部から緩やかに胴部へ立ち上がる。38は平底の底部から40～42は平底の底部から緩やかに胴部に立ち上がる。41はわずかに上げ底となる。43・44は小型の甕の底部片で、平底で端部がわずかに張り出す。46～48は、小型壺である。46は短くやや外方に開いた口縁部に偏球状の胴部となる。47は球胴状の胴部に丸底の底部である。



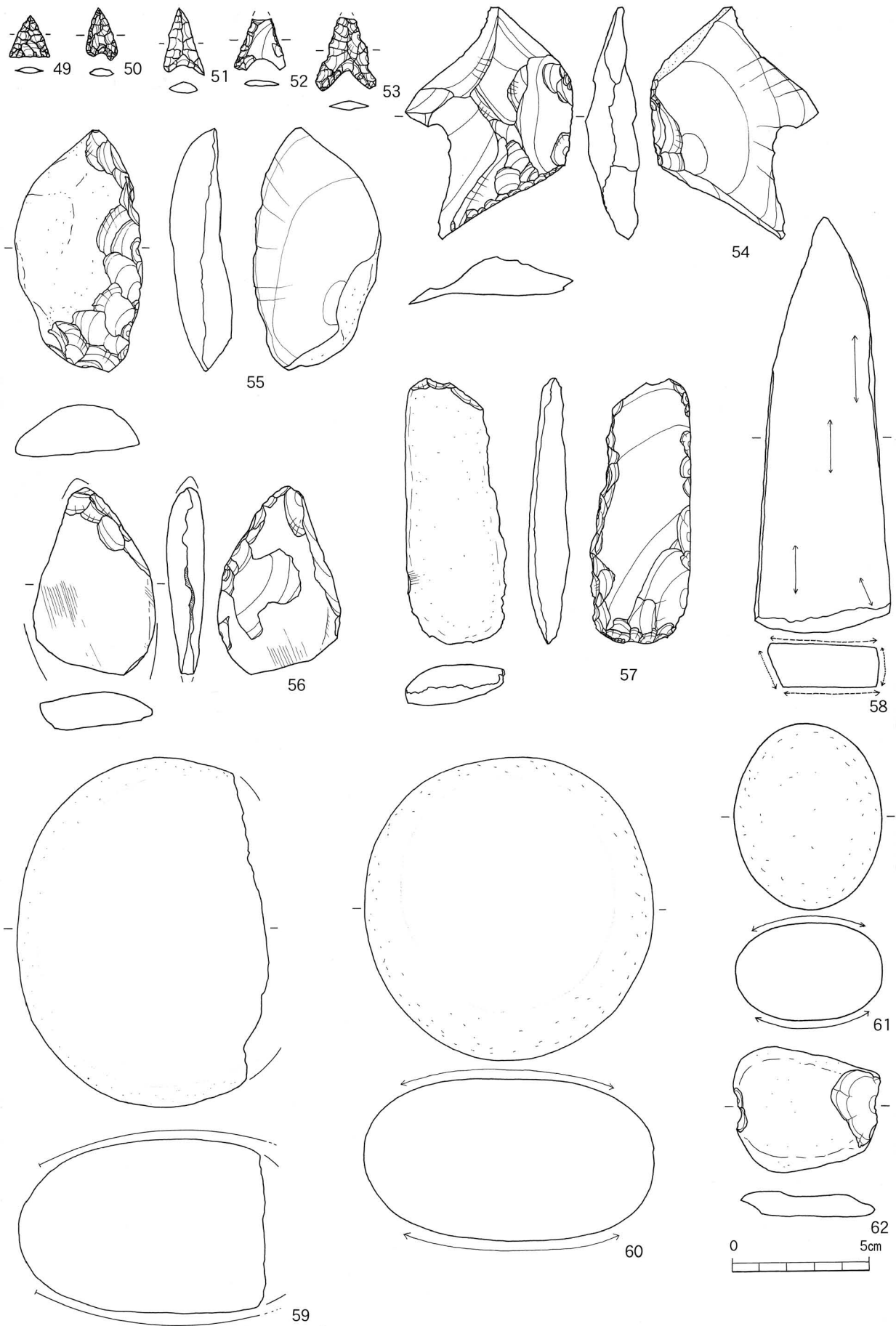
第14図 Ⅱ層包含層出土遺物 (1)



第15図 II層包含層出土遺物(2)

石器：49～53は打製石鏃である。49はチャート製の三角形鏃である。50～52は平面形態は二等辺三角形で基部の抉りが浅い。50はチャート製、51・52はホルンフェルス製である。53は姫島産黒曜石製で基部の抉りが深い。54・55はホルンフェルス製石器である。55は削器で、背面に自然面を残し、側縁は剥離を施すことによって刃部を作り出す。56は頁岩製の磨製石斧である。刃部及び側面は欠損している。基部は打ち欠き整形している。表裏とも丁寧に研磨さ

れ、滑らかである。57は腹面の周縁に細かな剥離を施し刃部を作り出す。58は頁岩製の砥石である。板状を呈し、4面の研磨面をもつ。研磨痕跡は表裏面に擦傷のような細かく浅い擦痕が縦方向に残る。59～61は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。59は一部欠損しており、表裏全面に磨痕が認められる。61は表裏全面に磨痕が認められる。62は砂岩製石錘である。扁平な礫の長軸を打ち欠いている。



第16圖 II層包含層出土遺物(3)

第3表 石器観察表

遺物番号	器種	出土位置	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	ナイフ形石器	確認調査	ホルンフェルス	9.7	3.1	1.8	36.7	
2	微細剥離ある剥片	確認調査	ホルンフェルス	5.1	3.7	1.4	19.6	
3	ナイフ形石器	5T	ホルンフェルス	2	1.4	0.4	1.3	
4	2次加工ある剥片	5T	ホルンフェルス	3.7	1.8	1.1	5	
5	石核	5T	ホルンフェルス	4.7	4.4	2.1	38	
6	敲石	5T	チャート	5.2	3.6	2.4	51.6	
10	局部磨製石鏃	16T	安山岩	2.5	1.6	0.3	1.4	
11	石匙	16T	チャート	5.7	2.3	0.9	12.3	
49	打製石鏃	II層包含層	チャート	1.5	1.4	0.2		
50	打製石鏃	II層包含層	チャート	2	1.1	0.3	0.4	
51	打製石鏃	II層包含層	ホルンフェルス	2.5	1.5	0.4	0.9	
52	打製石鏃	II層包含層	ホルンフェルス	1.9	1.9	0.2		
53	打製石鏃	II層包含層	姫島産黒曜石	2.7	2.2	0.3	1.6	
54	2次加工ある剥片	II層包含層	ホルンフェルス	8.5	6.1	1.9	59.5	
55	削器	II層包含層	ホルンフェルス	8.9	4.7	1.8	90.2	
56	磨製石斧	II層包含層	頁岩	6.8	4.5	1.4	48.6	
57	打製石斧	II層包含層	凝灰岩質頁岩	9.7	3.7	1.6	64.5	
58	砥石	II層包含層	頁岩	15.2	5	1.7	180.4	
59	磨石	溝状遺構	尾鈴山酸性岩類	11.1	10.6	6	1024.9	
60	磨石	表採	尾鈴山酸性岩類	12.7	9.1	6.3	1159.7	
61	磨石	確認調査	尾鈴山酸性岩類	6.8	5.4	3.6	184.1	
62	打欠石錘	表採	砂岩	5.4	4.6	0.9	35.9	

第4表 土器観察表(1)

遺物番号	種別	器種部位	出土位置	法量(cm)		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	外面	内面	外面	内面		
7	縄文土器	深鉢胴部	8T			ナデ	ナデ	褐色	にぶい赤褐色	6mm以下の灰褐色粒・3mm以下の赤褐色粒・1mm以下の光沢黒色粒を少し含む。	
8	縄文土器	深鉢胴部	8T			横方向の条痕	ナデ	褐色	にぶい褐色	2mm以下の光沢透明粒を多く含む。2mm以下の黒褐色粒を少し含む。	
9	縄文土器	深鉢胴部	II層包含層			山形押型文	ヨコナデ	にぶい橙色	にぶい赤褐色	2mm以下の灰白色粒・光沢透明粒を多く含む。	
12	弥生土器	甕頸部~胴部	1号竪穴住居跡	30.0		指押さえ・横ナデ	指押さえ・横ナデ・斜め方向のナデ	明褐色・にぶい黄色	橙色・赤褐色	5mm以下の灰白色粒・2mm程の黒褐色粒・1mm以下の黒色透明光沢粒・1mm以下の無色透明光沢粒を含む。	
13	弥生土器	甕頸部~胴部	1号竪穴住居跡			ナデ	風化しているがナデ	明褐色	橙色	7mm以下の白色粒・5mm以下の灰白色粒・4mm以下の黒色光沢粒を少し含む。	外面に煤付着
14	弥生土器	甕口縁部~胴部	1号竪穴住居跡			ナデ・斜め方向のナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	3mm以下の白色粒・2mm以下の白色半透明粒を含む。	外面口縁部付近に煤付着
15	弥生土器	甕口縁部~胴部	1号周溝状遺構	25.3		横ナデ・斜め方向のナデ	横ナデ・指頭混あり・不定方向のナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰白色粒・2mm以下の黒褐色・褐色粒・微細な透明光沢粒を含む。	外面に煤付着・口縁部の屈曲部分に工具混あり
16	弥生土器	甕口縁部~胴部	1号周溝状遺構	23.8		横ナデ・斜め方向のナデ	斜め方向のハケ目	にぶい橙色・灰黄褐色	にぶい橙色	4mm以下の黒褐色・褐色粒・1mm以下の透明光沢粒を含む。	外面に煤付着
17	弥生土器	甕口縁部~胴部	1号周溝状遺構	24.8		横ナデ・斜め方向の強いナデ	横ナデ	橙色	橙色	1mm以下の褐灰色粒をわずかに含む。	外面に煤付着
18	弥生土器	甕口縁部~胴部	1号周溝状遺構	29.6		横ナデ・縦方向のナデ	横ナデ・ハケ目	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の灰褐色・黒色光沢粒を含む。	外面に煤付着

第5表 土器観察表(2)

遺物 番号	種別	器種 部位	出土位置	法量(cm)		手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	外面	内面	外面	内面		
19	弥生 土器	甕 口縁部 ~頸部	1号周溝状 遺構	23.6		横ナデ・ハケ目	横ナデ・斜め方向 ナデ・一部ハケ目	淡黄	淡黄	3mm以下の黒色・褐色光 沢粒を含む。	外面に煤付着
20	弥生 土器	甕 口縁部 ~胴部	1号周溝状 遺構			ハケ目・ハケ 後横ナデ	ナデ	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	2mm以下の黒褐色粒を 含む	
21	弥生 土器	甕 底部	1号周溝状 遺構		5.1	縦方向の強い ナデ	ナデ	にぶい 黄橙色	浅黄 橙色	2mm以下の黒褐色粒・1mm 以下の灰白色粒を含む。	内面に煤付着
22	弥生 土器	甕 底部	1号周溝状 遺構		3.8	風化しているが ナデ	指押さえ・ナデ	にぶい 黄橙色	にぶい 赤褐色	2mm以下の透明光沢粒を 多く含み、2mm以下の黒 色光沢粒を少し含む。	
23	弥生 土器	高坏 脚部	1号周溝状 遺構			縦方向のヘラ 磨き	ナデ	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	0.5mm以下の無色・黒色 透明粒を含む。	
24	弥生 土器	甕 口縁部 ~頸部	II層包含層	23.0		ハケ目・ハケ後 横ナデ	横ナデ	褐色	褐色	2mm以下の白色粒を含 む。1mm以下の光沢黒色 粒を少し含む。	
25	弥生 土器	甕 口縁部	II層包含層	26.2		ナデ・ハケ目	ナデ	黄褐色	褐色	1mm程の透明灰白色粒・1mm 以下の白色粒を少し含む。	
26	弥生 土器	甕 口縁部 ~頸部	II層包含層	20.4		ナデ	ハケ目・ ハケ後ナデ	褐色	黄褐色	2mm以下の白色粒・1mm 以下の光沢透明粒を多 く含む。	外面に煤付着
27	弥生 土器	甕 口縁部	II層包含層	25.0		横ナデ・ハケ目	ハケ後横ナデ	にぶい 赤褐色	褐色	1mm以下の白色粒をわ ずかに含む。	
28	弥生 土器	甕 口縁部 ~頸部	II層包含層			横ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目・ ハケ後ナデ	褐色	褐色	1mm以下の半透明白色 粒を含む	
29	弥生 土器	甕 口縁部 ~頸部	II層包含層			ナデ	ナデ	明黄 褐色	浅黄色	1~2mmの褐色・白色粒 を含む	口縁部付近 に煤付着
30	弥生 土器	甕 口縁部	II層包含層	14.6		横ナデ・ハケ目	横ナデ・ハケ目	橙色	褐色	2mm以下の黒色光沢粒 を含む	
31	弥生 土器	甕 口縁部	II層包含層	12.3		横ナデ	横ナデ	明黄 褐色	明黄 褐色	1mm以下の黒色光沢粒 を少し含む	
32	弥生 土器	甕 口縁部	II層包含層			櫛描波状文・複合 口縁部をもつ	横ナデ	にぶい 黄橙色	灰黄 褐色	1mm以下のにぶい黄橙 色粒を含む。	
33	弥生 土器	甕 口縁部	II層包含層			刻み目突帯	風化しており、 調整不明	にぶい 黄橙色	にぶい 橙色	1mm以下の褐灰色粒を 多く含む。	
34	弥生 土器	甕 口縁部 ~胴部	II層包含層	10.3		縦方向のヘラ 磨き・ハケ後 ヨコナデ	ナデ・一部斜め 方向のハケ目	褐色	褐色	2.5mm以下の黒色粒・ 2mm以下の白色・灰色粒 を含む。	内面の風化 が著しい。
35	弥生 土器	高坏 杯部	II層包含層			横方向の丁寧な ヘラ磨き・ハケの ち粗なヘラ磨き	斜め方向の丁寧 なヘラ磨き	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	2mm以下の乳白色粒・ 0.5mm以下の黒色・無色 透明粒	
36	弥生 土器	高坏 杯部	II層包含層			横方向の丁寧な ヘラ磨き・ハケの ち粗なヘラ磨き	斜め方向の丁寧 なヘラ磨き	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	2mm以下の乳白色粒・ 0.5mm以下の黒色・無色 透明粒	
37	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		4.4	ナデ	風化しており、 調整不明	明赤 褐色	明褐色	3mm以下の褐色粒・2mm以 下の当名流を少し含む。	外面に煤付着
38	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		5	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	褐灰色	4mm以下の褐色粒・2mm以 下の黒色光沢粒をわずかに含む。	内面に煤付着
39	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		4.1	縦方向のナデ	斜め・縦方向の ナデ	明赤 褐色	にぶい 褐色	6mm以下の黒色粒・2mm以 下の黒色光沢粒を少し含む。	
40	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		5.2	ナデ・底面は 荒いナデ	ナデ	黄褐色	黒褐色・暗 オリーブ 褐色	1mm以下の褐灰色粒を 多く含む。	内面に煤付着
41	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		4.1	強いナデ	風化しており、 調整不明	褐色	褐灰色	3mm以下の灰色粒を少 し含む。	内面に黒班 あり
42	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		4.2	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	2mm以下の灰白色・黒褐 色光沢粒を多く含む。	
43	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		3.4	風化しており、 調整不明	ハケ目	黒褐色	褐灰色	2mm以下の灰黄色粒を 含む	外面に黒班 あり
44	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		3.1	ナデ	ナデ	にぶい 黄褐色	褐色	2mm以下の灰色粒・黒色 光沢粒を少し含む。	
45	弥生 土器	甕 底部	II層包含層		1.8	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	2mm以下の灰色粒・黒色 光沢粒を少し含む。	
46	弥生 土器	小型壺	II層包含層	6.9		横ナデ・磨き	横ナデ・ナデ	明赤 褐色	明赤 褐色	1mm以下の白色・半透明 白色粒を含む。	
47	弥生 土器	小型壺	II層包含層		0.8	横ナデ・磨き	ナデ	黄褐色	黄褐色	1mm程度の白色粒を含 む。	
48	弥生 土器	小型壺	II層包含層		0.7	ナデ	ナデ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	2mm以下の黒色光沢粒1mm以 下の半透明粒を少し含む。	

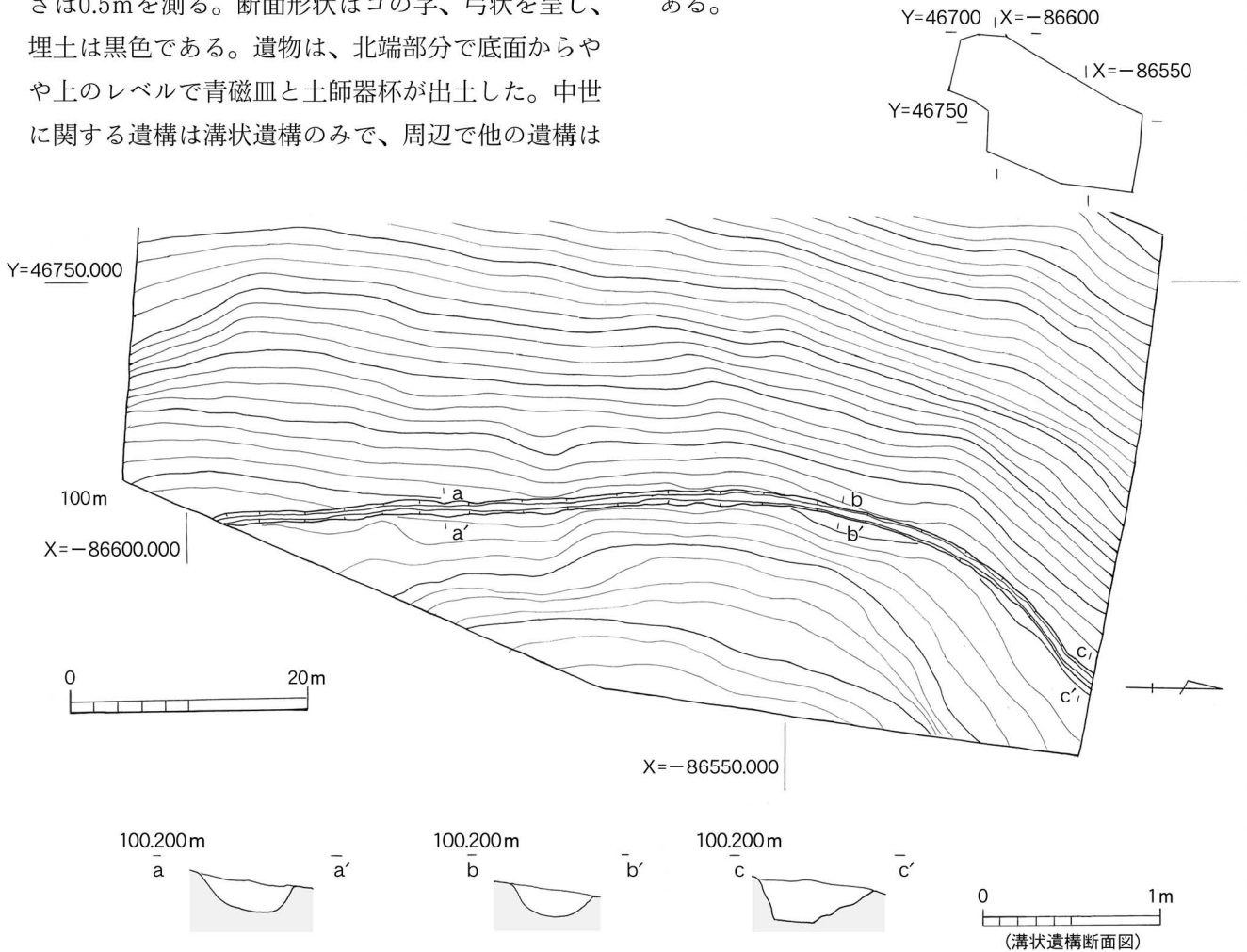
## 第7節 中世の遺構と遺物

### (1) 溝状遺構 (第15・16図)

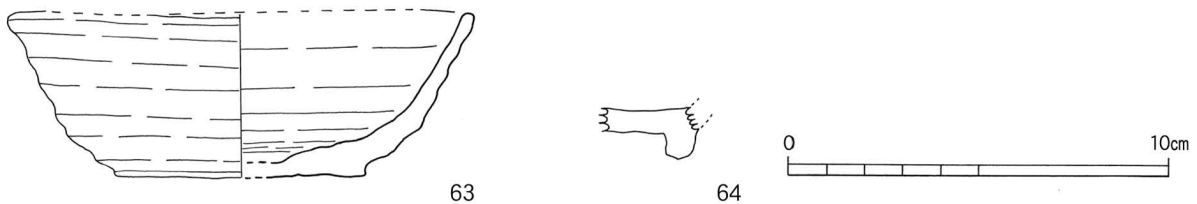
調査区東側で溝状遺構が検出された。溝状遺構は、南北方向に延び、100mの等高線に沿って緩やかに湾曲している。長さ約80m、溝幅は0.6~1m、深さは0.5mを測る。断面形状はコの字、弓状を呈し、埋土は黒色である。遺物は、北端部分で底面からやや上のレベルで青磁皿と土師器杯が出土した。中世に関する遺構は溝状遺構のみで、周辺で他の遺構は

検出されず、溝状遺構の性格は不明である。

64は、青磁皿の高台部分である。高台の内面は露胎となる。14世紀~15世紀のものである。63は土師器杯である。口径12cm、器高4.4cm、底径6.1cmである。ろくろ痕を明瞭に残し、口縁端部は丸く仕上げる。底部切り離しは粗いヘラ切りで張り出し気味である。



第17図 中世遺構配置図



第18図 溝状遺構出土遺物

第6表 土器観察表 (3)

遺物番号	種別	器種部位	出土位置	法量(cm)		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	外面	内面	外面	内面		
63	土師器	杯	溝状遺構	12	6.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄 橙色	浅黄 橙色	きめ細かい。砂粒をあまり含まない。	
64	青磁	碗か	溝状遺構					灰白色	赤灰色	緻密	

## 第8節 自然科学分析

### (1) 目的

市納上第1遺跡では弥生時代の周溝状遺構が1基検出された。床面埋土を洗浄したところ炭化物や炭化種子が採取された。そこで、その炭化物を放射性炭素年代測定を行うことによって、科学的なデータ

を得ることができる。その年代を考古学的手法での年代観と比較することができる。また、採取された炭化種子を種実同定することによって、当時の食生活や植生を解明できることが期待される。以上のような理由から自然科学分析を株式会社古環境研究所に業務委託した。

### (2) 放射性炭素年代測定

第7表 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	1号周溝状遺構, b	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.2	1号周溝状遺構, c	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.3	1号周溝状遺構, a	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.4	1号周溝状遺構, b	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.5	1号周溝状遺構, c	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS

AMS：加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

第8表 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	δ <sup>13</sup> C (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代 (西暦) (1σ : 68%確率, 2σ : 95%確率)
No.1	208541	1760±40	-23.5	1780±40	交点 : cal AD 240 1σ : cal AD 220~260, 290~320 2σ : cal AD 130~370
No.2	208542	1760±40	-24.6	1770±40	交点 : cal AD 250 1σ : cal AD 230~330 2σ : cal AD 140~380
No.3	208543	1840±40	-27.6	1800±40	交点 : cal AD 230 1σ : cal AD 150~250 2σ : cal AD 120~340
No.4	208544	1800±50	-27.1	1770±50	交点 : cal AD 250 1σ : cal AD 220~340 2σ : cal AD 130~400
No.5	208545	2410±40	-24.6	2420±40	交点 : cal BC 420 1σ : cal BC 740~710, 530~410 2σ : cal BC 760~620, 590~400

#### 1) <sup>14</sup>C年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

#### 2) δ<sup>13</sup>C測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定

同位体比 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

#### 3) 補正<sup>14</sup>C年代値

δ<sup>13</sup>C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料のδ<sup>13</sup>C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

#### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動を校正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 $\sigma$ (68%確率)と2 $\sigma$ (95%確率)は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 $\sigma$ ・2 $\sigma$ 値が表記される場合もある。

#### 3. 所見

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化米では1780 $\pm$ 40年BP(1 $\sigma$ の暦年代でAD220~260, 290~320年)、No.2の炭化米では1770 $\pm$ 40年BP(同AD230~330年)、No.3の炭化物では1800 $\pm$ 40年BP(同AD150~250年)、No.4の炭化物では1770 $\pm$ 50年BP(同AD220~340年)、No.5の炭化物では2420 $\pm$ 40年BP(同BC740~710, 530~410年)の年代値が得られた。

このうち、No.5では放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の校正曲線が不安定なためである。

#### 文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫(1999)放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

#### (2) 種実同定

##### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることが、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

##### 2. 試料

試料は、弥生時代の周溝状遺構SL1から採取された6試料である。試料採集箇所を第13図・第2表に示す。

##### 3. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

##### 4. 結果

###### 1) 分類群

分析の結果、草本3分類群が同定された。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実 イネ科

炭化しているため黒色で、長楕円形を呈し、胚の部分がかくぼむ。表面には数本の筋が走る。

マメ類 *Leguminosae* 子葉 マメ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈し、縦に一本の溝状の筋が走る。大きさはリョクトウと同程度であるが、形は大豆に類似する。

アカネ科? *Rubiaceae*? 種子

偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形の穴がある。炭化が著しく残りが非常に悪いことから、アカネ科?とした。

不明種実

かろうじて種実の形質が残っているものの、炭化



が著しく表面模様など観察部位が欠落して同定に至らないものは不明種実とした。

## 2) 種実群集の特徴

### 試料1 (b)

イネが検出された。

### 試料2 (a)

種実は検出されなかった。

### 試料3 (b)

アカネ科?が検出された。

### 試料4 (b)

アカネ科?が検出された。

### 試料5 (b)

マメ類が検出された。

### 試料6 (c)

アカネ科?が検出された。

## 5. 考察

弥生時代の周溝状遺構(SL1)の試料からは、イネ、マメ類、アカネ科?が検出された。このうち、イネとマメ類は栽培植物であり、弥生時代以降は比較的出土例が多い。アカネ科は、多年草で山野に生育し、有用植物として染料や薬用に使われる。

## 文献

笠原安夫(1985)日本雑草図説, 養賢堂, 494p.

笠原安夫(1988)作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻 生業, 雄山閣 出版, p.131-139.

南木睦彦(1993)葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

## 第9節 まとめ

市納上第1遺跡は、弥生時代の遺構・遺物を中心に旧石器時代、縄文時代の遺物がわずかに出土している。ここでは、遺物・遺構の検討を行いつつ、調査の成果について若干の整理を行うこととする。

### (1) 旧石器時代の遺物

旧石器時代に属すると考えられる遺物は、調査区の南側にわずかにみられる。出土した遺物は、ナイフ形石器や2次加工剥片等がある。

市納上第1遺跡の周辺には旭ヶ丘遺跡や谷ノ口遺跡など旧石器時代の散布地が知られている。

### (2) 弥生時代の遺構・遺物

**出土土器について：**Ⅲ層上面で竪穴住居跡1軒、周溝状遺構1基を検出した。また遺構内外からは弥生時代後期に位置づけられる土器が出土した。そこで甕形土器について器形・部位による分類を行う。

第1類：口径が25～30cmのもので中型甕にあたる。口縁部が緩やかにくの字状に屈曲する。口唇部は、面を持つものと丸いものがある。一番の特徴は、胴部が球胴状に丸みを持ち、中位に最大径がある。

第2類：緩やかに立ち上がった口縁部から、やや屈曲した頸部に続く。胴部はあまり丸みを持たず、長形胴を呈する。

第3類：口縁部が直線的に立ち上がり、他のもの比べ長い。胴部形態については、甕A類のように頸部の屈曲が明瞭にあり、丸みを持った球胴状になるものと、甕B類の長形胴になるものがある

第4類：口径が10cm程度で小型の甕である。口縁部は緩やかに立ち上がり、長胴の胴部となる。

第5類：甕の底部片を一括して扱う。さらに3つに細分される。

(a) 平底の底部で底径が4.5cmと小さい。内面の底部分は平面状になる。

(b) 平底で底径が5cm程度の小さいものである。内面の底部分は平面状にならない。

(c) 平底の底部で端部がわずかな張り出しをもつ。小型の甕の底部と思われる。

以上、甕形土器を第1～6類に分類を行った。第1類に類似する資料としては、前ノ田村上第1遺跡

の包含層から出土している。第2類の口縁部や第5類の底部の特徴から、大戸ノ口第2遺跡の13号住居出土のものに類似する。松永氏の宮崎平野部の編年では大戸ノ口第2遺跡の13号住居は5期にあたり、弥生時代後期後葉～終末期前半になる。

**遺構の時期について：**1号周溝状遺構から採取した炭化物等の自然科学分析では1780±40年(試料1)、BP1770±40年(試料2)、BP1800±40年(試料3)、BP1770±50年(試料4)、BP2420±40年BP(試料5)という結果が出ている。

1号周溝状遺構は出土した土器から弥生時代後期後葉～終末期前半の時期にあたりと考えられ、炭化物の年代と一致する。1号住居については、出土した土器が少なく、断定はできないが同時期のものであると推測される。

**周辺環境について：**1号周溝状遺構から採取した炭化種実の分析で、イネ、マメ類、アカネ科?の種実という結果が得られた。なかでもアカネ科?の種実が多く検出していることから、山野の様子が考えられる。そしてイネ、マメ類の種実も検出しており、食用に栽培されていたものであろう。しかし、周辺の環境が山地であったと推測されることから、マメについては近くで栽培は可能であったと思われるが、イネについては持ち込まれたものであったのではないだろうか。

### 〈参考文献〉

『前ノ田村上第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター2005

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書116集

「大戸ノ口第2遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』5

高鍋町教育委員会1991

松永幸寿「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』17宮崎考古学会 2001

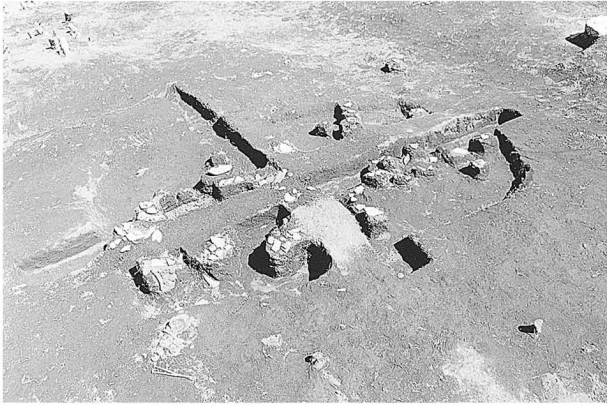




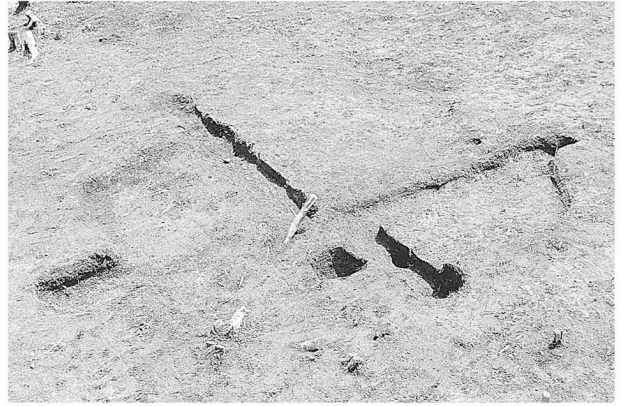
市納上第1遺跡全景



市納上第1遺跡全景（北から）



1号竖穴住居跡遺物出土狀況



1号竖穴住居跡



1号周溝状遺構遺物出土狀況



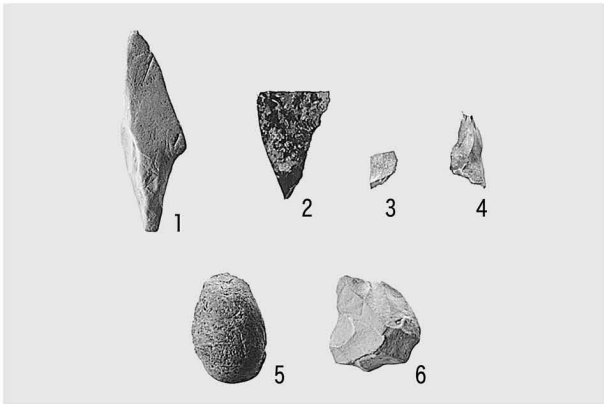
1号周溝状遺構



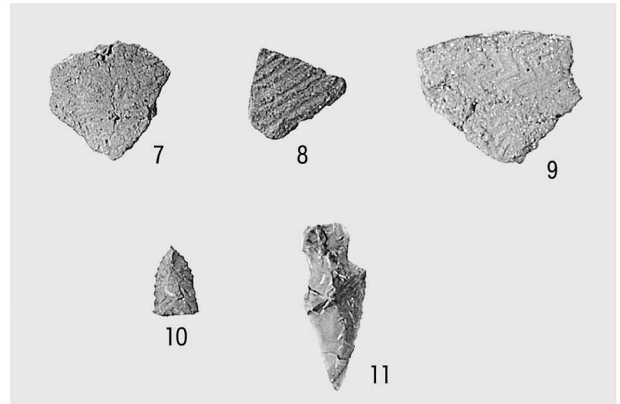
溝状遺構



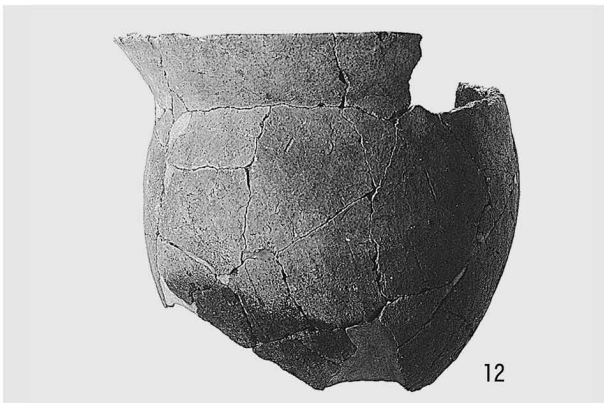
溝状遺構断面



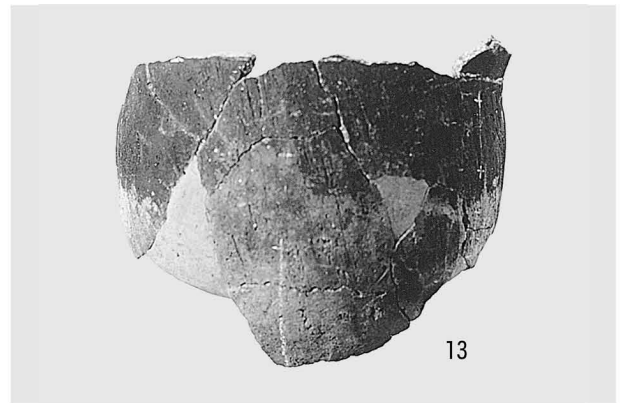
旧石器時代の遺物



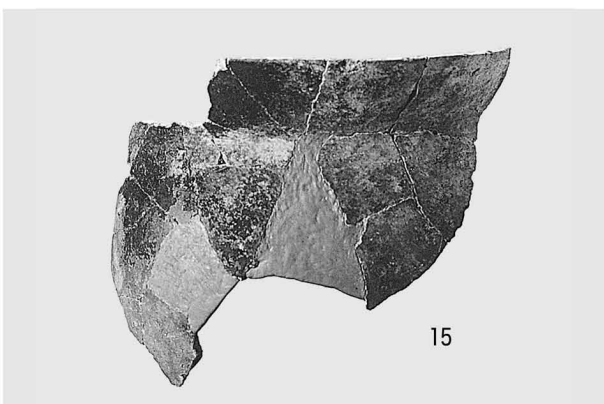
縄文時代の遺物



1号竪穴住居跡出土土器（1）



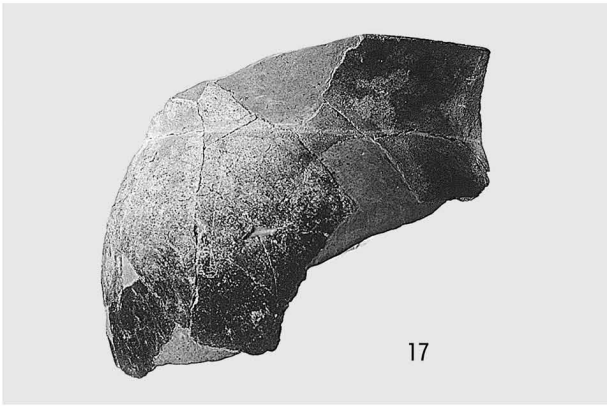
1号竪穴住居跡出土土器（2）



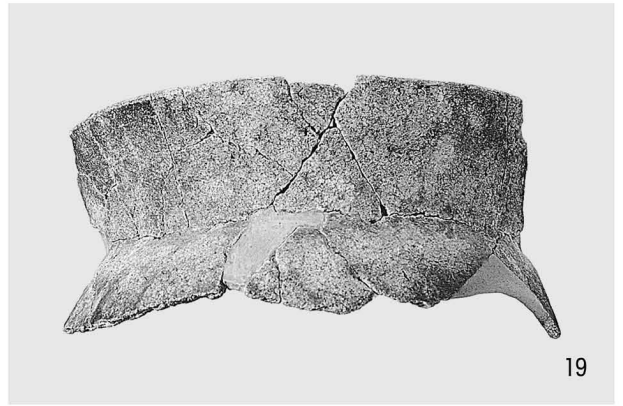
1号周溝状遺構出土土器（1）



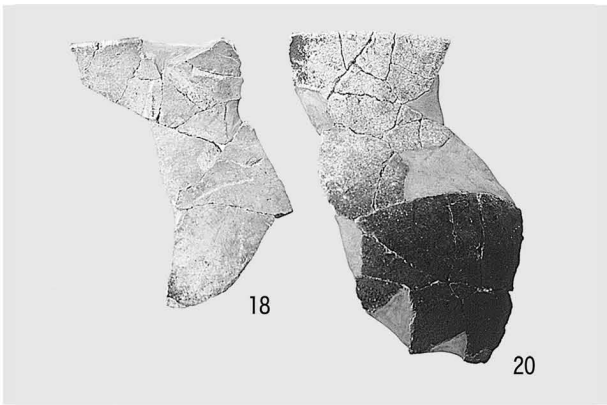
1号周溝状遺構出土土器（2）



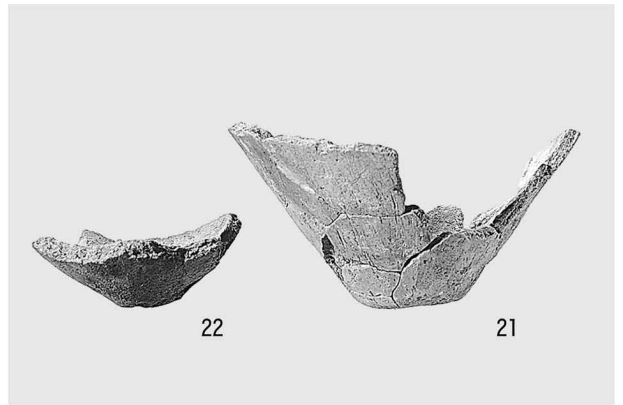
1号周溝状遺構出土土器 (3)



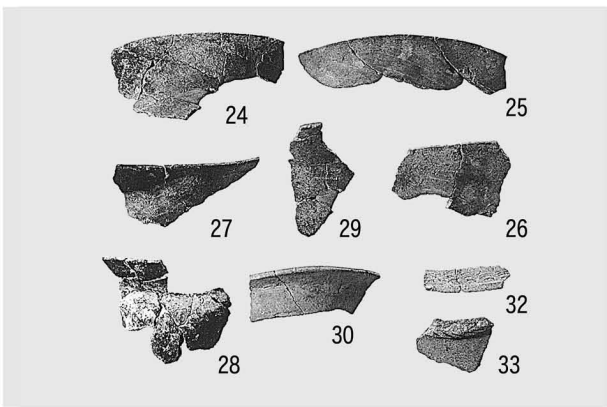
1号周溝状遺構出土土器 (4)



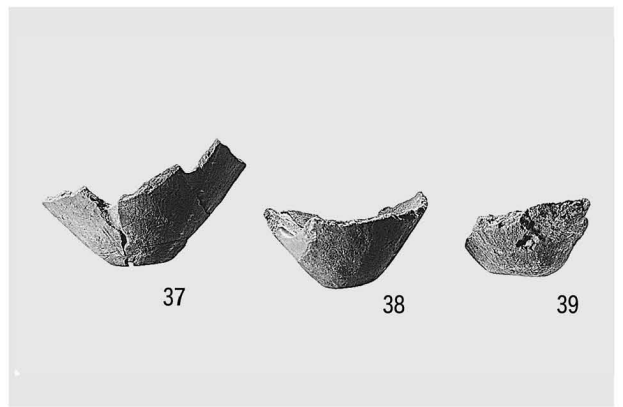
1号周溝状遺構出土土器 (5)



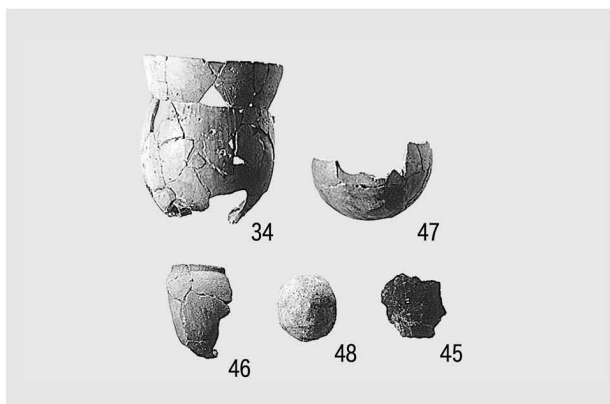
1号周溝状遺構出土土器 (6)



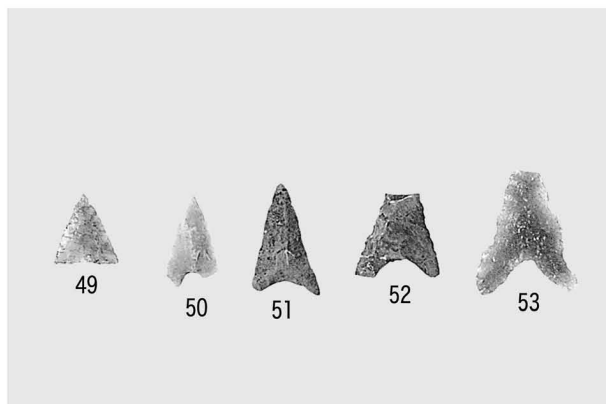
II層包含層出土土器 (1)



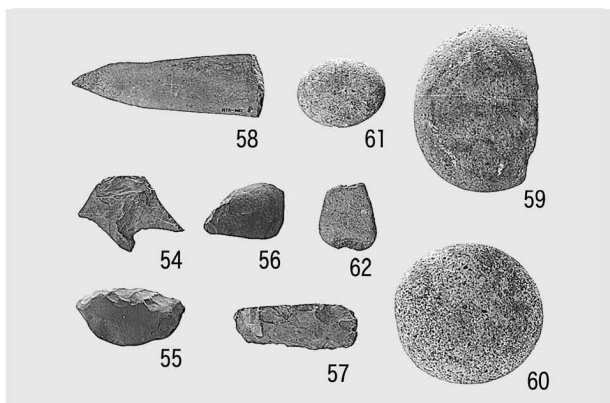
II層包含層出土土器 (2)



II層包含層出土石器 (3)



II層包含層出土石器 (1)



II層包含層出土石器 (2)



溝状遺構出土石器





## 第IV章 市納上第4遺跡確認調査

章題は市納上第4遺跡確認調査であるが、市納上第4遺跡と市納上第5遺跡は地形的に一連の遺跡と考えられ、また、市納上第4遺跡と市納上第5遺跡の間の部分でも遺物が表採できた事から対象地を拡大して調査した。従って、ここでは一括して調査成果を報告する。なお、本遺跡の範囲は川南町遺跡地図において、「幟立(のぼりたて)遺跡」として登録されている。

### 第1節 遺跡の立地

本遺跡は市納上第1遺跡から谷を隔てて南の丘陵端部に位置し、東から西へ傾斜する斜面に位置する。遺跡の地形を細かく見ると、北尾根部・谷部・南尾根部に分けられる。また、市納上第5遺跡は南尾根部に含めて記述する。

### 第2節 調査経緯と方法

調査前の状況は、随所に石器を含む多量の石が積まれた箇所があり、土器片も散乱していた。また、南尾根部の南側2/3は削平を受けて段状になっており、部分的に岩盤が露出していた。

トレンチは旧地形把握と土層の堆積状況を確認するため、等高線に直交するように設定した。市納上第4遺跡は南尾根部に2～4T、北尾根部に1T・6T・12T・13T、そして谷部に5～11T、また、市納上第5遺跡は1～3Tである。

谷部の5Tでは、表土下に黒色土層が確認された。5T西端では厚さ30cmだが東端では5mに及ぶ。黒色土が急に厚くなるのは5T中央付近であり、この深くなる部分がもともとの谷の範囲であると考えられる。谷の範囲を確認するため9～12Tを設定したが、11Tでのみ黒色土の傾斜変換線を確認した。従って、谷の範囲は5T中央から11Tを結ぶ線より東側になる。遺物は表採、表土、そして黒色土から出土し、トレンチ西端付近で遺物の集中箇所が認められた。7T・8Tで範囲を確認したところ、両トレンチの半ばを越えることはなく、輪郭も不鮮明であった。また、断ち割を入れて断面を観察した結果、

遺構らしき落ち込みは確認できず、遺物の出土状況も石器と細片化した土器が混在した状況であった。出土状況から遺物は黒色土堆積時に混入したと考えられる。

北尾根部では尾根の稜線上に2T、谷に向かう斜面に3T・4Tを設定した。いずれも褐色粘質土層(地山)で遺構検出を図ったが、植物痕跡や現代の開墾による攪乱が確認されたのみであり、遺構は検出されなかった。3Tでは遺物集中箇所があり、断面観察の結果、明瞭な落ち込みを確認できた。しかし、平面形は不整形であり、土質や遺物出土状況が5Tの遺物集中箇所と似ていることから遺構とは考えにくい。4Tでは盛土が確認された。空中写真(国土画像情報(カラー写真)国土交通省)から、昭和50年頃、調査区を東西に抜ける小道がこの部分を通っていたことがわかり、盛土は小道を造る際の造成土であろう。なお、この盛土から近現代の鉄輪が出土しており、造成の時期は新しい。市納上第5遺跡ではいずれのトレンチにおいても、遺構は検出されず、土器と石器が少量出土したのみであり、遺物の出土状況や種類は市納上第4遺跡と同様であった。

北尾根部では1T・6Tにおいて、地山上面で遺構検出を図ったが、南尾根部と同様、植物痕跡や攪乱が確認された。6T東端では深さ1mの溝を確認したが、表土直下から掘り込まれており、近現代の所産と思われる。溝の規模を確認するために、12T・13Tを設定したところ、この溝は北端が6Tにあり、13Tと12Tの間まで続くようである。

以上調査の概要を述べた。旧地権者からの聞き取りでは、尾根部で戦後に蜜柑栽培、杉の植林などが行われ、開墾の過程で削平や大規模な土の移動があったという情報を得た。土層堆積状況、遺物出土状況や遺構の検出がなかったことなどの発掘調査の結果は聞き取りの成果と符合する。従って、本遺跡では良好な遺物包含層や遺構が残存している可能性は極めて低いと考えられ、本調査の必要はないと判断した。出土遺物は二次堆積の包含層遺物ではないが、遺跡の性格を考える上で重要であり、回収可能



写真1 調査前風景北尾根部



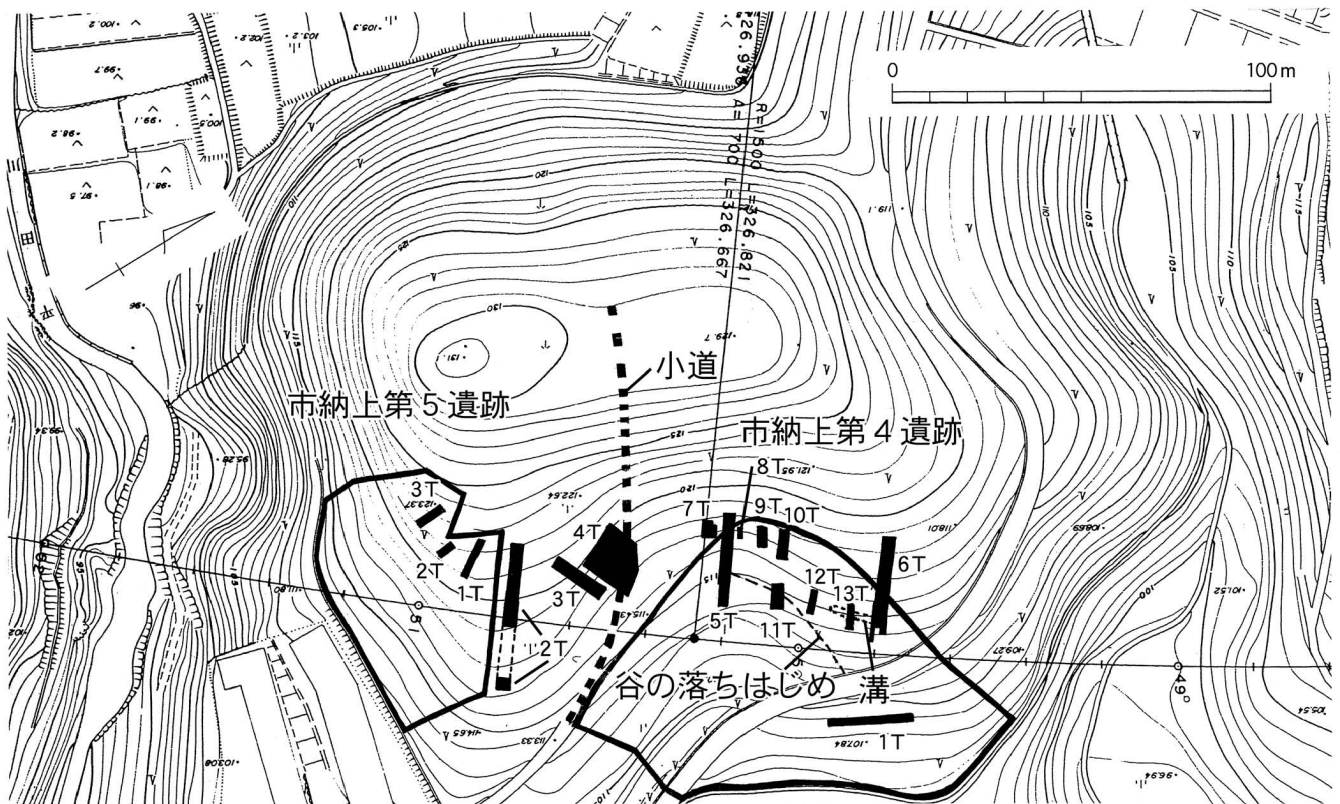
写真2 調査区風景（北尾根部から南尾根部を望む）



写真3 5T遺物出土状況



写真4 3T遺物出土状況



第1図 トレンチ配置図 (1/2,000)



写真5 4 T 盛土検出状況

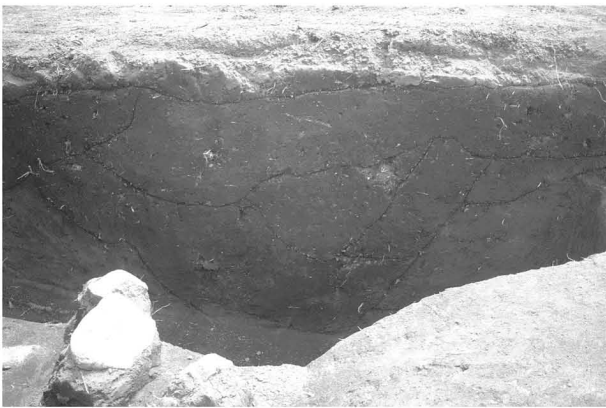


写真6 6 T 溝断面

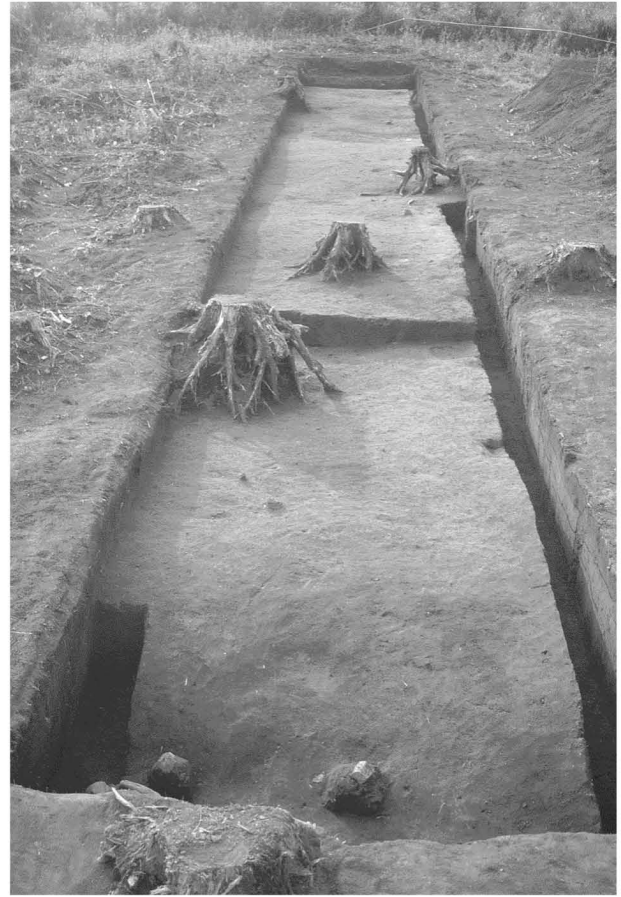


写真7 6 T 全景

な遺物は極力回収して調査を終えた。なお、調査期間は平成16年5月24日から7月14日までである。

### 第3節 層序と旧地形復元

基本層序は第1表に示した。このうち、第Ⅲb層が本遺跡の地山であり、この層の上面が旧地形を表すと考えられる。第Ⅲb層は、尾根部では現在とほぼ同じ傾斜をしているが、谷部では現在より深い。

本遺跡では広域火山灰の良好な堆積がないため、3 Tにおいて第Ⅱ、Ⅳa、Ⅳb層の土を採取し、火山灰の有無を顕微鏡で観察した。第Ⅱ層はK-Ahが多く含まれるが、輝石等も含まれるため、霧島系火山灰が混じると考えられる。第Ⅳa層はAT主体だが磁鉄鉱が含まれており、別系統の火山灰も混じる。第Ⅳb層はATがなく、ブラックバンドに含まれる始良深港～オコシロームに近い火山灰が含まれていた。第Ⅳa・Ⅳb層も火山灰の一次堆積ではないが、断面観察からも不整合面は見られず、傾斜も

現在とほぼ同じであることから、風雨によって緩やかに流れた結果、様々な火山灰が混在するようになったと考えられる。従って、AT降灰時の地形は現在とほぼ同じであると推定できる。なお、採取した土の観察と分析は当センター赤崎広志主査の協力を得た。

### 第4節 出土遺物

前節まで述べたとおり、良好な包含層からの出土遺物はない。しかし、出土土器の時期は縄文時代後期前葉にほぼまとまる。また、尾鈴山酸性岩類製の石器が伴うという成果もあるので、以下、その概要を述べる。

#### (1) 土器 (第6～9図)

遺物量はコンテナ7箱分あり、ほとんどが縄文時代後期初頭から前葉の土器である。土器は細片化が著しいことや確認調査のみの資料であることから網羅的な接合は行わなかった。従って、時期がある程

度わかり、かつ図化可能なものを図示した。

縄文時代早期の土器は2点あり、1は下剥峰式、2は早水台式である。3～5は胎土に滑石が混入されており、独特の滑り感がある。特に3は滑石の量が多く、文様から並木式の可能性がある。6～22は凹線文・沈線文系の土器である。14と19は沈線文であり、14は文様から出水式と考えられる。23～29は外面の文様が無文であるが、口唇部に太いキザミを施すものであり、中期の伝統をひくものであろうか。33～41は貝殻腹縁の連続刺突文を施すものであるが、二並行沈線間に刺突文を施すものは綾式である。38は二並行沈線間に貝殻以外の工具による連続刺突文を施すので、綾式の範疇で考えられるかもしれない。そのほかの刺突文を施すものとして42の半截竹管文、43は巻貝の刺突文である。44～50は口縁がキャリパー状に内湾し、口縁部に斜方向の短沈線を施すものである。50は口縁部に短沈線を持たないが、口縁の形から同系統のものであろう。これらの土器は型式名が設定されていないが、類例として可愛遺跡（北川町）、門川南町遺跡（門川町）、右葛ヶ迫遺跡（宮崎市）などが挙げられる。51～58は磨消縄文系の土器である。51～53は精製の土器であり、在地の土器ではない可能性がある。56は充填縄文である。57は磨消縄文土器であるが、縄文も沈線も粗雑である。58は貝殻腹縁刺突を施した擬似縄文である。第9図には底部資料を掲載した。64～66は網代編、67は振り編、68は木の葉圧痕が残っている。74は上げ底であり、調整方法からも晩期の可能性がある。75は弥生土器の甕の底部である。底部資料も接合を行っておらず、胴部や口縁部との関係は不明である。

## （2）石器（第10～14図）

打製石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧及び同未製品・切目石錘・打欠石錘・有溝石錘・敲石・磨石・凹石・石皿・礫器は出土土器の時期から縄文時代後期初頭から前葉のものともみてよかろう。また、図示資料以外にホルンフェルス・砂岩・尾鈴山酸性岩類製剥片が大量に、赤チャート・石英・姫島産黒曜石・桑ノ木津留産黒曜石・南九州産黒曜石（日東系）の剥片がごく少量採集されている。注目すべき点は

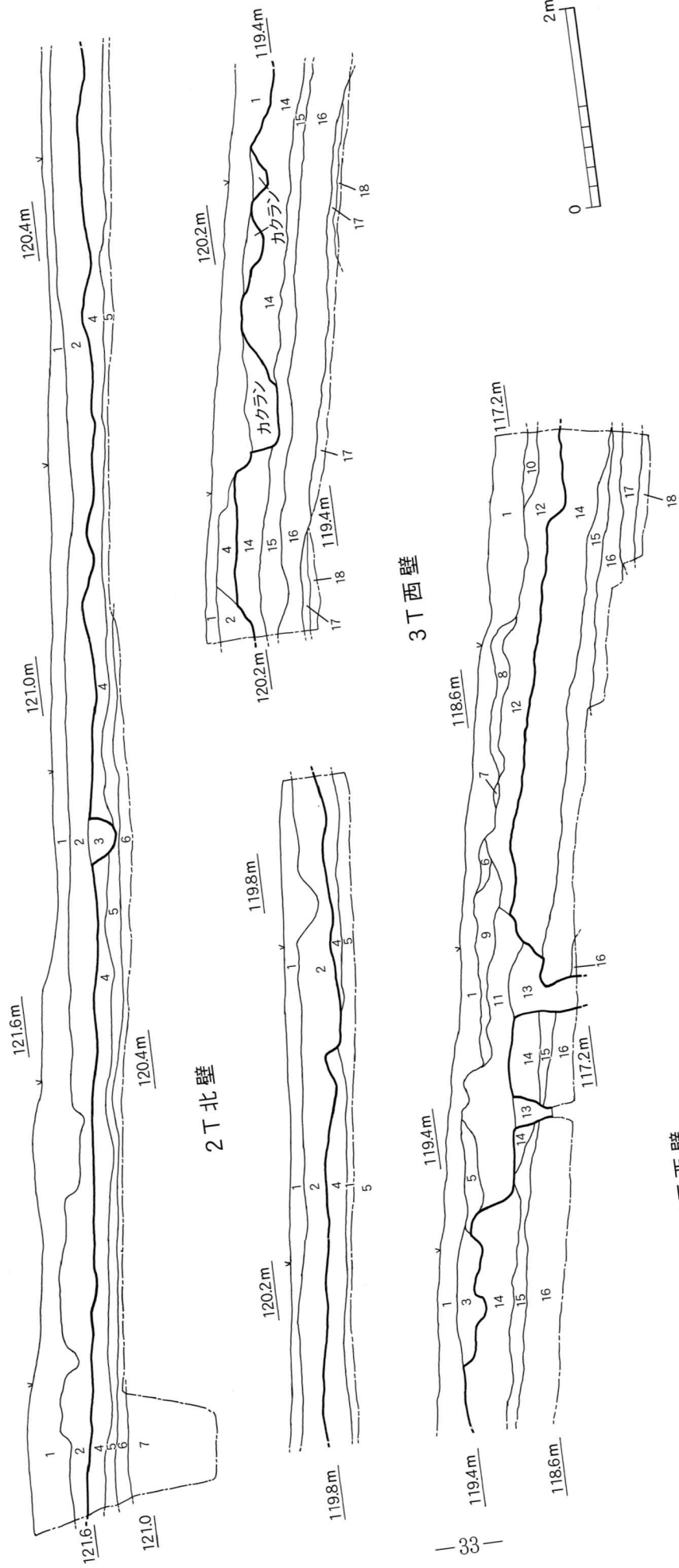
大量の打欠石錘（185点）の存在、尾鈴山酸性岩類の打欠石錘・礫器への多用、主にホルンフェルス等を用いた打製石斧・磨製石斧の生産である。大量の打欠石錘はいずれも300g前後以下の小形品であり（第15図）、それは遺跡が付近に有力な河川のない内陸の山間部に立地することと関連するのであろう。なお、細石刃が1点採集されており、後期旧石器時代には小規模なキャンプ地あるいは狩り場等が存在したのであろう。

## 第5節 まとめ

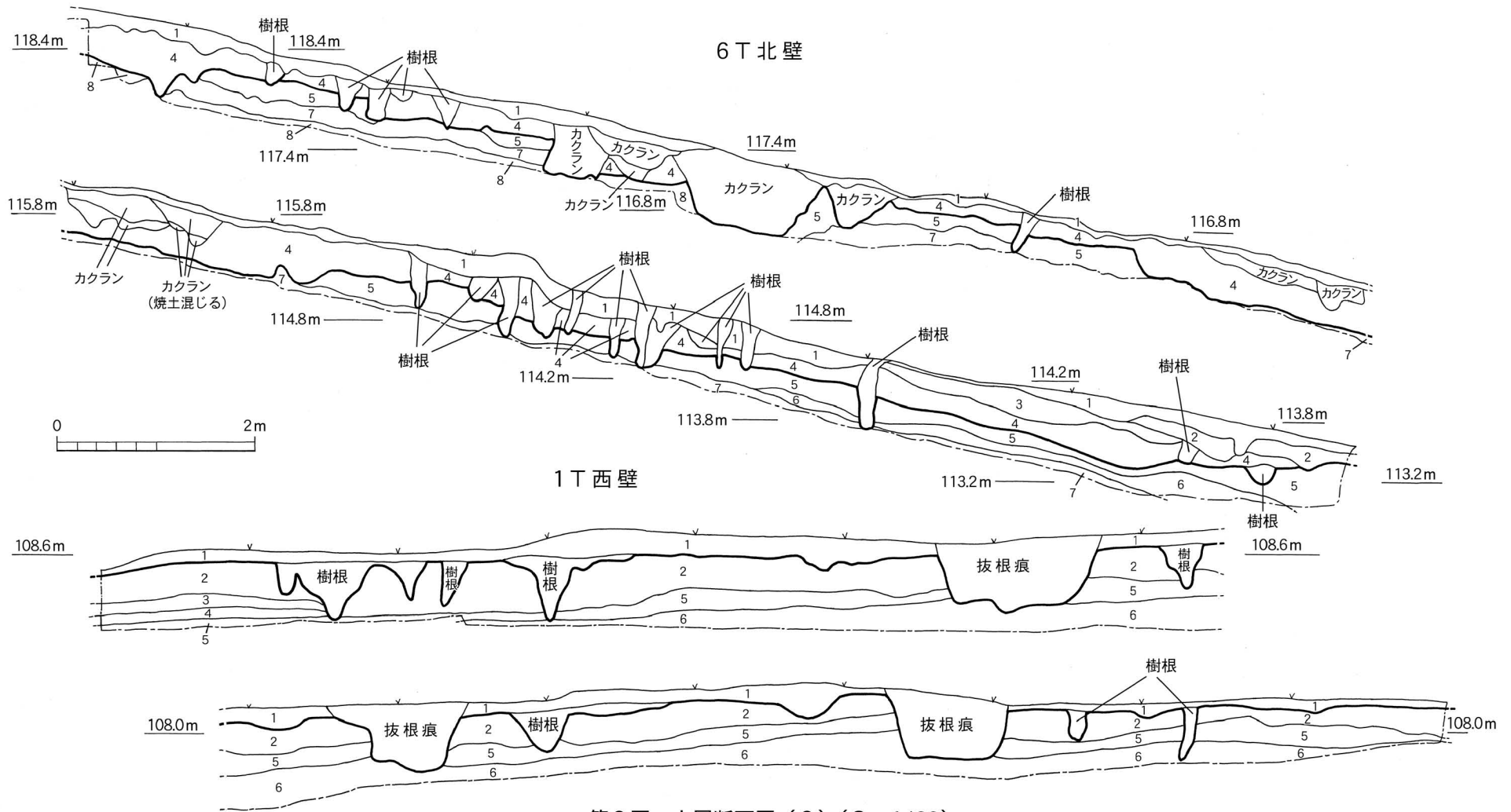
本遺跡は戦後の開拓により既に破壊されていたが、表採も含めコンテナ27箱（土器7箱、石器20箱）の遺物が出土した。遺物の検討から縄文時代後期初頭から前葉を中心とした時期の遺跡であったことがわかり、これらの土器に伴って大量の尾鈴山酸性岩類製の石器が出土した。尾鈴山酸性岩類を磨石・石皿類以外の石器石材へ利用することは近年、川南町内を中心に事例蓄積が進んでいるが、器種との対応が明確でなかった。今回、尾鈴山酸性岩類が礫器に利用されることが明らかになった点は大きな成果である。また、大量の遺物から該期の集落の存在が十分予想されるが、川南町域では調査例が少なく、今回調査の資料は貴重なものとなるであろう。

<引用参考文献等>

- 『川南町の埋蔵文化財』遺跡詳細分布調査報告書 川南町 1983
- 『宮崎県史』資料編 考古1 宮崎県 1988
- 『門川南町遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 1996
- 『右葛ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2000



第2図 土層断面図(1) (S=1/60)



第3図 土層断面図(2) (S=1/60)

第1表 基本層序

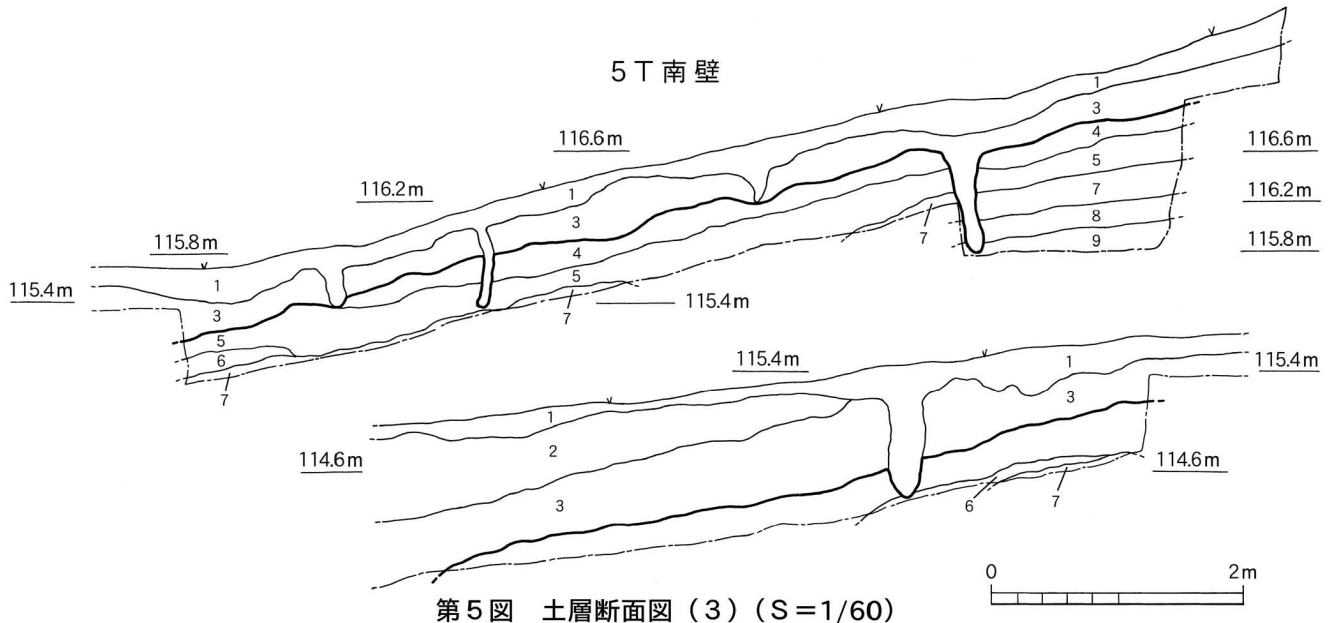
基本層序	層名	土色	粘性	しまり	遺物	特徴
Ia	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中	縄文時代後期～現代	表土
Ib	暗褐色粘質土	7.5YR3/4	中	中	縄文時代後期～現代	造成土
II	黒褐色粘質土	10YR2/2	中	中強	縄文時代早期～弥生時代	硬質の黒色土をブロック状に含む
IIIa	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中強	縄文時代早期～弥生時代	褐色粘質土を斑に含む 竹根等植物による攪乱激しい
IIIb	褐色粘質土	10YR3/4	中	強	無遺物層	色質ともに安定 地山
IVa	黄褐色砂質土	10YR5/8	弱	強		砂質土に硬質の黒褐色土をブロック状に含む
IVb	黒褐色粘質土	7.5YR3/2	強	強		褐色粘質土に硬質の黒褐色土をブロック状に含む
IVc	暗赤褐色粘質土	5YR3/2	中	強		暗褐色粘質土に若干の小礫と硬質の黒色土をブロック状に含む
V	暗褐色粘質土	7.5YR3/4	弱	強		小礫を多く含む
Via	明褐色粘土	2.5YR5/8	強	強		2cm以下の赤褐色礫を疎に含む
Vib	橙色粘土	7.5YR6/8	強	強		Via層と同質で色が異なる
VII	岩盤	-	-	-		-

市納上第4遺跡

市納上第5遺跡

7・8T		9～13T		1T		2T		2T	
Ia	10	Ia	10	Ia	25	Ia	25	Ia	40
II	30	IIIb	20	IIIa	30	IIIa	30	IIIa	25
IIIb	10			IIIb	20	IIIb	20	VII	10
				V	25	VII	10		
				VII	10				

第4図 土層柱状図(数値は層厚)

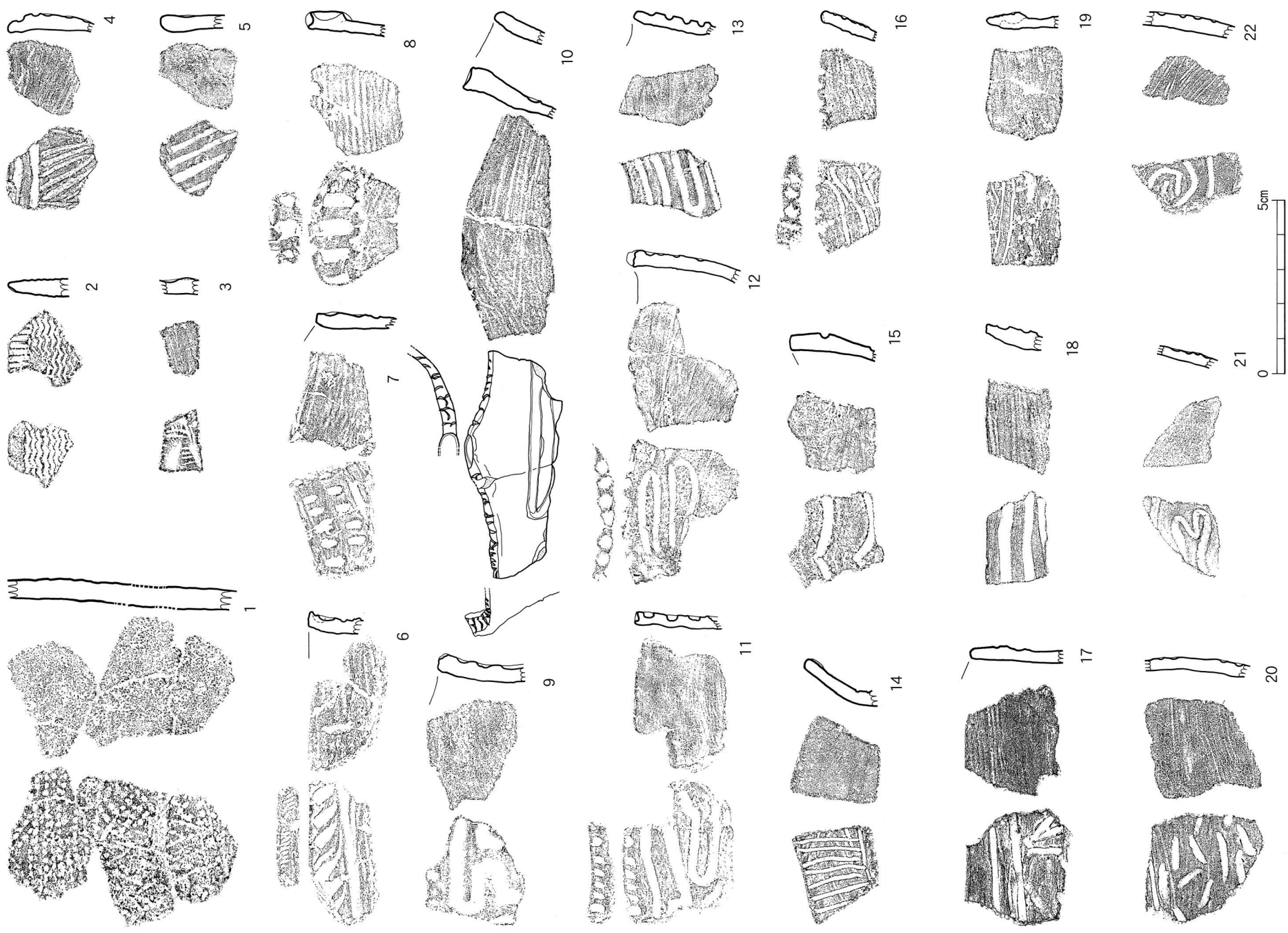


第5図 土層断面図 (3) (S=1/60)

第2表 土層観察表

トレンチ	基本層序	層番号	層名	土色	粘性	しまり	特 徴
1 T	I b	1	表土	10YR3/4	中	弱	—
	III b	2	褐色粘質土	10YR4/6	中	中	地山
	VI a	3	黄褐色砂質土	10YR5/8	弱	弱	6 T 6層と同層
	VI b	4	暗褐色粘質土	10YR3/3	中	中	2 T 4層、3 T 16層と同層
	V	5	暗褐色粘質土	7. 5YR3/4	中	中	2 T 5層と同層 小礫を多く含む
	VII	6	岩盤	—	—	—	—
2 T	I a	1	表土	10YR3/3	中	弱	—
	III a	2	黄褐色粘質土	10YR5/6	中	弱	4層に似るが、竹木の根による攪乱が激しい
	—	3	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	弱	4層に似るが炭化物と小礫を若干含む
	III b	4	褐色粘質土	10YR4/6	中	弱	地山 黒褐色土をブロック状に含む
	—	5	赤褐色粘質土	5YR4/8	中	中	小礫含む
	V	6	黄褐色小礫層	7. 5YR7/8	無	強	1 cm以下の小礫の層である
	VI a	7	明赤褐色粘土	2. 5YR5/8	強	強	2 cm以下の赤褐色礫を疎に含む 下部は岩盤
3 T	I a	1	表土	10YR3/3	中	弱	—
	—	2	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中	攪乱 焼土・炭化物を含む
	I b	3	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中	様々な土や炭化物を含む 色質共に不安定 造成土か
		4					
		5					
		6					
		7					
		8					
		9					
		10					
		11					
		12					
	II	11	黒褐色粘質土	10YR2/3	弱	強	非常に硬質で白色粒・炭化物を含む 遺物多し サンプル採取 (A)
	III a	12	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中	色質共に不安定
	—	13	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中	黄褐色・黒褐色の土を少量含む 樹根か
	III b	14	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中	黄褐色・黒褐色の土をブロック状に少量含む
	IV a	15	黄褐色砂質土	10YR5/8	中	中	A TをベースにMB 2?をブロック状に含む サンプル採取 (B)
	IV b	16	黒褐色粘質土	7. 5YR3/2	強	強	MB 2?をブロック状に含む サンプル採取 (C)
IV c	17	暗赤褐色粘質土	5YR3/2	中	強	MB 2?をブロック状に含む、小礫を少量含む	
V	18	黄褐色粘質土	10YR5/8	中	強	小礫を多量に含む	
4 T	I b	1	暗褐色粘質土	7. 5YR3/4	中	中	黒色・褐色粘質土等下位の土をブロック状に、また焼土・炭化物を若干含む
	I b	2	暗褐色粘質土	7. 5YR3/4	中	中	1層に似るが、含まれる土の密度は低い
	I b	3	黒褐色粘質土	10YR3/2	中	弱	—
	II	4a	黒褐色粘質土	10YR2/3	中	強	4 B層に似る
	II	4b	黒褐色粘質土	10YR2/3	中	強	硬い黒色土とK-Ahをブロック状に含む
	III a	5	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	弱	—
	III a	6	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	弱	5層に似るが褐色・黒色粘質土を粒状に含む
	III a	7	褐色粘質土	10YR4/4	中	中	—
	III a	8	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中	硬い黒色土をブロック状に含む
	I b	9	黒褐色粘質土	10YR2/2	中	弱	—
	I b	10	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	弱	15層に似るが黒褐色土が混じる
	III a	11	褐色粘質土	10YR4/4	中	弱	8層に似るがしまりが弱い
	III a	12	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	弱	8層に似るが硬い黒色土のブロックを含まない
	III a	13	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	強	14層に似た土を含む
III b	14	褐色粘質土	10YR4/6	中	強	地山 色質共に安定	
5 T	I a	1	表土	10YR3/4	中	中	—
	II	2	黒褐色粘質土	10YR2/2	中	強	白色粒と小礫を若干含む
	II	3	黒褐色粘質土	10YR2/2	中	強	2層に似るが更に硬い
	III b	4	褐色粘質土	10YR4/4	中	強	地山 褐色の濃い部分が斑状に混じる
	III b	5	褐色粘質土	10YR4/6	中	強	4層とほぼ同じだが色質共に安定しており、5 mm大の小礫を少量含む
	III b	6	暗褐色粘質土	10YR3/4	中	中	5層に似るが若干色が暗い
	V	7	暗褐色粘質土	7. 5YR3/3	強	強	調査区全域に分布する岩盤直上の層であり、小礫を含む
	VI a	8	明褐色粘質土	7. 5YR5/8	強	強	2 T西端 (高所) で見られた岩盤直上の層と似ており、小礫を多量に含む
	VI b	9	橙色粘質土	7. 5YR6/8	強	強	7層に似るが色は異なり、質は同様
6 T	I a	1	表土	10YR3/4	中	中	—
	—	2	暗褐色粘質土	10YR3/3	中	中	—
	—	3	暗褐色粘質土	10YR3/3	中	中	若干褐色系の土が混じる
	III a	4	暗褐色粘質土	10YR4/6	中	中	若干小礫が混じる
	III b	5	褐色粘質土	10YR4/6	中	弱	4層に似るが、しまりが弱い
	IV a	6	黄褐色砂質土	10YR5/8	弱	弱	A T?をベースにMB 2?をブロック状に含む
	V	7	暗褐色粘質土	7. 5YR3/4	弱	弱	小礫を多く含む
	VII	8	岩盤	—	—	—	—

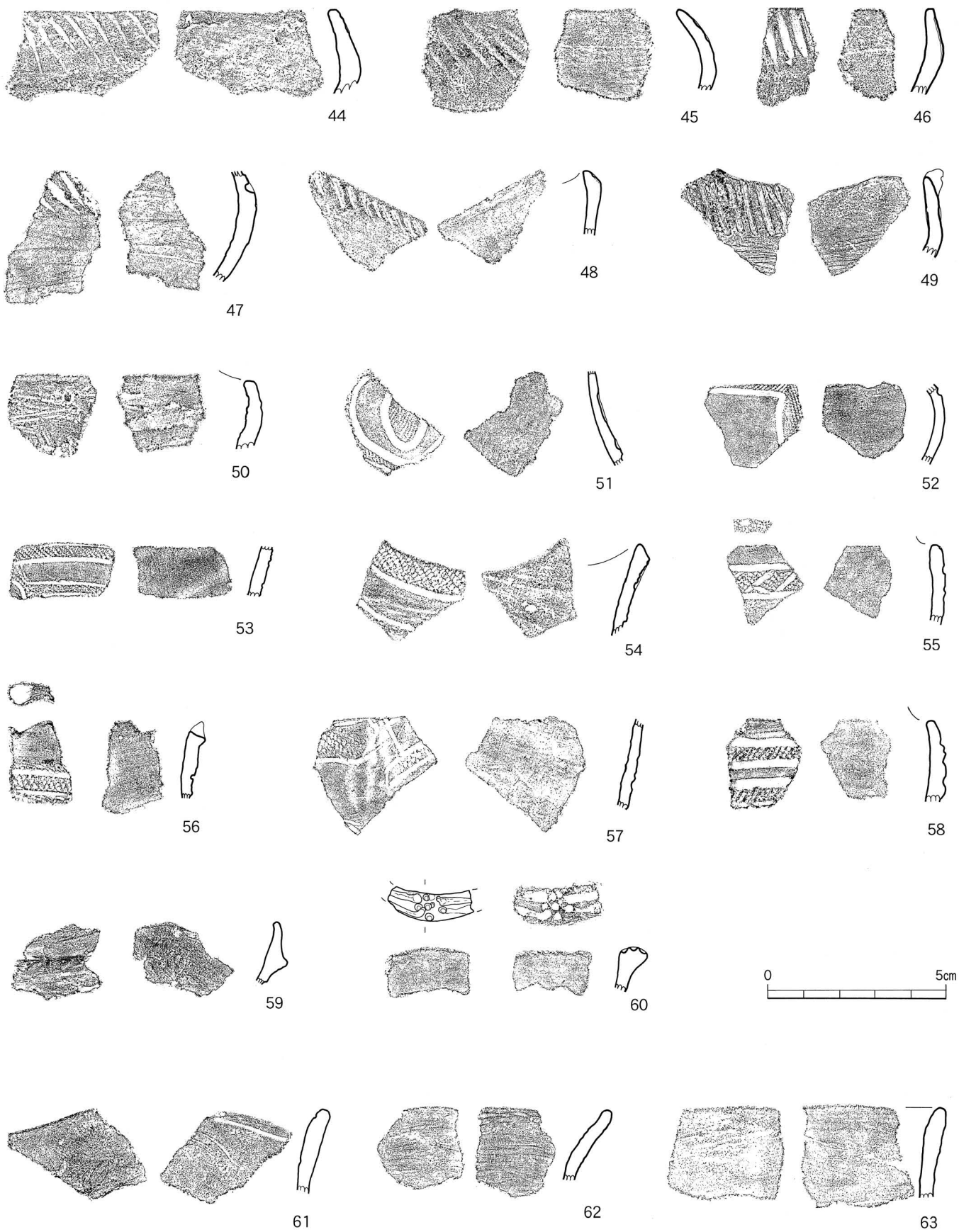




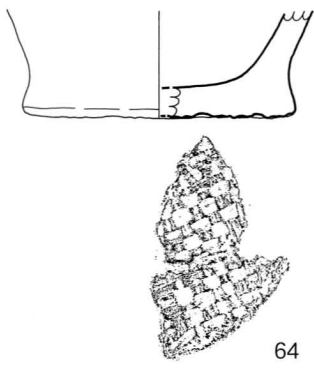
第6图 出土土器(1) (S=1/3)



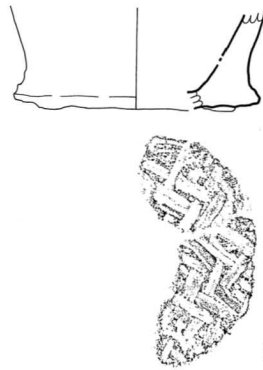
第7图 出土土器(2) (S=1/3)



第8图 出土土器 (3) (S=1/3)



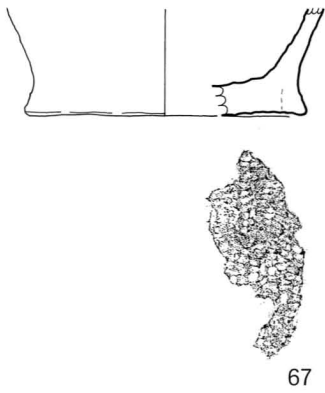
64



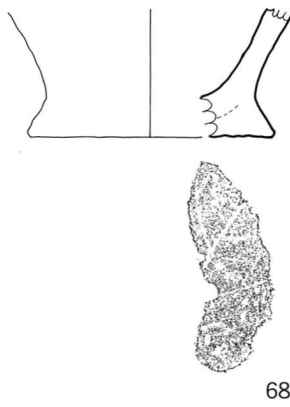
65



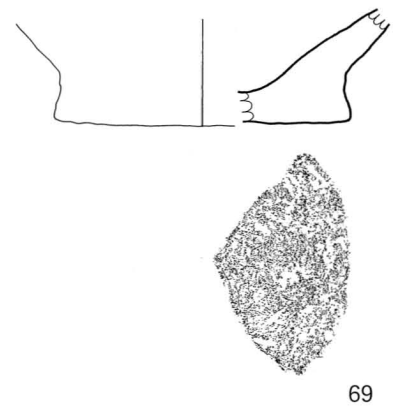
66



67



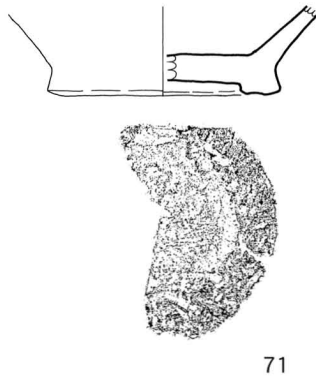
68



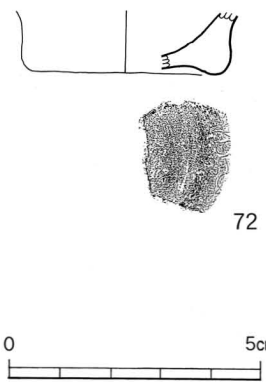
69



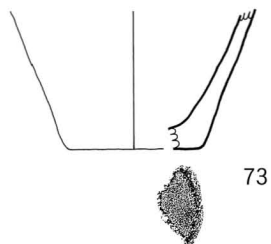
70



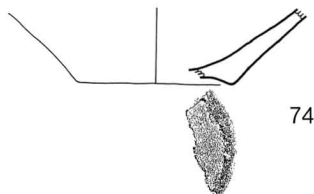
71



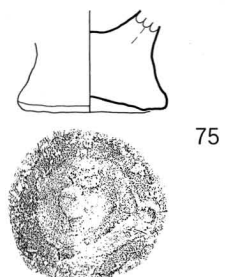
72



73



74



75

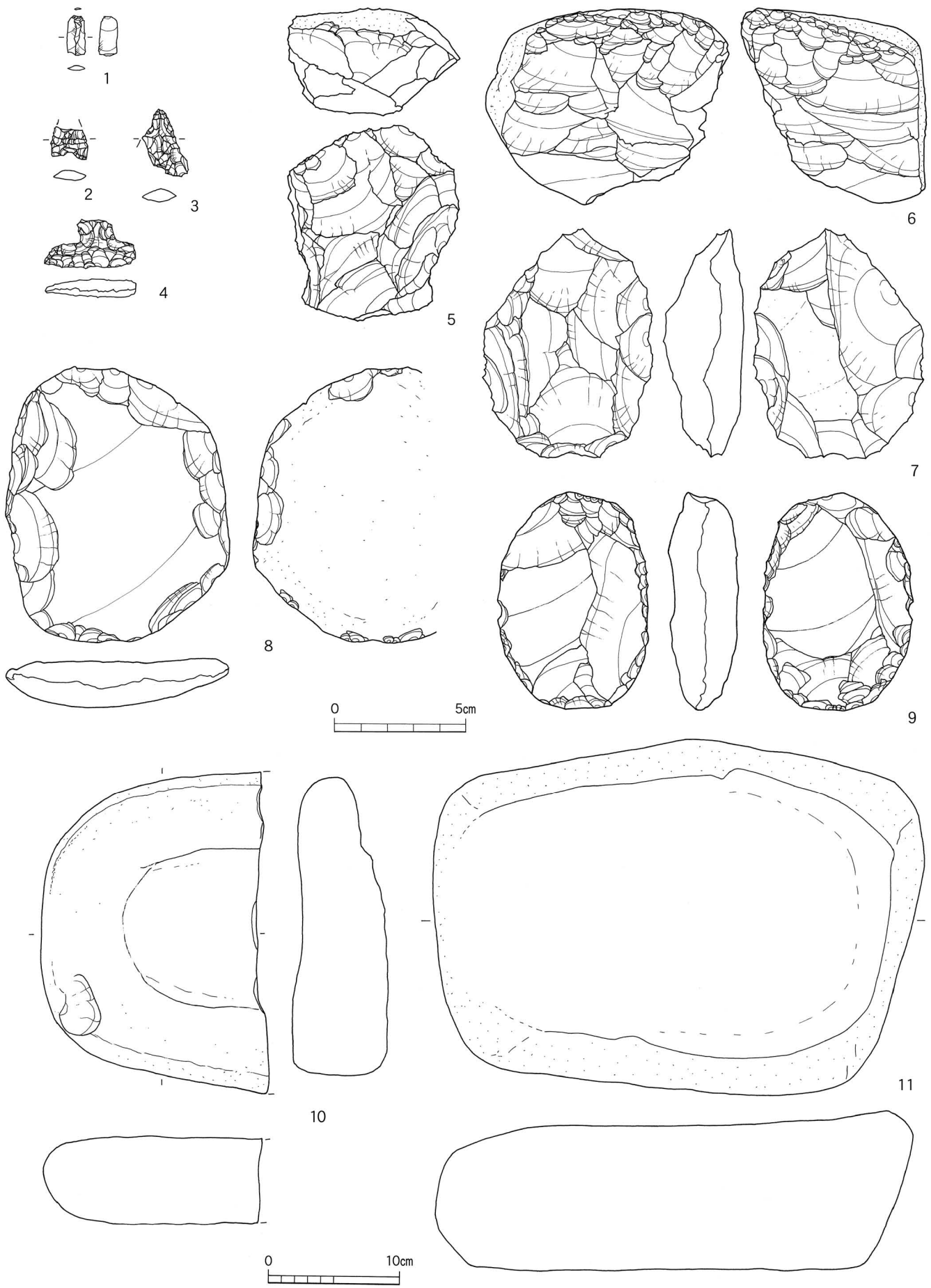
第9圖 出土土器 (4) (S=1/3)

第3表 土器観察表(1)

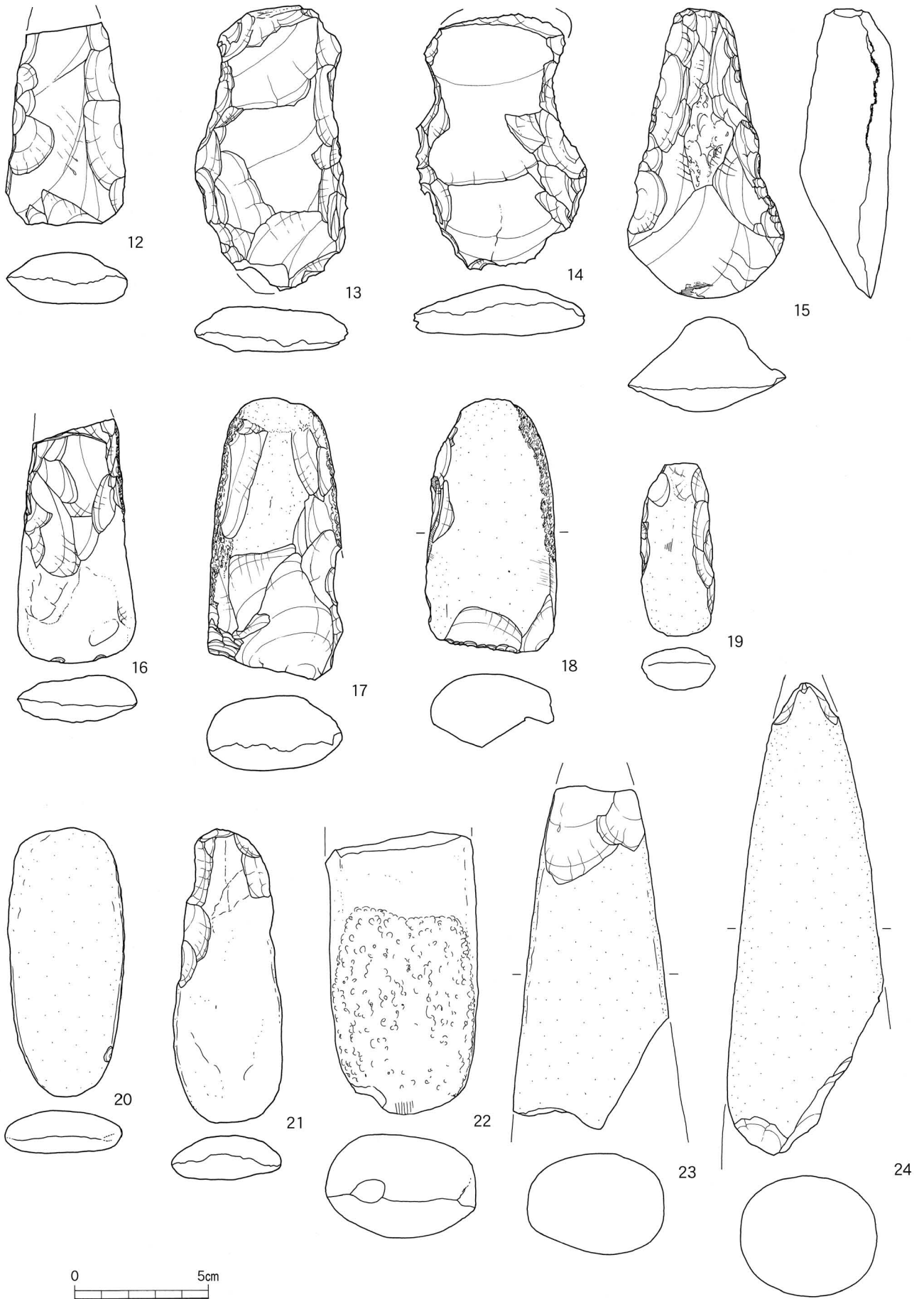
図面 番号	器種	部位	口径・底径 (cm)	文 様	調 整	色 調 外面 内面	胎 土 の 特 徴	備 考	
1	深鉢	胴部		外面に横と斜め方向の貝殻腹縁刺突	内面ナデ	にぶい 黄褐	褐	5mm以下の乳白色、黒色、灰色、赤褐色粒、雲母を密に含む	下剥峰式
2	深鉢	口縁		外面山形押型文、内面短沈線、山形押型文	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の乳白色、灰白色粒を含む	早水台式
3	深鉢?	胴部		2条の凹線間に刺突文	外面ナデ	灰黄褐	にぶい 黄橙	滑石を多量に含む	並木式?
4	深鉢	口縁		横、斜方向の沈線	内面貝殻条痕後ナデ	明褐	明褐	2mm以下の乳白色粒、黒色粒を含む	独特の滑り感あり 滑石入りか
5	深鉢	口縁		斜方向の沈線	内面ナデ、指頭圧痕 外面ナデ	にぶい 橙色	橙	2mm以下の灰色粒	独特の滑り感あり 滑石入りか
6	深鉢	口縁		斜方向と横方向の沈線	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	明赤褐	明赤褐	5mm以下の赤褐色、乳白色、半透明粒を含む	
7	深鉢	口縁		凹点文2段の下に横方向の沈線	内外面ナデ	橙	褐灰	2mm以下の赤褐色、黒褐色、乳白色粒を多く含む	波状口縁
8	深鉢	口縁		貼り付けた粘土に縦方向の短凹線、口唇部にキザミ	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	にぶい 褐	明褐	3mm以下の乳白色、透明粒、角閃石を含む	
9	深鉢	口縁		外面凹線、口唇部に浅いキザミ	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 橙	3mm以下の白色・灰色粒、角閃石を含む	阿高式系
10	深鉢	口縁		口唇部にキザミ、波頂部に押圧文、外面に沈線	内面貝殻条痕 外面ナデ	にぶい 褐色	橙	3mm以下の褐色粒と、0.5mm以下のガラス状微粒子を含む	波状口縁
11	深鉢	口縁		口唇部にキザミ、波頂部に押圧文、外面に沈線	内外面ナデ	にぶい 橙	明褐灰	1.5mm以下の灰色粒と角閃石を多く含む	
12	深鉢	口縁		口唇部にキザミ、波頂部に押圧文、外面に沈線	内外面ナデ	橙	灰褐	2mm以下の褐色・灰色粒を多く含む	外面に煤付着
13	深鉢	口縁		外面沈線	内面貝殻条痕 外面ナデ	橙	にぶい 橙	1mm以下の乳白色粒を含む	外面に煤付着
14	深鉢	口縁		縦と横方向の沈線	内外面ナデ	褐	にぶい 褐	2mm以下のにぶい黄橙色	波状口縁
15	深鉢	口縁		外面沈線	内外面ナデ	黒褐	黒褐	4mm以下の黒褐色・白色粒	波状口縁
16	深鉢	口縁		外面細沈線、口唇部にキザミ	内面ナデ 外面貝殻条痕後ナデ	にぶい 黄橙	灰黄褐	1mm以下の白色粒をわずかに含む	
17	深鉢	口縁		外面沈線	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	にぶい 黄橙	浅黄	2mm以下の赤褐色粒、角閃石を含む	波状口縁
18	深鉢	口縁		外面太沈線	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の白色・灰色粒を含む	
19	深鉢	口縁		外面に細い沈線	内外面工具ナデ、	褐灰	灰黄褐	雲母が少量、6mm以下の灰色、赤褐色粒を含む	波状口縁
20	深鉢	胴部		外面に方向に統一性のない短沈線	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	明褐	橙	3mm以下の乳白色、灰色、黒色、光沢粒を含む	
21	深鉢	胴部		外面沈線	内外面ナデ	にぶい 褐	明赤褐	4mm以下の灰色・黒色・乳白色粒を含む	
22	深鉢	胴部		外面沈線	内面貝殻条痕 外面ナデ	にぶい 赤褐	黒褐	角閃石、1mm以下の乳白色粒を含む	
23	深鉢	口縁		口唇部に深いキザミ	内外面ナデ	にぶい 褐	橙	2mm以下の褐色・灰色粒、角閃石を含む	波状口縁
24	深鉢	口縁		波頂部にキザミ	内外面貝殻条痕後ナデ	明黄褐	黄灰	2mm以下の赤褐色粒を多く含む	波状口縁
25	深鉢	口縁		口唇部にキザミ	内外面ナデ	にぶい 黄褐	にぶい 黄橙	3mm以下の赤褐色・灰色粒を多く含み3mm以下の乳白色粒を含む	波状口縁
26	深鉢	口縁		口唇部にキザミ	内外面貝殻条痕後ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の灰色・白色粒を含む	
27	深鉢	口縁		口唇部にキザミを施しその間に竹管文	内面貝殻条痕 外面ナデ	灰黄褐	灰黄褐	1mm以下の灰色、赤褐色粒を含む	
28	深鉢	口縁		外面沈線	内外面ナデ	にぶい 赤褐	赤褐	2mm以下の白色粒を密に含み、4mm以下の黒褐色粒を含む	波状口縁
29	深鉢?	口縁		外面凹点?	内外面ナデ	にぶい 黄橙	暗灰黄	角閃石、雲母、1mm以下の白色流を含む	口唇部に捻った粘土紐を貼付け
30	深鉢	口縁			内外面貝殻条痕後ナデ	にぶい 黄橙	橙	2mm以下の半透明、白色粒を多く含む	波状口縁
31	深鉢	口縁			内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	灰褐	にぶい 黄橙	1.5mm以下の灰白色粒、角閃石を含む	
32	深鉢	口縁		外面キザミ	内外面ナデ	橙	にぶい 黄橙	2mm以下の乳白色粒を含む	波状口縁
33	深鉢	口縁		沈線間に貝殻腹縁刺突文	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	褐	褐	2mm以下の乳白色粒を含む	
34	深鉢	口縁		沈線間に貝殻腹縁刺突文、口唇部に刻み	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	灰黄褐	にぶい 黄	2mm以下の光沢・黒色・乳白色粒を含む	
35	深鉢	口縁		沈線間に貝殻腹縁刺突文口唇部刻み	内面貝殻条痕後ナデ	黒褐	黒褐	2mm以下の乳白色粒、白色粒を含む	波状口縁
36	深鉢	口縁		外面と口唇部に貝殻腹縁刺突	内面貝殻条痕 外面ナデ	明褐	橙	2mm以下の光沢粒、乳白色粒、黒色粒を含む	
37	深鉢	口縁		口唇部直下に縦位貝殻腹縁刺突文、その下に沈線	内外面ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	0.5mm以下の角閃石、2mm以下の半透明粒、乳白色粒を含む	波状口縁
38	深鉢?	頸部		沈線間に刺突文	内外面貝殻条痕後ナデ	赤褐	赤褐	4mm以下の乳白色粒を含む	
39	深鉢	口縁		外面貝殻腹縁刺突、口唇部工具キザミ	内外面ナデ	灰	灰	4mm以下の赤褐色粒を少量、1mm以下の白色粒と角閃石を含む	
40	深鉢	口縁		口唇部貝殻腹縁刺突文	内外面貝殻条痕	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の灰褐色、赤褐色粒を含む	波状口縁

第4表 土器観察表(2)

図面 番号	器種	部位	口径・底径 (cm)	文 様	調 整	色 外 面	色 内 面	胎 土 の 特 徴	備 考
41	深鉢	口縁		外面貝殻腹縁刺突文	内外面貝殻条痕後ナデ	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	2mm以下乳白色、褐灰色粒を含む	波状口縁
42	深鉢	口縁		外面半截竹管による連続刺突	内外面貝殻条痕後ナデ	にぶい 黄橙	橙	1mm以下の灰色粒を多く含む	
43	深鉢	口縁		外面巻貝の刺突文	内外面ナデ	灰黄褐	灰黄褐	1mm以下の灰色粒を含む	
44	深鉢	口縁		外面に斜方向の沈線	内外面ナデ	橙	橙	3mm以下の灰色粒を多く含む	外面上半と内面下半に煤付着
45	深鉢	口縁		斜方向の浅い沈線	内外面ナデ	にぶい 褐	赤褐	3mm以下の赤褐色、灰白色粒を密に含む	
46	深鉢	口縁		口縁部に斜方向の連続沈線	外面ナデ、内面工具ナデ	明赤褐	赤褐	5mm以下の乳白色粒を密に含む	
47	深鉢	胴部		斜方向の沈線	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の褐灰色、灰白色粒を含む	
48	深鉢	口縁		口縁部に斜方向の連続沈線	内外面ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の灰色、乳白色粒を含む	波状口縁
49	深鉢	口縁		口縁部に斜方向の連続沈線	貝殻条痕後ナデ	明赤褐	橙	3mm以下の光沢粒・乳白色粒・褐色粒を含む	
50	深鉢	口縁			内面ナデ 外面貝殻条痕後ナデ	灰黄褐	褐灰	1.5mm以下の灰白色粒、0.5mm以下のガラス状微粒子を少し含む	
51	深鉢	胴部		磨消縄文	内面ナデ	褐	褐灰	2mm以下の褐色粒、1mm以下の灰色粒を多く含む	外面に煤付着
52	深鉢	胴部		磨消縄文	内外面ミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	微細な白色粒、2mm以下の乳白色粒を含む	
53	深鉢	胴部		磨消縄文	内外面ミガキ	にぶい 褐	にぶい 褐	微細な光沢粒を含む	外面に赤色顔料付着
54	深鉢	口縁		磨消縄文	内外面ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	2.5mm以下の褐色粒、角閃石を含む	波状口縁
55	深鉢	口縁		磨消縄文	内外面ミガキ	にぶい 黄	にぶい 黄	2mm以下の灰色、乳白色粒を含む	
56	深鉢	口縁		充填縄文 口唇部にキザミ	内外面ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の乳白色、灰色、光沢粒を含む	
57	深鉢	口縁		磨消縄文	内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	にぶい 褐	灰黄褐	7mm以下の灰色、乳白色、褐色粒を含む	
58	深鉢	口縁		疑似縄文	内面ミガキ 外面ナデ	明褐	にぶい 褐	3mm以下の灰色粒を多く含む	波状口縁
59	深鉢	口縁		外面沈線	内外面ナデ	暗褐	暗褐	5mm以下の灰色、褐色、乳白色粒を含む	
60	深鉢?	口縁		口唇部沈線と刺突	内外面ミガキ	にぶい 黄褐	黒褐	角閃石、雲母、乳白色粒を含む	
61	深鉢?	口縁		口縁部内面に1条の沈線	内外面ナデ	明赤褐	明赤褐	2mm以下の乳白色粒、灰色粒を含む	
62	深鉢	口縁			内外面ミガキ	明赤褐	にぶい 赤褐色	3mm以下の灰色、淡黄色粒を多く含む	
63	深鉢	口縁			内面貝殻条痕後ナデ 外面ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	4mm以下の赤褐色、灰色粒を多く含む	
64	深鉢	底部	10.7	底部に編物圧痕	内外面ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下の赤褐色・灰色粒を多く含む、白色粒を少量含む	網代
65	深鉢	底部	10.5	底部に編物圧痕	内面ナデ 外面貝殻条痕後ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	3mm以下の赤褐色粒を多く含む	網代
66	深鉢	底部		底部に編物圧痕	内面ナデ	にぶい 黄橙	浅黄橙	3mm以下の赤褐色粒を多く含む	網代
67	深鉢	底部	10.7	底部に編物圧痕	内面貝殻条痕後ナデ、 外面ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の赤褐色・灰色・白色粒を多く含む	振り編み
68	深鉢	底部	9.4	底部に木葉圧痕	内面ナデ、外面ナデ、 指オサエ	浅黄	にぶい 黄	雲母少量、1mm以下の黄褐色・灰色粒を含む	
69	深鉢	底部	11.6		内外面ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の赤褐色、乳白色粒を含む	
70	深鉢	底部	8.6		内外面ナデ	橙	にぶい 褐色	4mm以下の灰白色粒を多く含む	上げ底
71	深鉢	底部	9.1		内面ナデ、外面ナデ、 指オサエ	橙	にぶい 褐	5mm以下の赤褐色・白色粒を多く含む	上げ底
72	深鉢	底部			内面ナデ、外面丁寧な ナデ	明赤褐	にぶい 赤褐色	2mm以下の淡橙色・灰白色粒を含む	上げ底
73	深鉢	底部	5.1		内外面ナデ	にぶい 黄橙	橙	1mm以下の灰白色・灰色粒を含む	平底
74	浅鉢	底部	6		内外面ミガキ	褐	橙	1mm以下の灰色粒を含む	上げ底気味
75	甕	底部	5.9		内外面ナデ	灰褐	にぶい 褐	1mm大の赤褐色粒を少量含む	上げ底 弥生土器

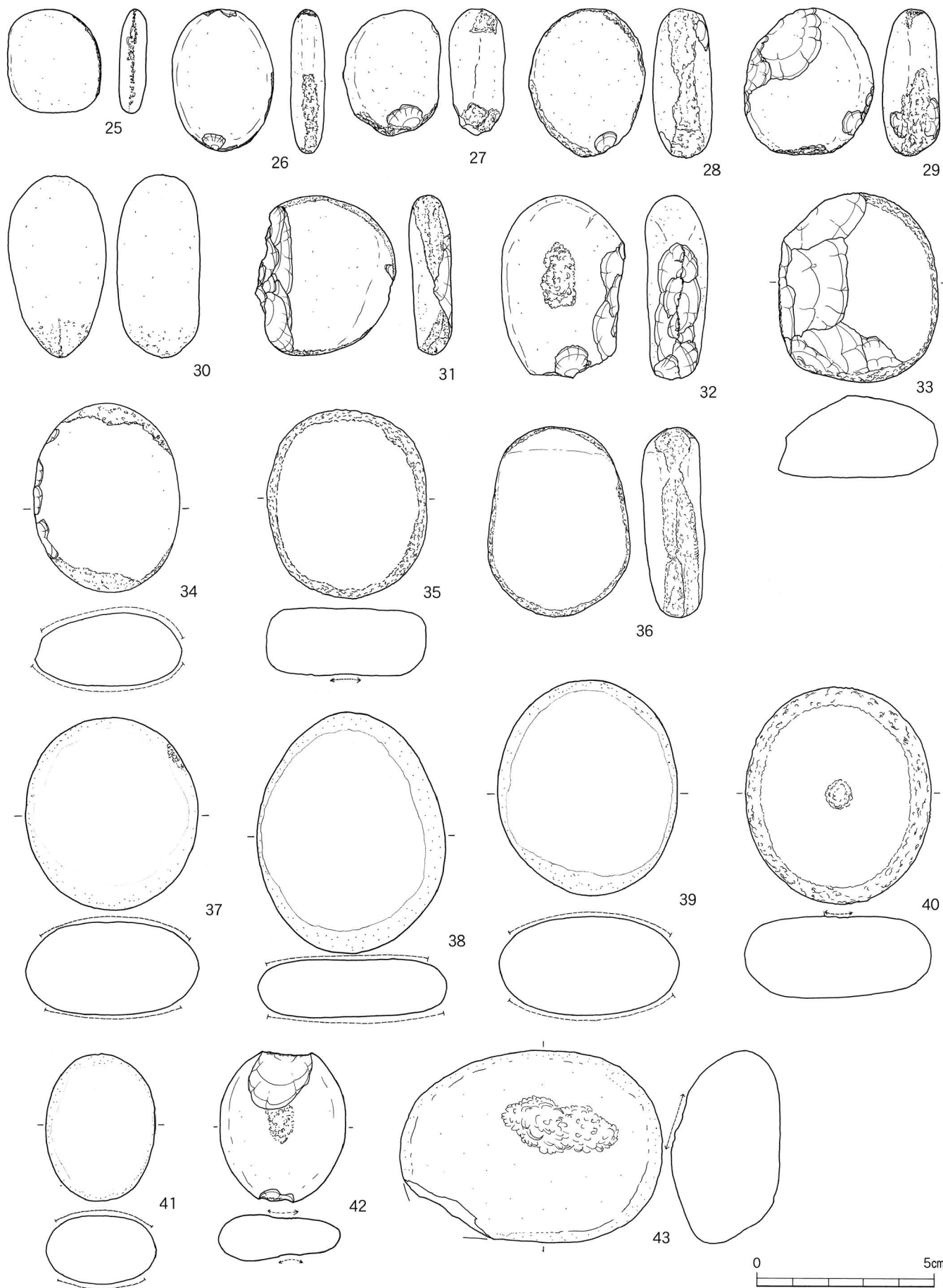


第10図 出土石器 (1) (62~65=2/3、61・66=1/4、他は1/2)

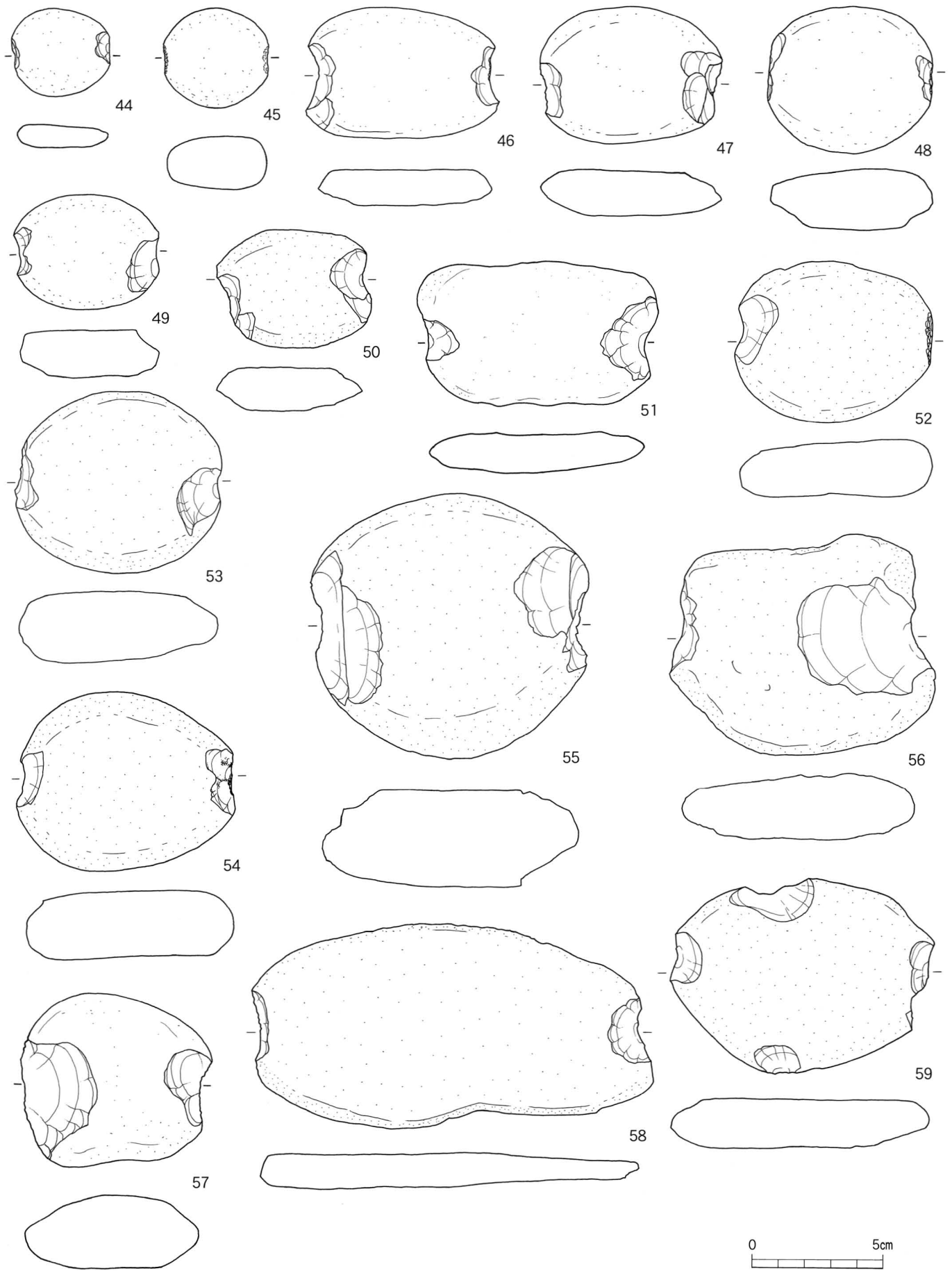


第11図 出土石器 (2) (S=1/2)

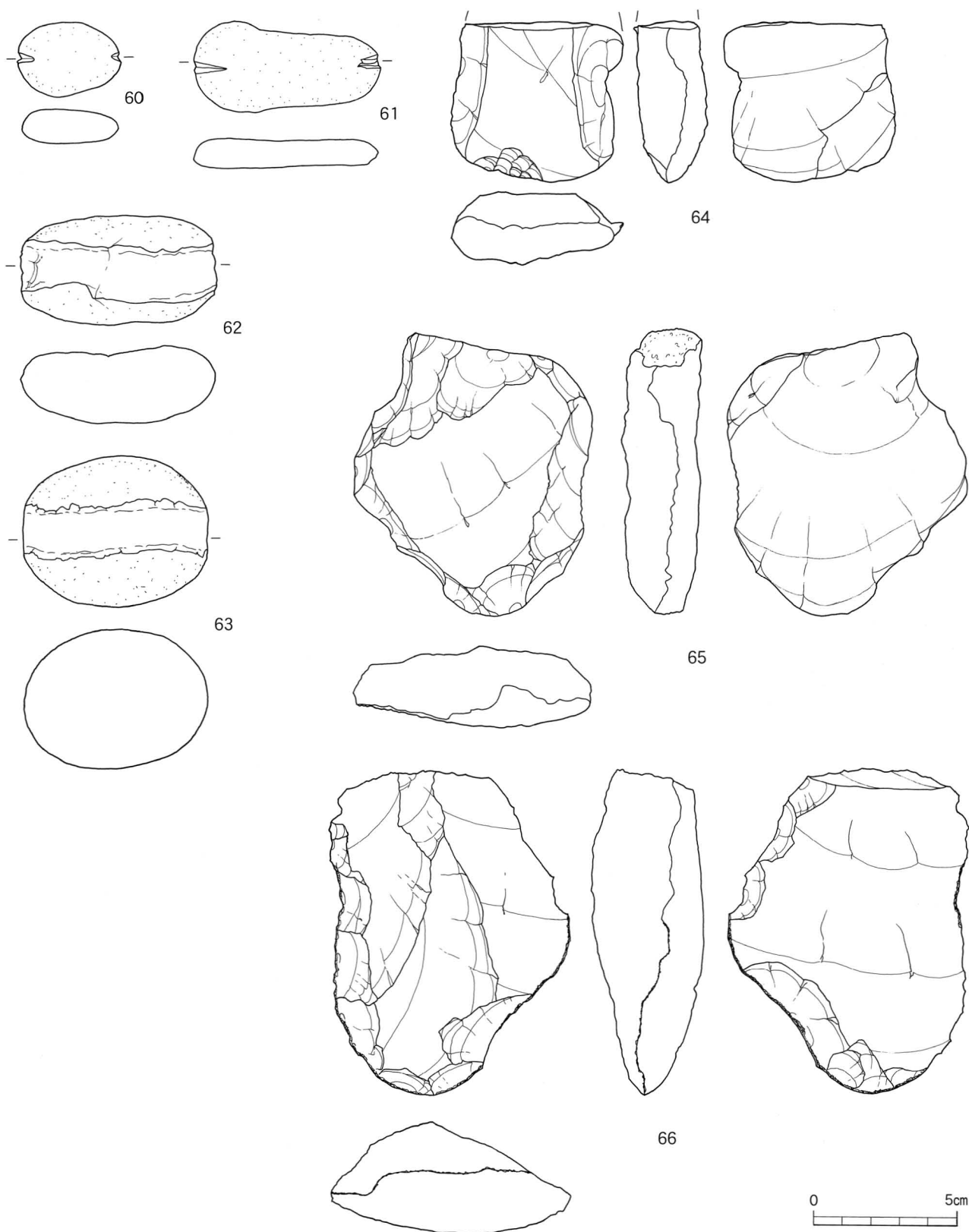




第12図 出土石器 (3) (S=1/3)



第13图 出土石器 (4) (S=1/2)



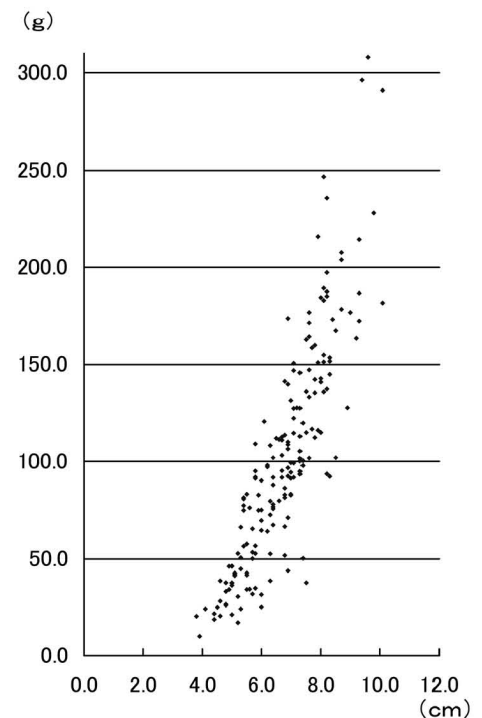
第14图 出土石器 (5) (S=1/2)

第5表 石器観察表(長・幅・厚=cm/重量=g)

図面番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
1	細石刃	ホルンフェルス	1.5	0.7	0.2	0.2	
2	打製石鏃	チャート	1.3	1.4	3.1	0.7	
3	打製石鏃	ホルンフェルス	2.5	1.7	0.5	1.4	
4	石匙	チャート	1.9	3.4	0.7	4.0	
5	石核	ホルンフェルス	7.4	6.6	4.1	205.6	風化進んでいない
6	石核	ホルンフェルス	7.4	9.3	7.1	592.1	
7	石核	ホルンフェルス	8.7	6.5	3.0	153.1	
8	周縁加工石器	ホルンフェルス	10.5	8.6	1.8	216.3	扁平
9	周縁加工石器	ホルンフェルス	8.3	5.7	2.6	140.1	
10	石皿	砂岩	24.6	16.4	7.0	5000.0	
11	石皿	尾鈴山酸性岩類	27.1	37.4	13.0	22000.0	
12	刃部磨製石斧	ホルンフェルス	7.5	4.5	2.0	83.3	
13	打製石斧	ホルンフェルス	10.6	5.7	1.7	109.2	
14	打製石斧	ホルンフェルス	9.6	6.4	1.9	119.6	有肩形
15	磨製石斧	ホルンフェルス	10.8	5.9	3.6	188.1	
16	刃部磨製石斧	ホルンフェルス	9.0	4.5	1.7	90.3	
17	刃部磨製石斧	ホルンフェルス	10.5	5.0	2.8	187.1	
18	刃部磨製石斧	ホルンフェルス	9.5	4.9	2.7	165.2	
19	磨製石斧	ホルンフェルス	6.4	2.8	1.6	33.7	鑿形
20	磨製石斧	砂岩	10.0	4.4	1.6	98.9	
21	磨製石斧	ホルンフェルス	10.9	4.1	1.7	93.9	
22	磨製石斧	砂岩	9.9	5.7	3.9	343.2	
23	磨製石斧	ホルンフェルス	12.8	5.8	3.8	348.6	
24	磨製石斧	砂岩	17.6	5.8	4.5	565.4	
25	敲石	砂岩	5.8	5.3	1.6	82.7	
26	敲石	砂岩	8.0	5.7	2.0	140.5	
27	敲石	尾鈴山酸性岩類	7.1	5.5	3.2	173.8	
28	敲石	尾鈴山酸性岩類	8.5	6.5	3.4	269.0	
29	敲石	尾鈴山酸性岩類	8.3	7.4	3.3	272.7	
30	敲石	尾鈴山酸性岩類	10.3	5.6	4.7	383.5	
31	敲石	緑色砂岩	9.1	7.9	2.4	262.2	
32	敲石	砂岩	12.5	7.0	3.6	353.6	
33	磨石	尾鈴山酸性岩類	17.0	9.0	4.6	731.9	敲石兼用
34	磨石	砂岩	10.7	8.3	4.2	539.9	敲石兼用
35	磨石	尾鈴山酸性岩類(花崗岩か)	10.7	9.0	3.8	612.4	敲石兼用
36	敲石	緑色砂岩	10.7	8.6	3.6	500.7	
37	磨石	尾鈴山酸性岩類	10.9	9.7	5.2	825.8	敲石兼用
38	砥石	砂岩	13.6	10.7	3.3	716.8	
39	磨石	尾鈴山酸性岩類	12.2	10.1	5.6	1034.1	
40	磨石	尾鈴山酸性岩類(花崗岩か)	12.3	10.5	4.6	911.9	敲石・凹石兼用
41	磨石	尾鈴山酸性岩類	8.3	6.2	3.9	302.6	
42	凹石	砂岩	8.5	7.0	2.5	296.6	打欠石錘の転用
43	台石	砂岩	14.7	10.9	6.1	1341.8	
44	打欠石錘	砂岩	3.7	3.3	0.9	18.3	
45	打欠石錘	砂岩	3.9	3.8	2.0	45.4	
46	打欠石錘	砂岩	5.0	7.4	1.4	83.7	
47	打欠石錘	砂岩	4.9	7.0	1.8	99.9	
48	打欠石錘	砂岩	5.6	6.3	2.3	125.0	
49	打欠石錘	砂岩	5.5	4.3	1.8	68.2	
50	打欠石錘	砂岩	4.5	5.9	1.6	65.6	
51	打欠石錘	尾鈴山酸性岩類	9.1	5.5	1.7	125.6	
52	打欠石錘	ホルンフェルス	6.2	7.6	2.2	154.4	
53	打欠石錘	尾鈴山酸性岩類	7.0	7.9	2.7	209.6	
54	打欠石錘	砂岩	6.9	8.4	2.6	212.3	
55	打欠石錘	変成岩類	11.0	10.6	3.7	581.0	
56	打欠石錘	尾鈴山酸性岩類	8.4	10.1	2.6	296.5	
57	打欠石錘	尾鈴山酸性岩類	7.3	6.6	2.8	196.9	
58	打欠石錘	砂岩	7.9	15.3	1.4	281.7	
59	打欠石錘	砂岩	7.4	10.5	1.9	194.9	
60	切目石錘	ホルンフェルス	2.6	3.7	1.2	15.1	
61	切目石錘	砂岩	3.2	6.5	1.1	31.8	
62	有溝石錘	砂岩	3.9	6.9	2.7	124.5	
63	有溝石錘	尾鈴山酸性岩類	5.3	6.4	4.9	245.0	
64	礫器	尾鈴山酸性岩類	5.6	6.0	2.6	104.3	
65	礫器	尾鈴山酸性岩類	9.8	8.3	2.8	275.2	
66	礫器	尾鈴山酸性岩類	11.4	8.3	3.9	363.8	

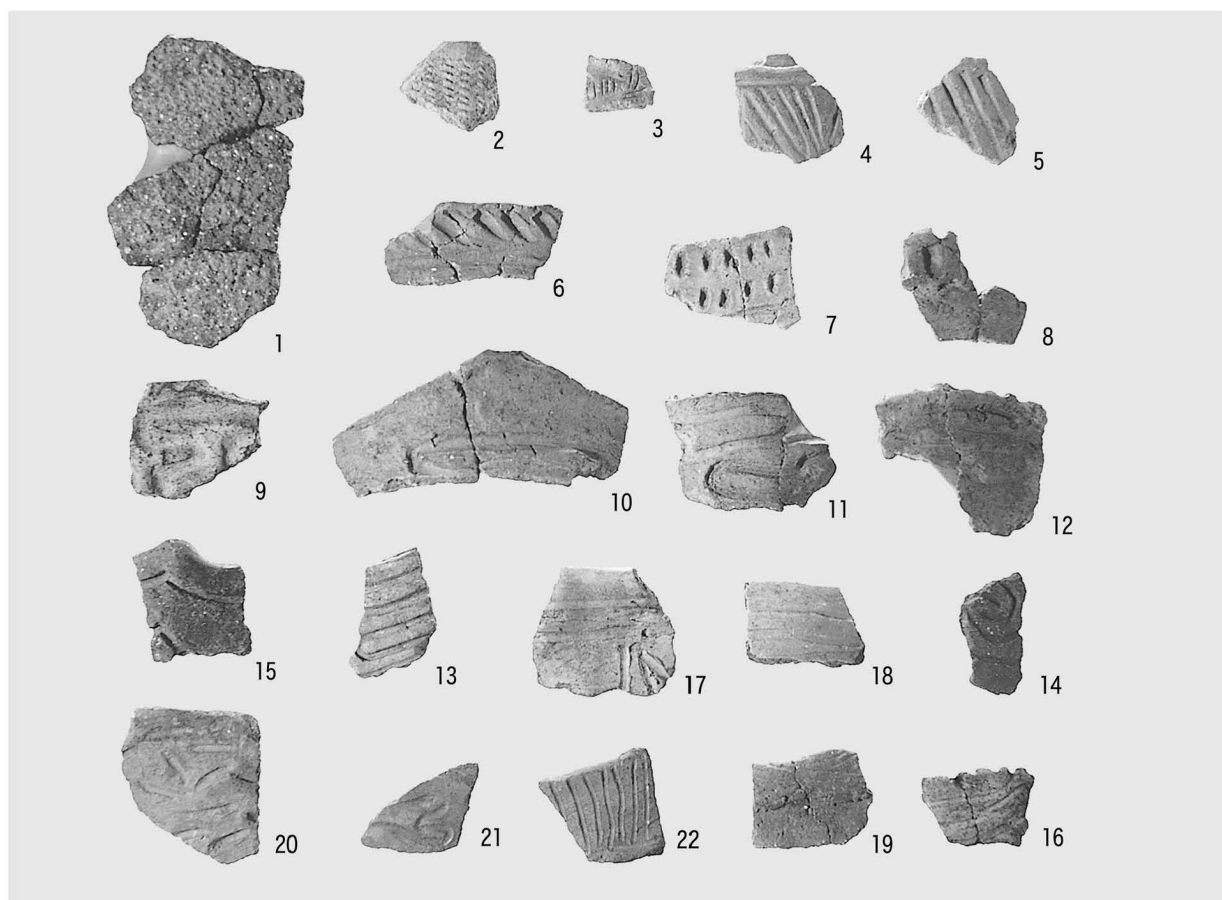
第6表 石器石材分類

石材	器種	重量(g)	備考
チャート	打製石鏃1 石匙1 剥片5	47.6	大形剥片1
赤チャート・石英	剥片2	6.2	
姫島産0b	剥片5	10.6	
桑ノ木津留産0b	剥片2	0.7	
南九州産0b	剥片5	6.0	
	細石刃1・ 打製石鏃1	1.7	
ホルンフェルス・砂岩	剥片	42400.0	
	石皿	5000.0	
尾鈴山酸性岩類	礫器	1152.0	
	石皿	102800.0	
	剥片	42400.0	
	磨石・敲石 石錘	47278.8 18840.1	

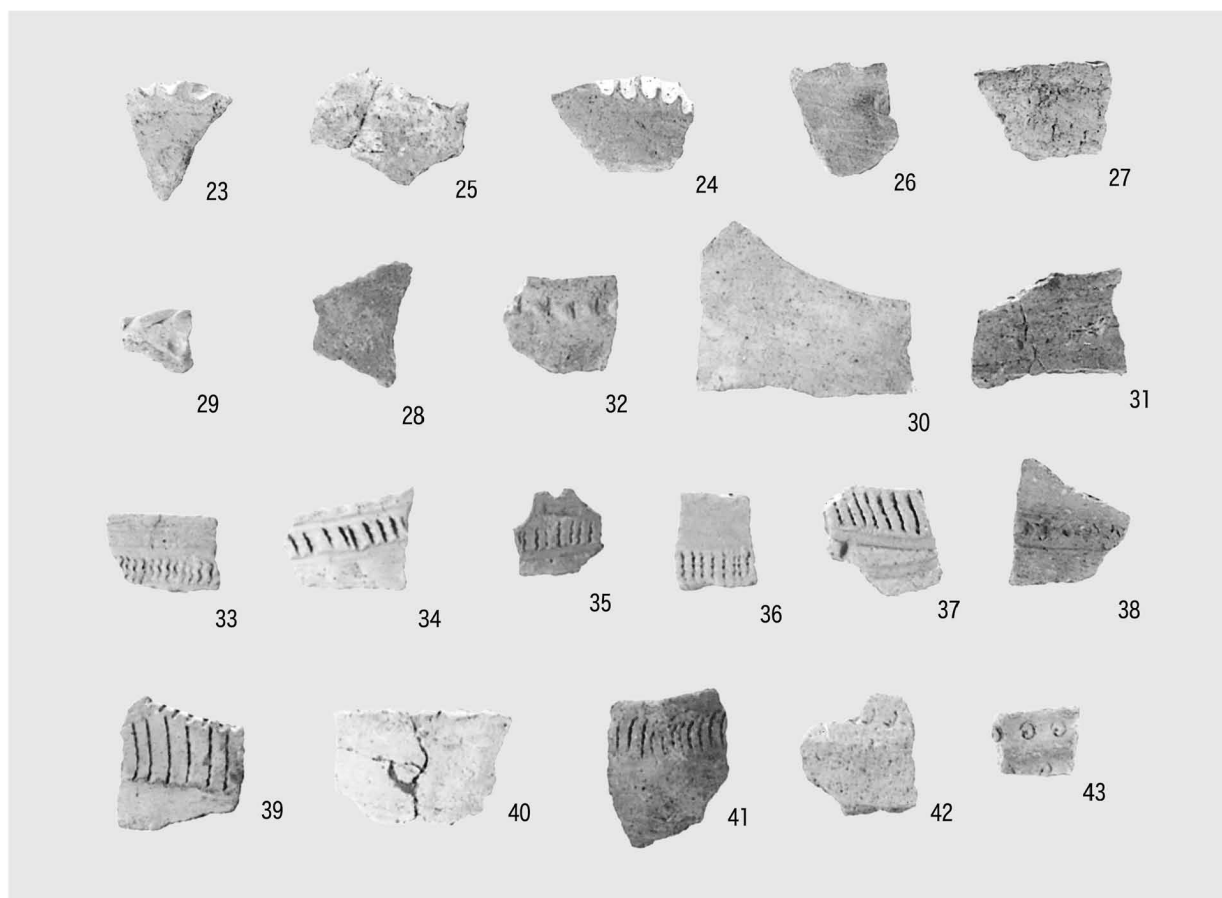


第15図 石錘の長軸と重量の関係

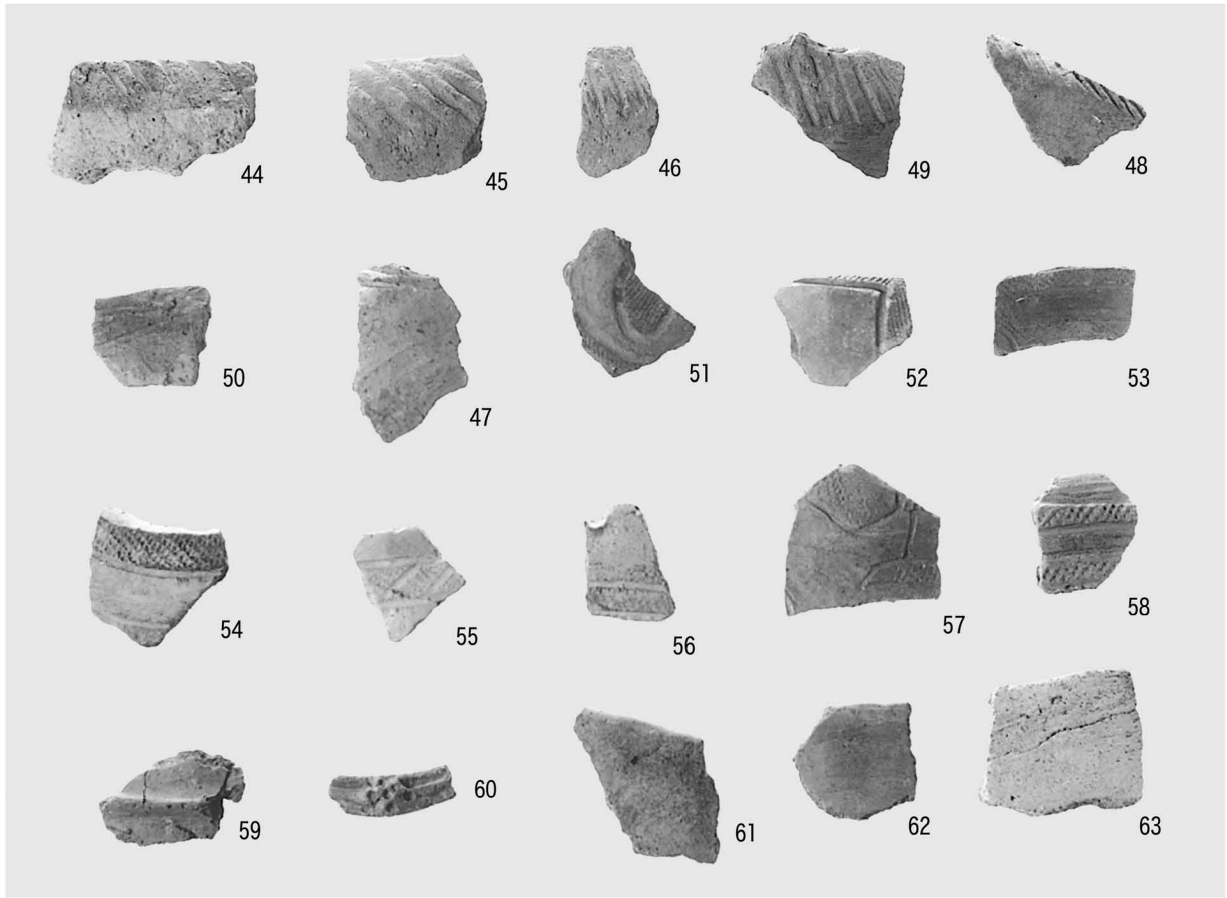




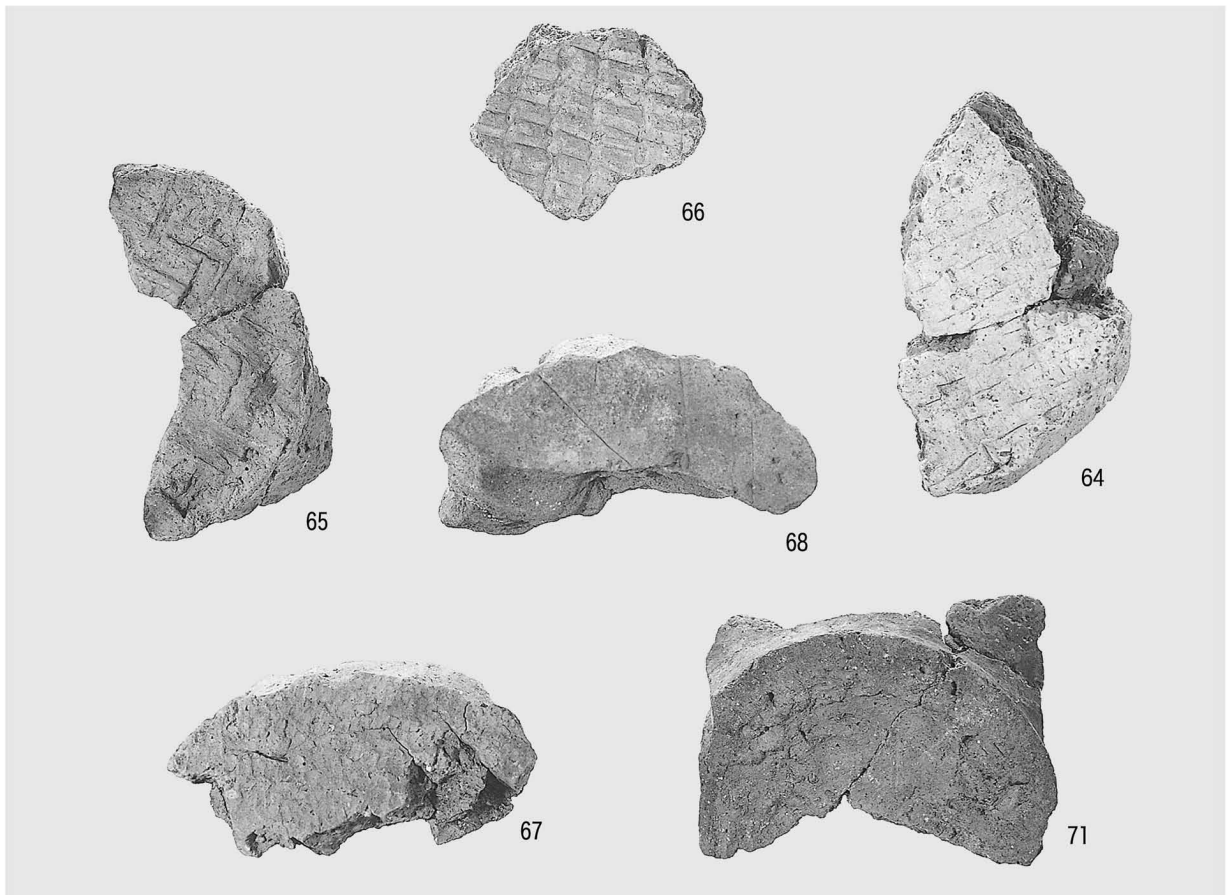
出土土器 (1)



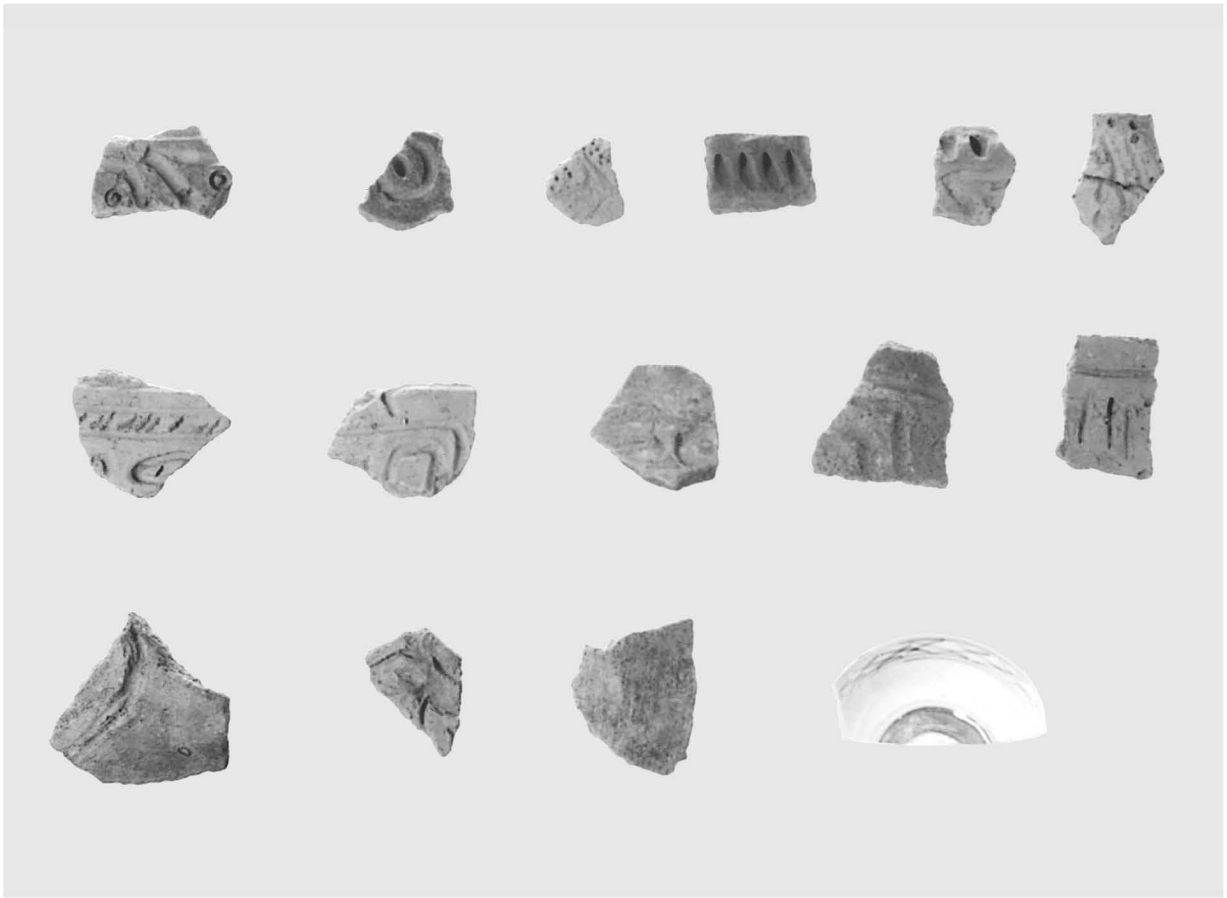
出土土器 (2)



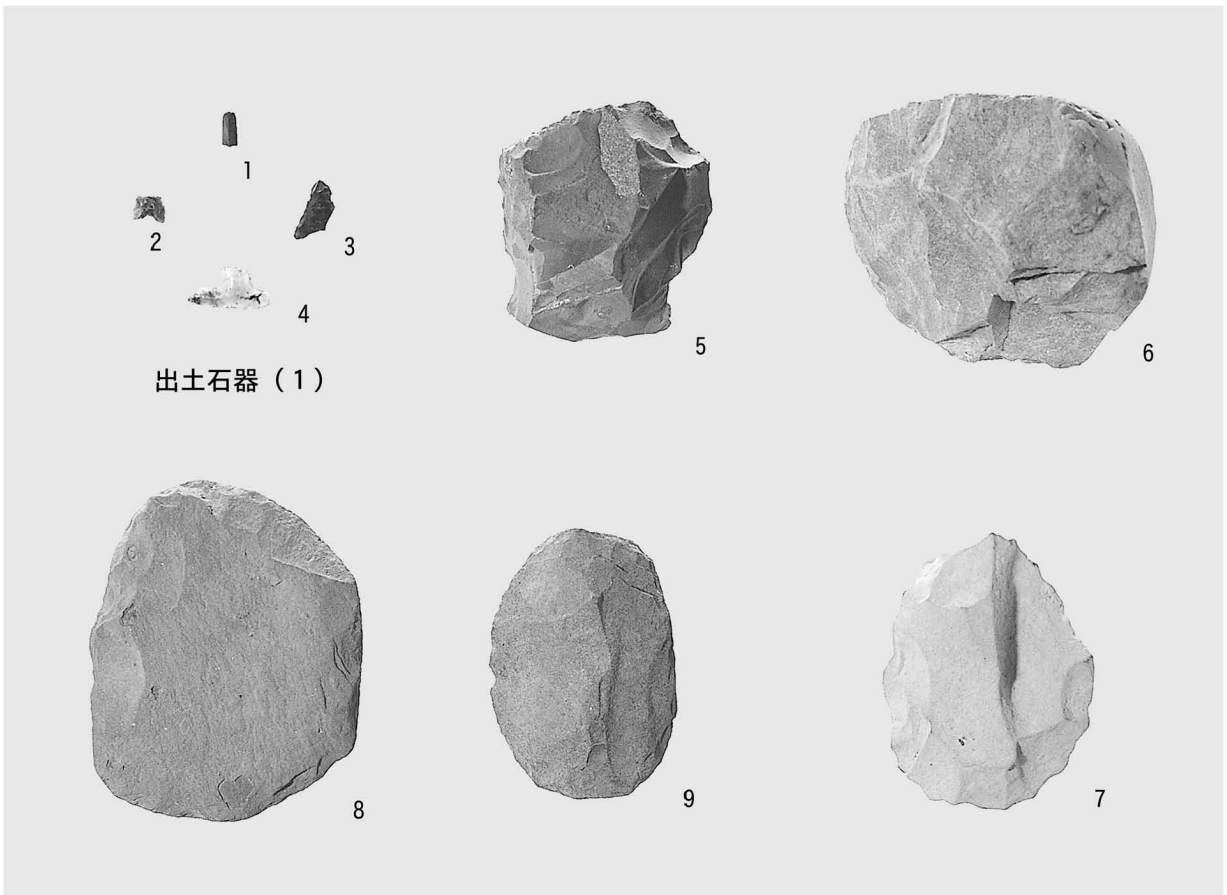
出土土器 (3)



出土土器 (4)



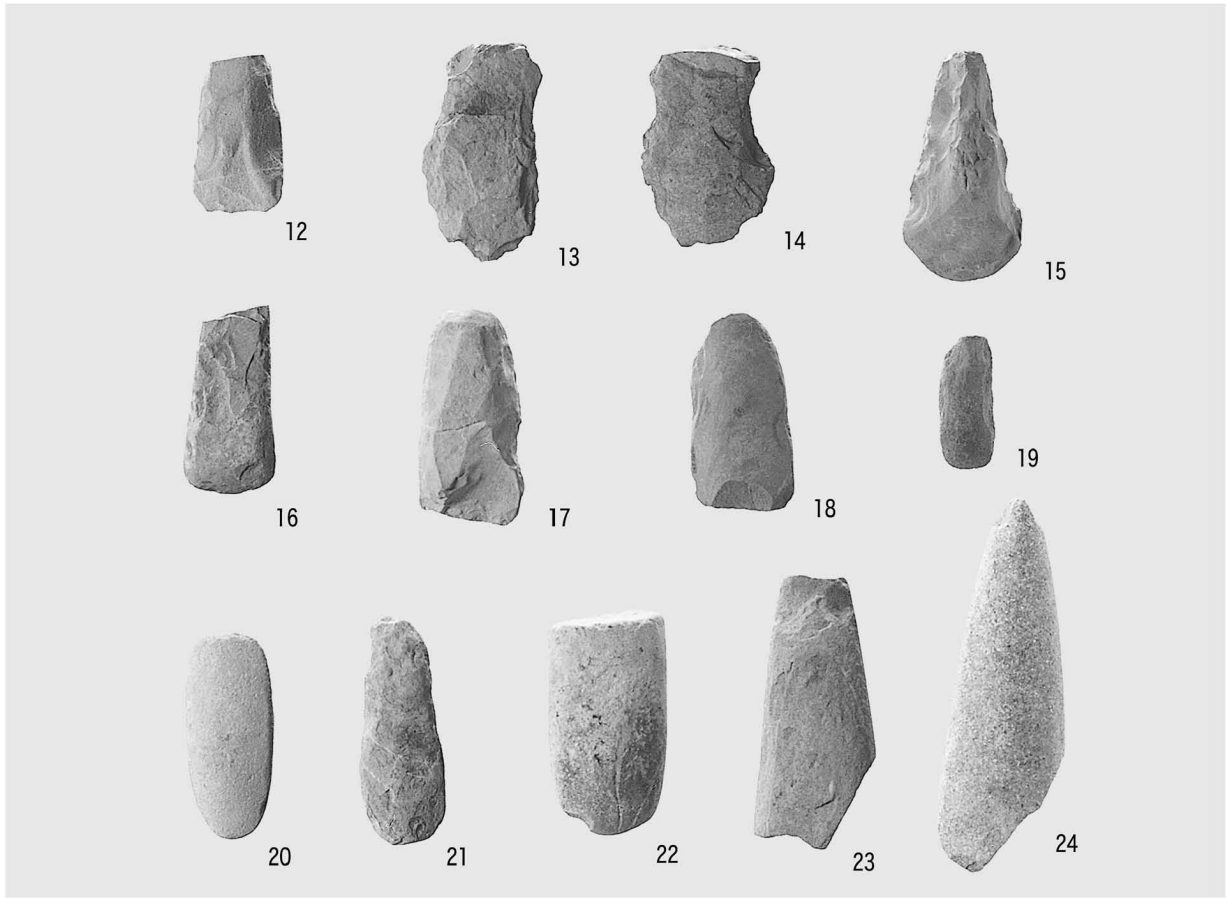
参考資料（土器）



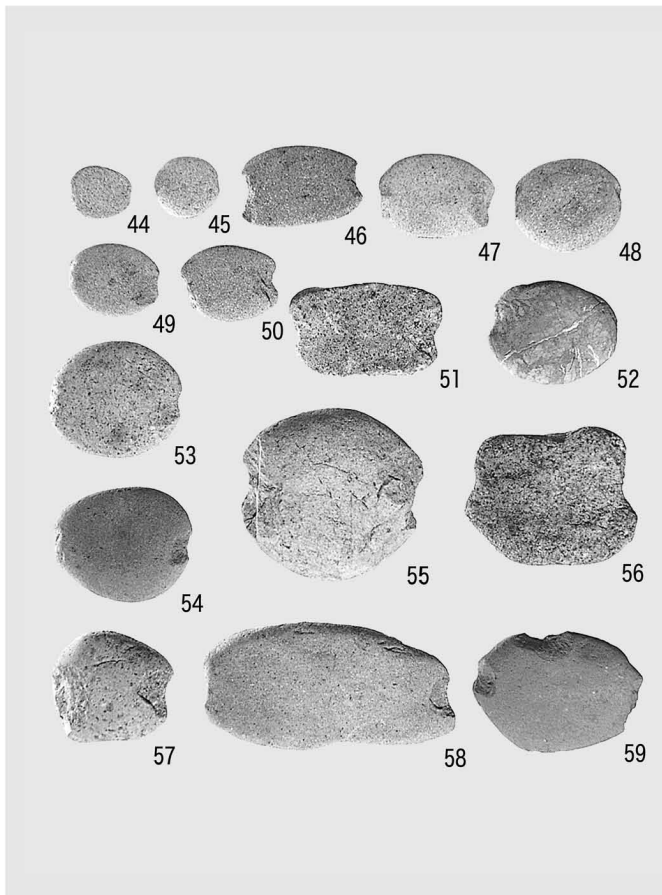
出土石器（1）

出土石器（2）

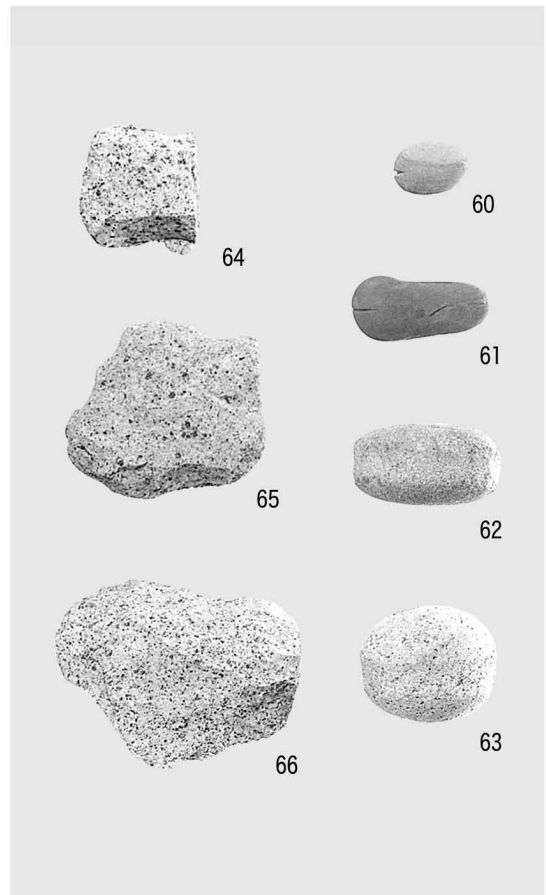




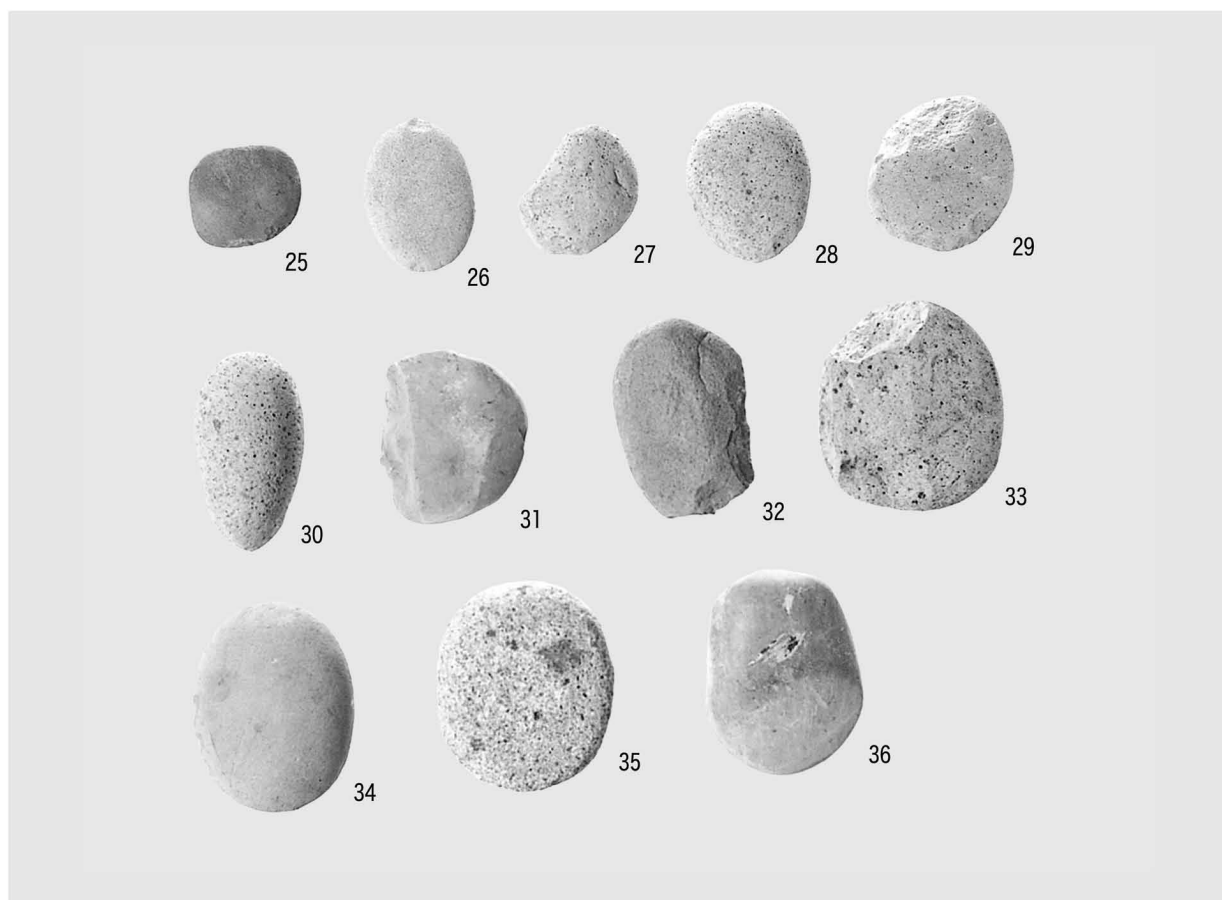
出土石器 (3)



出土石器 (4)



出土石器 (5)



出土石器 (6)



出土石器 (7)



出土石器 (8)



# 報告書抄録

ふりがな	いちなわかみだい1いせき		いちなわかみだい4いせき					
書名	市納上第1遺跡		市納上第4遺跡					
副書名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書26							
巻次								
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第121集							
編著者名	森本 征明 岡田 諭							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	2006年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちなわかみだいいち 市納上第1 遺跡	みやざきけん こ づぐん 宮崎県児湯郡 かわみなみ ちやう おおあざ 川南町大字 かわみなみあざいちなわかみ 川南字市納上	45405		32度 13分 4秒 付近	131度 29分 47秒 付近	2004.2.20 ～ 2004.10.12	5700㎡	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査
いちなわかみだいよん 市納上第4 遺跡 (確認調査)	みやざきけん こ づぐん 宮崎県児湯郡 かわみなみ ちやう おおあざ 川南町大字 かわみなみあざのぼりたて 川南字職立	45405		32度 13分 49秒 付近	131度 29分 37秒 付近	2004.5.24 ～ 2004.7.14	200㎡	
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
いちなわかみだいいち 市納上第1 遺跡	散布地	旧石器時代		ナイフ形石器 敲石, 石核				
	集落	弥生時代	縦穴住居1軒 周溝状遺構1基 溝状遺構1条	弥生土器, 石器				
		中世		土師器				
いちなわかみだいよん 市納上第4 遺跡 (確認調査)	散布地	縄文時代(後期)		縄文土器, 石器				

---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第121集

市 納 上 第 1 遺 跡  
市 納 上 第 4 遺 跡

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書26

2 0 0 6 年 3 月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 株式会社ヒダカ印刷

〒880-0862 宮崎市潮見町13-5

TEL0985(28)4113

---

---